明治三十八年一月一日發行（毎月一回）
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

女子文壇

花圃

第壹巻
第壹號



三宅花圃女史題字　山中古洞畫

東京
女子文壇社發兌

聖路易萬國大博覽會に於て銀牌受領



初日の出

（三宅克己氏筆）



東京三間印行

女子文壇

第壹巻第壹號

一月一日發兌



發刊の辭

日本の連戰連勝は年來の小學敎育に淵源すとは、澳國新聞紙の評言にして、所謂文事ある者は必ず武備あり。文なきの國は到底眞武ある能はざるの至理を視るべきなり。

顧ふに文武を分つときは、文事は女子の專技にして、武事は男子の特長たり。將來國運の發展に鑑み、新國民を養成し、益す我が武國の武を輝かさんには、女子の文藝を奬勵するより急なるはあらじ、女子文壇の發刊豈に已むことを得んや。

今茲今日を以て、本誌第一號刊成る、乃ち一言旨趣を述べて、謹んで同人の敎を請ふと云。

名譽賛成員

(イロハ順次第不同)

巖谷小波君
文藝倶樂部記者　石橋思案君
石井研堂君
醫學士　石原喜久太郎君
二六新聞記者　江見水蔭君
東京府女子師範學校教諭　岩本ふく子君
東京府師範學校訓導　今村武男君
帝國大學、高等師範、日本女子大學教授　文學博士　萩野由之君
慶應義塾教授　林毅陸君
太陽記者　長谷川天溪君
女子教育奨勵會幹事 東京女學館　西田敬止君
島根縣女子師範學校教諭　錦織竹香君
衆議院速記者　新井田次郎君
太陽記者　鳥谷部春汀君
東儀鐵笛君
獨逸學協會早稲田大學講師　文學士　長連恒君
東京女子高等師範學校教授　文學士　尾上柴舟君
文學士　大町桂月君
獨逸學協會學校長　大村仁太郎君
大和田建樹君
大塚楠緒子君
仙臺第一中學校教諭　大宮宗司君
東京府女子師範學校教諭　大塚治六君
東京府女子師範學校教諭　岡田ふみ子君
女子圖案會理事　岡不崩君
東洋女藝學校講師　岡みち子君

醫學士　岡本武次君
博文館發行 戰爭實記記者　押川春浪君
新潟縣女子師範學校長　川面衛松君
市立下關商業學校教諭　川崎又次郎君
川崎默堂君
河合英忠君
醫學士　樫田龜一郎君
福岡縣東筑中學校長　金澤來藏君
鏑木清方君
女學世界記者　勝間恒彦君
春日廓悟君
吉田晩稼君
武内桂舟君
文藝倶樂部記者　武田櫻桃君
攻玉社教師　竹貫登代多君
少年世界記者　竹貫直人君
東京心性學館主　高橋邦三君
大阪新報社總務部長　高橋雄峰君
田邊太一君
醫學士　田村光顯君
太陽記者　田山錄彌君
市立甲府商業學校長　田崎要君
中學世界記者　鷹野止水君
博文館編輯局主幹　坪谷善四郎君
津田梅子君
土谷詮教君
早稲田大學講師 東京中學校教師　中內蝶二君
文學士　中濱東一郎君
醫學博士　中村千代松君

名譽贊成員

(イロハ順次第不同)

三井同族會書記長　成瀬隆藏君
日本女子大學校　成瀬仁藏君
中里峻峰君
東京府女子師範學校教諭　永田とめ子君
學習院教授　南日恒太郎君
農科大學講師文學士　村上辰午郎君
村岡良弼君
中學世界記者　上村左川君
博文館出版部長　內山正如君
文學士　久保天隨君
熊本私立尚絅高等女學校教諭　栗田正治君
文學士　栗林己巳藏君
法學士　熊倉操君
學習院教授　山口弘一君
博文館支配人　山田靜三君
高等師範學校教授　山田萬太郎君
山中古洞君
在農科大學　矢田鶴之助君
東京府共立女子學校監督　松井康義君
萬朝報記者　松井柏軒君
女學世界記者　松原廿三階堂君
前田曙山君
福井學圃君
東京女學館教授　國分操子君
太陽記者　國府犀東君
東京府女子師範學校教諭　小寺あや子君
加持世界記者　小林雨峰君
文學士　幸田成友君
農學士　近藤仙吉郎君

文學博士　姉崎正治君
東京女子高等師範學校教授　東基吉君
竹柏園主幹　佐々木信綱君
東京女子高等師範學校教授　佐藤球君
醫學士　佐々倉永三郎君
獨逸學協會學校講師　佐藤吉次君
橫濱商業學校教諭　坂本盛一君
市立下關商業學校長　齋藤軍八郎君
學習院教授　北里闌君
太陽記者　岸上質軒君
少年世界記者　木村小舟君
日本女子大學校教授　三宅花圃君
三宅克巳君
都新聞記者　宮川鉄次郎君
博文館出版部　宮川大壽君
日本女子大學校教授文學士　盬井雨江君
獨逸學協會學校講師文學士　芝葛盛君
獨逸學協會學校講師文學士　志田義秀君
愛國女學校講師　京華中學校教諭　鹿田熊八君
東京府女子師範學校教諭　神通せき子君
從二位伯爵　東久世通禧君
廣津柳浪君
獨逸學協會學校講師　守屋荒美雄君
本居直臣君
雪中庵雀志君
學習院教授　杉田義雄君
慶應義塾教授　菅緑蔭君

(以上は本號〆切迄に快諾を得たる芳名なり)

一巻第壹號　女子文壇　目次



謹賀新年



本舗 東京市日本橋通四丁目（電話本局千九十七番）津村順天堂

支舗 大坂市堺筋大寳寺町南（電話東二百七十八番）津村順天堂

ハガキ文學

第壹號 好評嘖々 九版出來

—(第壹號目次)—

第貳號 益々好評 五版出來

第二卷壹號より大改頁大刷新●第二卷第壹號より毎號大家の繪葉書を附録とす

—《第貳號目次》—

—《第參號目次》—

發行所
東京小石川區久堅町
日本葉書會

胃活

右は明治二十七八年戰役後我國民の體格に付て余等大に感ずる處あり即ち日本人の普通病なる胃病患者を救濟するの目的を以て學理と實驗とにより共同研究の結果發見したる胃病新藥にして効能確著誠に驚くべし之を廣く天下に弘布し世の胃病患者を救はゞ實に大日本國民の幸福なり

陸軍軍醫監正五位 長瀨時衛 印
陸軍藥劑監從六位 石塚左玄 印
海軍軍醫少監從六位 日向次作 印
海軍大軍醫正七位 横井太郎 印
海軍大軍醫正七位 門倉梅三郎 印

登錄商標



効能

●溜飲●胃弱●慢性胃弱●胃加答兒●胃痛●胃痙●食慾不進●胸痞●宿醉●惡心嘔吐●呑酸嘈雜●腹滿●食傷等一般の胃病に著大の効能ある靈藥なり論より證據二三週間分を試めし玉へ

●官吏●教師●僧侶●學生●商人●銀行●會社員●婦人●店員其他坐業に從事して、常に運動不足し、精神を勞する人は、平素に持藥として少量宛の胃活を用ひ玉はゞ、食物の消化を助け、血液の循環を善くし身心を活潑ならしむ

注意

●藥は可成高きものを買玉へ●藥は可成思ひ立たる時に買玉へ●全國有名藥店にて請賣す●若し最寄になき時は發賣元へ注文あれ●全國無遞送

定價	
一週間分	貳拾五錢
二週間分	四拾五錢
三週間分	六拾五錢
五週間分	壹圓

發賣本舖 東京銀座一丁目廿三番地 大阪南久寶寺町堺筋東入 山田安民藥房

心の花

第九巻第一要目

主幹 佐々木信綱

定價一册金拾三錢半年金七十五錢

發行所 日本橋區本石町一丁目 竹柏會出版部

一 本學館應用部に於て生理的心性學、實驗的神經系生理學等の最新の學理に基き教養上の諸問或は心理的治療等の需に應ず其個條を大別すれば左の如し

第一 子弟の腦力心性を知悉し置きて教養上の參考に資し後來の發育を善良に導かんとする者或は惡癖精神的障礙ある子弟の矯正治療を要する場合

第二 青年の學生にして自己の腦力心性を詳知し之に應當せる修練を施さんとし或は其心性躰質に適當せる職業配適者を求めんとする者

第三 智性心力衰弱のため修學上處世上諸般の困難を被れる者が其病機を除却して腦力神經力を增進せんと欲する場合

第四 機能性諸疾患の心理的治療を受けんと欲するもの

但し第一乃至第三の場合には受驗者に腦髓發達表若しくは心性表を調製して渡すものとす

一 腦力驗診料は金壹圓とす但し學生軍人は特に半減す心理的治療腦力增進等は初回金壹圓次回以下每回金三拾錢とす但し事情により減料することあるべし

一 往診の場合には市内市外共別に料金を協定すべきものとす

東京市赤坂區仲ノ町廿一番地 **東京心性學館**

家庭教育の警鐘



軍國婦人の任務

坪谷水哉

男子は外に働らき、女子は内を治む。是れ東洋流の家庭に於て、古來一定の準則として、何人も之を疑ふ者なし。此の家庭の準則は、世の進化とゝもに、多少の更正を加へ、女子とても絶對に内にのみ閉居することなく、女子相應なる職業を求めて、外にも働らき、男子とても、内を顧りみずして外にのみ働らくことの穩當ならざるは、漸く悟らるゝに至りたり。然ども或る程度まで、女子は内を治め、男子は外に働らくといふ眞理は、今も決して之を破るを得ず。是れ男女自然の體格と性質とは、東西を通じて然るが如く賦與せられたるを以てなり。

男子は剛毅活潑にして、外に出でゝ働らくに適し、女子は溫順柔和にして、内を治むるに宜きは、誰かまた之を疑はん。故に世には鬚眉男兒をして避易せしむる女丈夫の現出すること無きにあらねど、二十世紀の世界には、また巴御前、板額女をして、兵役に服せしむるの必要なし。

女子は既に兵役の義務無し。然らば目今の如き時局に臨むも、護國の任は、一に之を出征の軍人に任せ、女子は之に關係せざるか。否。今日とても、我が同胞の婦人は、皆な間接に盛に敵と戰ひつゝあり。唯だ自ら銃を執て陣頭に起たざるのみ。彼の銃を提げて敵前に奮闘する軍人の背後には、婦人の應援あつて始めて能く遺憾なく勇戰せしむるなり。

余曾て筆を携へて戰地に從へるとき、凡そ出征の軍人は、將校は言ふも更なり。下士兵卒に至るまで、其の出身の農夫たり、職工たりまた商人たるに論なく、一たび敵と對すれば、獅子奮迅の勇氣を奮ひ、生命を鴻毛よりも輕んじて戰ふ狀態は、彼等の鄕里に在るときとは全く別人の觀なり。乃ち平時農工商の子弟として優しく其業に服する者、一たび陣に臨めば、人ごとに皆な昔時封建時代の武士と化す。嘗に劍を帶び銃を荷

ふ形の、武士と爲るのみにはあらず、其の精神まで全たく武士と化せり。國の爲に戰ふて斃れざれば止まず。百千萬の兵士皆な此の如し。豈立派なる武士にあらずや。而して彼の溫厚なる農工商家の子弟をして、一朝此の如く精神より武士と化せしむるは何の故ぞ。余は餘りの不思議に、之を親しく彼等に聞けば、實に彼等の郷里にある總ての男女老幼一齊の後援は、端なく出征者をして我知らずに武士と化せしめたるなり。彼等出征者が、生命を惜まずして勇戰するもの、之を高尚に言へば、君國の爲に戰ふに相違なきも、最も卑近に眞相を說明せば、出發の際、郷里に於て、老爺も老嫗も、青年も少女も、一齊に其の行を送り、萬歲の聲沸くが如くなりし厚意と、出征の後も、或る者は戰地まで慰問品を送り、或る者は交はる〻〻留守宅を訪問し、在郷の家族を慰めて、出征者をして後顧の心配無からしむる、親切と勵まされ、如何にしても花花しき功名を戰地に現はし、勇ましく凱旋するにあらざれば、飽くまで奮戰して敵前に斃る〻の外なからしむ。故に或る者は戲れて、出征者を送る萬歲の聲は、是れ取も直さず人殺ろし聲と謂ふ。實に此の萬歲の聲に送られて戰に臨む者は、萬死を怖れざる勇氣を起さゞるを得ざるなれば、乃ち萬歲の叫びは、人をして勇んで死地に入らしむる聲なり。之を人殺ろし聲といふは、戲言と雖もまた確かに眞理なり。

若し夫れ出征の首途に叫ぶ萬歲の聲にして、勇んで死地に臨ましむるを眞理とせば、彼等出征男子をして、感奮興起せしむるもの、平生內に在りて家政を理むるを任とするの女子まで、盡とく出で〻其の行を送るの熱心こそ、殊に其の主たる原動力たらんとす。楯を負ふて凱旋するにあらずんば、楯に載せられて歸れとは、往昔スパルタの國民が、其の子の戰に赴くを送る母の別辭なり。此の母あつて始めてスパルタ國をして强兵能く萬邦に冠たらしむ。女子の兵氣に關する此の如きものあるなり。

實に軍人の背後に在て、外に向つては出征者を犒ひ、內に對しては留守宅を慰むるは、女子の最も適當なる任務にして、また出征者をして最も勇敢に戰はしむる所以なり。故に內を治むるを天性とする婦人も、軍國の民たる責任は、日夜片時も之を等閑に附せざる大なる覺悟を以て、奮つて力を盡さゞるべからず。



獨逸哲士の婦人觀

長谷川天溪

◎古今東西、婦女に關する見解を述べたるもの甚だ多しと雖も、獨の奇哲ショーペンハウエルの如く、忌憚なく侮蔑擯斥の言を放ちたるは稀なり。婦人を崇拜せむとする歐洲の天地に生れて、痛快なる非難の聲を擧げたる哲士は、實に奇中の奇と謂ふべきなり。

◎正月早々、而も初聲を擧げたる誌上にて婦人に對する非難の說を紹介するは、餘りに無躾なりと言ふ讀者もあらむ。然れども社會に於ける婦人の活動範圍漸く廣く、從つて婦人問題の諸所に討議せらるゝ今日なれば、名高き哲士の見解を簡畧に記述するも、敢て無用の惡戲ならざるべし。



◎ショーペンハウエル曰はく、女性の心上又は身上、有力なる活動を爲すに不適當なるを見れば、其の價値を推知すること難からず。婦人は、人生の負債を償ふに、事業を以てせずして、忍苦を以てす。出產兒の苦痛、育兒の注意、男子に服從するゝ等、これ女性の忍ぶべき苦痛なり。

◎女性は幼兒の保姆又は教育者として、適任なり。これ婦女子其の者が幼兒の如く、愚かにして淺見なればなり。約言すれば其の生活は幼兒と成人との間に位する者に外ならず。

◎自然は婦女子に武器を附與せり。これ其の嬌態なり。男子は其の嬌態に引き付けられて彼の女を保護す。然れども子を產むと共に、其の美相の衰ふると、卵を產みし蟻の羽根を失ふが如し。されば婦女の若きものは、何事よりも戀とか、艷態とか、其の他衣服、踊舞に焦心す。

◎高尙にして完全なる者の發達は遲緩たり。これに反して不完全なる者は急速に發成す。男子の成熟の域に達するは、二十八才以上にして、女子は十八才位なり。これ婦女子が稚氣を離れざる所以なり。女子は眼前の事、現在の事、皮相の事共の外を看る事能はず。

◎婦女子は思案力に乏し。されば不幸の者に對しては、仝情し得と雖も、高尙なる德義、公平、正義等の點に關しては男子に劣ること數等なり。彼れ等の思考は、唯現在に關するのみなれば、過去とか將來とかに關する抽象的思想を解するの力なし。

◎婦人の性格には正義の感なし。是れ其の思索力と反省力との缺乏したるが故なれど、一面には彼れ等は强者に依賴し、又狡猾を武器とするが故なり。獅子に爪牙あり、牛に角あるが如く、女には假扮といふ武器あり。賢愚を問はず、總ての婦人には僞佯の能力の備はらざるは莫し。

◎婦女の天職は種の保護に外ならず。

◎男子は凡ての物を直接に服從せしめむとすれど、女子は男子を通じて是れを從へむとす。即ち間接に馭せんとす。婦人の直接に操縱せむと欲するは、只自身にのみ限られたり。此の故に自身以外に關しては、男子を瞞着する爲に之れを馭せむと欲するのみ。文學、美術等を愛すなど言ふは、眞に嗜好あるが故にあらず。

◎女は主觀的にして、客觀的心意を有せず。これ古來女子にして大畫家たりし者なきを看て知るべし。

◎多妻主義を許してこそ女の幸福はあれ。一人の夫のみを守るべしなど言ふ義務を女子に負はしむるは不自然なり。而して一夫一婦を主張する女子の如きは、全く自身の本性を誤謬したる者なり。

◎歐羅巴の社會より、婦人としての尊敬を受けむと主張するが如き怪物淑女を退くるは、多妻主義なり。而して女は依然として存在すべく、亦不幸の婦女は跡を絕つべし。

◎婦女の子に對する愛は本能的なり。男子のそれは形而上的なり。

◎財產は男子の相續すべきものなり。財產を造るものは男子なれば、是れを承くる者亦男子ならざるべからず。

◎女子は生涯被護者なり。

◎婦女の虛榮心は物質的なり。男子の虛榮心は精神的なり。女子の心は物質上の榮華に走せ、男子の心は非物質の方面に向ふ。

◎歐羅巴の社會に於ける根本的誤謬は、女性の位地

が不自然なるに在り。これを矯正せずんば、社會を充分に改造すること能はざるなり。

◎獨逸の厭世哲學者ショーペンハウエルの婦人觀は、斯くの如く冷酷なり。彼れの婦人論なる者は、嘲罵詬謗を以て滿されたり。新日本の婦人たる者は、斯くの如き恥辱を雪ぎて、彼の哲士をして地下に悔恨せしむるだけの覺悟なかるべからず。

男女の別を正しうすべし

從七位　小川直子



ある人いふ、今の世は古へとことにして男女相交らひて事をとる習ひなれば、小學にいへるが如き男女の別を固く守ること能はず。されば男女の別といふは、そも〳〵ふるびたる言なりと。おのれの思ふ所はさにあらず。今の世男女事を共にする習ひなれば、いよ〳〵益々男女の別を正しうせまほしきわざなりけり。いかにとなれば、男女の中は馴れ易きものなればなり。清少納言も遠くて近き物男女の中といへるにあらずや。男子は陽の性にて女子は陰性なり。同性相いれず異性相合ふ事を願ふは、天地のおのづからなる道理にて、假令へば電氣積極消極相合し、同極相着にことなる事なし。さるからに、爰に幼兒ありて遊べるを見るに、男女相むかひて遊ぶ時は、睦まじくいとも〳〵樂しげに見ゆれども、女子どちのみにて遊ぶときは、ともすれば腹だゝ敷なりて睦じからぬ折尠から

ず。これもまた先にいふおのづからなることわりにて、同性相いれず、異性相應ずるのことわりならん。されば男女打交らふ世には、殊に愼みて別を立てざれば、我しらず氣相投じていつしかしたはしくなりもてゆきつゝ、遂にいひしらぬ情ごゝろの通ひ初むれば、眼にてしらするにあらず、言葉にいでゝいふにあらねど、姿を見ても樂しめる心を生じ、あるは聲をだに聞かまほしとか人しれずこふる心のいできて、迷ひゆくならんかし。一度心の駒のくるひいでゝは、如何なるむちをあぐとも甲斐なくなりて、人の諫も世のそしりもかへり見ず、遂に名をもけがし身の災をも引起すためし尠からず。災の起るはおこるの日に起るにあらず、因りて來る所あり、故に災は未だ萌さぬうち定かならぬほどに防ぐにあらずは聞にくき名さへたつならん。其人の名のみにてとゞまらず、親はらからの面ぶせはた家の名をさへおとすに至る事あり。さればおのれの願ひは、男女の別をたゞしうしてたとひ同じ所に事をとるとも大事をはかるとも、對ふ座は三尺をへだてゝ、恭々敷心の底を清う澄して、萬の物を授けうくるにも同じくは手より手に直にせずといふ斗にあらまほしくおぼゆるなり。されど今の世を見渡すに、いづくを見るも男女共に交らふ事にしあれば、立ならびては肩と肩行ちがふには、袖などのすれあふ斗近くよりつゝ、ともすればよそ目いかゞとおぼゆる折もあるぞかし。歎かしきわざならずや。たとひあだなる夢は結ばずとも、情心の通ひなば、修身の道にとりてはそこはくの罪あり。さるからに法律にてはとがめずとも世の人よりぬれ衣きせてそしるなり。これ其つゝしみのゆるびたると男女の別のゆるかせなるとによるなめり。歎きても猶たらざるなり。おのれの若かりし頃の教を思ひいづれば、おごそかなるものにて、愼み深き習ひなりき。おのれせうとの君とては只ひとりなりしも、ふたりの姉君ありて、女のはらからみたりなりき。母君常にのたまふやう、女子にて人のたわれごとに順ひあらぬ浮名を立てたらんは、男子にて切剝强盜をはたらきたるにひとしきぞ、さるからに若汝らさる名のたちて、親はらからの面ぶせなる振舞をひき出でたらんには、ひと時もはやく死手の山路におもむくべし。かねて父君より授け給へる守刀は其爲なりと。かゝる教をうけつゝ、おふしたてられて人となりぬるおのれなれば、先入主となりたるにや、今も猶よに人のあらぬ道に迷ひ入りて、そしらるゝを見聞くごとに、脊

にはひやゝかなる汗さへ流れ、身の毛もよだつ斗うとましくおもほえて、かゝる世に交らはむより、いざや時の間の煙ともなりなましとおぼゆるなり。斯くいへば、またある人のいへらく、實の行に亂れたる事だになかりせば、肩あるは袂のふれあふとも、手を引連て行かふとも何をか咎むべき。唐土のいにしへに柳下惠といふ人ありて、云々と。おのれいふ。柳下惠の賢ありてこそ、世の人もゆるさめ。ただ大方の人にてはたれか許すべき。大方の人にて柳下惠を學ばむとならば、先づ西南の男子を學ぶべし。人皆岩木ならねば、誠に動き易きは人心なり。迷ひ易きを恐るべし。鎌倉のおとゞの歌に、

心こそこゝろ迷はすこゝろなれ
　こゝろに心こゝろゆるすな

とあり。あはれ願はくは世の女子達よ。ゆめ〳〵うたかはしげなる振舞なし給ひぞ。愼み給へよ、愼み給へ。



女子文壇の發刊を祝す

辱知　高橋邦三

優勝劣敗の天地、弱肉强食の今日殊に目下我國世界の一大强國と干戈相搆へつゝあるに方り、況して事の成行或は全世界の一大騷擾を醸すに至るなきや計り知り難きの場合に際し、國民の責任豈輕しとせむや。嗚呼其の責、其の任、之を男子に擔ふべきもの素より重大、而かも之を女子の負ふべきもの亦輕少なりとせず、左れば近者愛國婦人會の如き愈江湖の同情を得て勢ひ將に揚らんとす、又博愛なる我赤十字の如き求めずして内外の應援頻りに、事業益々旺盛の域に進まんとす、凡そ這般の事業一として直接に間接に婦人の力に依らざるものなし。刻下有事、而かも千古未聞の大々的有事の時に方り、出征軍人の能く後顧の憂を省き得るもの、後送傷病者の得て慈母の許に歸へるが如き心地するもの、我が高德なる婦人の力にあらずして何ぞや。否な我國婦人の力豈斯く許の事のみに止まら

んや。抑も我國百萬の貔貅を生み出せし者は誰ぞ。我國五千萬の善男善女を育みし者は誰ぞ。思ふて爰に至れば、婦人の力實に男子のそれを凌ぐあるの感なき能はず。噫我國の婦人たるもの自ら愛し自ら重んぜすして可ならんや。

外人動もすれば即ち言ふ、日本には古來女子教育なく、男尊女卑の俗蠻野に近しと。吁々夫れ何等皮相の見ぞ。我國素より東洋の風として、否な自然の道として、女子を阿轉婆的にこそ仕込まざれ、女子に對する優美にして而かも亂れざる純良無垢の教育は男子に對する嚴父良師の訓戒と相幷びて、深く慈母の懷に於て不知不識の間に永代絶えず行はれつゝありしなり。我國が東海の一孤島にして數千歲の久しき曾て一度だも外辱を蒙りたる例なく、後進の一小國土にして、今日忽ち世界の列强と列を同ふするを得るもの、亦偶然の結果とすべけんや。斯の如く我國は古來固有の女子涵養の道ありて固有の國風を維持し來れり、換言すれば我國從來の女子教育法は從來の我國に適合せしなり。

然るに今や時勢の變遷に隨ひ、國際の愈擴まるに伴ひ、女子教育法の如きも漸く歐米先進の風を加へて、大に發達を計らざるべからざるの秋は來れり。況してや刻下我國が世界人道の爲、東亞億兆の爲、國家百年の爲、千古未聞にして而かも前途猶ほ遼遠なる一大事業を遂行しつゝあるに際し、倘況してや之を小にしては國家の安危、之を大にしては人道の存亡に懸りて、斯の事業の成否如何に在るの今日、我國民は實に男子の力に賴るあると同時に女子の心に俟つ所亦寔に尠少ならずとす。此時に方りて友人竹次郎野口君所感あり、多年の經驗を秘め置くに忍びず、奮然立つて女子文壇社なるものを結び、大に女子教育の途に貢献する所あらむとせらる。而して明治第三十八回の吉旦をトし其の機關「女子文壇」の初號を發兌せらるゝの運びに至りぬ。君は博文館創立以來續ひて文華の事に從事せられ、這般の經驗亦實に尠少なりとせず。嗚呼其の時宜に適へる、其人を得たる、其有力なる賛成者の數多き毫も怪むに足らず。女子文壇の成功期して俟つべきなり。余や不才曾て筆を弄したるの例なけれど、好友の斯の盛擧あるを聞きて喜悦禁じがたく、爰に陳腐の言を並べて聊か祝意を表すと爾云。



歌の糸口

大和田建樹

一、その名目

和歌といふ名は古は無かりしが。支那傳來の詩歌に對して。我國のをば和歌といひ又やまと歌など呼ぶ事となれり。されば和歌とは。如何なる體にても。我國の言葉もて吟じ出だせるものには用ひらるゝかといふに。習慣上然らず。謂はゆる短歌長歌なる文學的の歌のみに用ふる名稱となれり。今こゝに語らんとするは。此和歌の內。特に短歌すなはち三十一文字の歌なり。短歌にも種々の名目あれば。まづ之を明かにして置かん。

本歌といふは自然の美を謠へる歌にて。花ならば。



櫻花さきにけらしも足引の
山のかひより見ゆる白雲

月ならば。

秋風にたなびく雲の絶間より
もれいづる月の影のさやけさ

などいふ類なり。我々のよむ歌の大部分を占む。本歌なる名稱は穏ならねば。唯「歌」とのみ稱へて有るべし。

道歌といふは敎訓を主とする歌にて。

時鳥自由自在に聞く里は
酒屋へ三里豆腐屋へ五里

ぶら〳〵と暮らすやうでも瓢簞の
胸のあたりに締め括りあり

の類。通俗を主とすれば詞の雅俗は問ふ所にあらず。狂歌といふは滑稽諧謔を主とする歌にて。古は誹諧歌といひたり。古今集には俳諧歌の部を置きて。

山吹の花色ごろも主や誰

問へど答へず口なしにして
秋風にほころびぬらし藤袴
つゞりさせてふ蛬なく

などいふを載せたり。前なるは。山吹の花は口なし色なれば答へぬといふに可笑しみあり。後なるは。藤袴といふ名に就きて。袴の綻びたるに。つゞりさせ（ボロを刺せ）と虫の鳴く音を取り合はせたるが滑稽なり。」

源平合戰の時代には之を落首と呼びて。

伊勢武者は皆緋縅の鎧着て
宇治の網代にかゝりけるかな
信濃なる木曾の御料の蕎麥打つて
たゞ一口に九郎判官

などいふが流行せり。前のは緋縅を氷魚に言ひ掛け。後のは木曾義仲を名物の蕎麥に喩へ。食ふを九郎に言ひ掛けたるが可笑しみなり。

德川時代にありては狂歌と名づけ。蜀山人などいふ名人の出でたるは誰も知る事ならん。

時鳥なきつる跡にあきれたる
後德大寺の有明の顔
鎌倉の海より出でし初鰹
みな武藏野の腹にこそ入れ

など名吟いと多し。

物名といふは。或る名詞を隱してよみ入れたる歌にて。鼠花火を入れては。

呉竹の夜わたる月をいねず見ば
なびく葉風の身にやしまゝし（兄瓶）

釜、鍋、火鉢を入れては。

たかま山なべて櫻の散る頃ぞ
たれもおもひは千々に砕くる（磯足）

五百羅漢を入れては。

富人の寶いだして戀買はゞ
この我こひや倉かむなしき（雅景）

國の名十よみ入れては。

あはれ身のおきどころなき秋のつゆ
かゝるをいつか人のさとらん（猛彦）

阿波、美濃、隱岐、紀、安藝、津、加賀、伊豆、甲斐、佐渡なり。

魚の名十入れては。

こざめ降り東風ふくたびに戀ひぞ増す
いかにか花の今朝は咲けると（寛光）

鮫、鰤、こち、鰒、鯛、鯉、鮹、烏賊、鯖、鮭なり。

折句といふは五文字を毎句の頭に置きてよめるにて。

かきつばたを。

から衣　きつゝ馴れにし　つましあれば
はる〴〵來ぬる　たびをしぞ思ふ（業平）

さけさかなを。

さかりをぞ　今ふとい
はまし　さくら花
かすみも雲も　なべ
てにほへば（千壽）

沓冠といふは十文字を毎句の上と下とに置きたるにて。小板敷時の札といふ文字を。

こぬ夜半といかゞはつ
らき高砂の
鹿の妻どふ霧のをち
かた（しらず）

あはせたき物すこしを。

あやしくも春の野澤の芹つまず
立てる我妹子きじや聞くらし（顯忠）

回文といふは逆さまに讀みても同じやうに讀まるゝ歌にて。

ながむらむ門を訪ひなば草に木に
さく花ひとをとがむらむかな（春庭）

俳句にも。下駄はくならぐひすひくう鳴くはたけ。などいふが有り。歌にてよく聞ゆるがなきは。三十一文字には到底むつかしき事にやあらん。

以上示したる歌の名目をまづ心得おきて。おひおひ實地の研究に進みゆかんとすべし。



國文評釋

文學士　中內蝶二

竹取物語（一）

《解題》　竹取物語は、日本物語文の元祖とも稱すべきものにて、その作者は、何人なるや詳ならず。或は源順の作なりといふ說もあれど、恐ら

くは、貞觀延喜の年間に出でたるものならむか。

また或説には、仁明天皇の頃よりは後、醍醐天皇の頃よりは四五十年前の作ならむといひ、或はまた、嵯峨天皇より清和天皇の頃までの間に、才學文章の秀でたるもの丶書きたるものならむともいへり。本居宣長の、源氏物語玉の小櫛には、

竹取物語は、いつの世に作れりとは、定かに知られねど、いたく古きものとも見えず、延喜よりは以來のものとぞ見えたる云々

とあるを、田中大秀の竹取物語解には、

されど、源氏物語に、繪は巨勢相覽、書は紀貫之かけりと見ゆれば、延喜の以往よりありしものなるべし。元來作り物語なれば、拘るべきことにはあらざめれど、彼の物語は、作主のいたく心しらひせられたるものなれば、徒然草にいへる、小野道風朝臣のかける朗詠集のたぐひにはあらで、古くよりもてあそびて、時代も似つかはしければこそ、相覽ぬし、貫之ぬしなどの物せられつる由に云はれけめ、據として作れりと見ゆる寶樓閣經は、高野大師の將來なりといへば、大同の比より後なるべきは更なり云々

とあり。この説稍正しきが如し。

竹取物語の如き著名の書にして、何が故に作者を詳かにせざるや、思へば頗る怪しきが如くなれども、これには理由あることにて、元來この物語の世に出でたるは、假名文字の作られてより、未だ間もなき頃なれば、古來の習慣なほ去りがたくて、男子は依然として、漢文を得意とするもの多く、假名文は、主として婦人の間に玩ばれ、男子にして、たま／＼假名文を書きたるものありても、多くは世を憚つて其名を匿し、或は故さらに、婦人の作の如く書きたるものもありて、かの土佐日記の冒頭に

男のすなる日記といふものを、女もして見むとてするなり云々

とあるも、即ちその一例なり。文學社會の風潮かくの如くなりしかば、作者の詳かならざる物語の多く世に出でしも、また自然の理にあらずや。されば當時假名の異名を、女文字と稱せしを見ても、假名文の主として婦女の間に玩ばれしことを知るべきなり。

竹取物語に出でたる筋の大略は「昔竹取の翁とい

ふ老爺ありて、竹の中に、光り眩く輝ける少女を見出だし、そを我子として養育しけるうち、忽ち生長して大人となりぬ。美貌世にすぐれて、ならびなかりしかば、その噂はやくも四方に聞こえて、高貴縉紳の公達は、何れも想ひを懸けいかにもして、己が妻に申し受けばやと、幾多の艱難辛苦を嘗めて、競うて心をつくしけれども、少しも從ふけしきも見えず。最後に、時の帝この由を聞こしめして、宮中に召されしかど、これにも從はで、終に八月望の夜、その故郷なる月の都より、迎への使降り來りて、少女を伴ひて天に昇りぬ。別れにのぞみ、帝に不死の藥を奉りたりしを、帝はこれを見るさへ思ひの種なりと仰せられて、天に近き高山の頂上にて、彼の不死の藥を焚き棄てさせたまひしかば、その山を、ふじ（富士）の山と呼び、その煙は絶えず天に昇れり」といふにあり。中には多くの痴漢が、一婦人の爲めに心を迷はして身を滅茶〱にしたるもあり、其狀頗る滑稽をつくし、殊にその末段、天子の富と尊さとを以て靡さむとするに及び、讀者も、この度こそは、少女の志を屈して、帝の御意に從ふならむと、半ば疑ひ危める際にのぞみて、妾は元來變化の身なれば、といひつゝ、飄然去つて天に昇るあたりに至つては、この書の中なる帝はもとより、讀者をまでも呆然たらしむる作者の意匠と技倆とは、實に賞嘆に堪へざるものあり。思ふに、こは作者が、當時の世態に慷慨するところありて、かく架空の物語を作りたるものならむか。文章は、毫も彫琢を加へたる痕は見えねど、古雅簡潔、たくみに哀怨喜怒の情を描き、徒に虛飾華美にのみ流れたる當時の文章とは異りて、つきがたきの妙味あり。今二三の文例を擧げて、愚評を加ふべし。

今はむかし、◯竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹をとりつゝ、萬の事につかひけり。名をば讃岐造麻呂となむいひける。その竹の中に、本光る竹一筋ありけり。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いと美しうて居たり。

（釋義）今はむかし　當時の物語本は、大抵かゝる冒頭を置くを例とせり。今よりは昔の義◯竹取の翁　竹を取りて營業とせし故、竹取の翁と稱せられ

くは、貞觀延喜の年間に出でたるものならむか。
また或説には、仁明天皇の頃よりは後、醍醐天皇の頃よりは四五十年前の作ならむといひ、或はまた、嵯峨天皇より清和天皇の頃までの間に、才學文章の秀でたるもの丶書きたるものならむともいへり。本居宣長の、源氏物語玉の小櫛には、

竹取物語は、いつの世に作れりとは、定かに知られねど、いたく古きものとも見えず、延喜よりは以來のものとぞ見えたる云々

とあるを、田中大秀の竹取物語解には、

されど、源氏物語に、繪は巨勢相覽、書は紀貫之かけりと見ゆれば、延喜の以往よりありしものなるべし。元來作り物語なれば、拘るべきことにはあらざめれど、彼の物語は、作主のいたく心しらひせられたるものなれば、徒然草にいへる、小野道風朝臣のかける朗詠集のたぐひにはあらで、古くよりもてあそびて、時代も似つかはしければこそ、相覽ぬし、貫之ぬしなどの物せられつる由に云はれけめ、據として作れりと見ゆる寶樓閣經は、高野大師の將來なりといへば、大同の比より後なるべきは更なり云々

とあり。この説稍正しきが如し。
竹取物語の如き著名の書にして、何が故に作者を詳かにせざるや、思へば頗る怪しきが如くなれども、これには理由あることにて、元來この物語の世に出でたるは、假名文字の作られてより、未だ間もなき頃なれば、古來の習慣なほ去りがたくて、男子は依然として、漢文を得意とするもの多く、假名文は、主として婦人の間に玩ばれ、男子にして、たま〳〵假名文を書きたるものありても、多くは世を憚つて其名を匿し、或は故さらに、婦人の作の如く書きたるものもありて、かの土佐日記の冒頭に

男のすなる日記といふものを、女もして見むとてするなり云々

とあるも、即ちその一例なり。文學社會の風潮かくの如くなりしかば、作者の詳かならざる物語の多く世に出でしも、また自然の理にあらずや。されば當時假名の異名を、女文字と稱せしを見ても、假名文の主として婦女の間に玩ばれしことを知るべきなり。
竹取物語に出でたる筋の大略は、『昔竹取の翁とい

ふ老爺ありて、竹の中に、光り眩く輝ける少女を見出だし、そを我子として養育しけるうち、忽ち生長して大人となりぬ。美貌世にすぐれて、ならびなかりしかば、その噂はやくも四方に聞こえて、高貴縉紳の公達は、何れも想ひを懸けいかにもして、己が妻に申し受けばやと、幾多の艱難辛苦を嘗めて、競うて心をつくしけれども、少しも從ふけしきも見えず。最後に、時の帝この由を聞こしめして、宮中に召されしかど、これにも從はで、終に八月望の夜、その故郷なる月の都より、迎への使降り來りて、少女を伴ひて天に昇りぬ。別れにのぞみ、帝に不死の藥を奉りたりしを、帝はこれを見るさへ思ひの種なりと仰せられて、天に近き高山の頂上にて、彼の不死の藥を焚き棄てさせたまひしかば、その山を、ふじ(富士)の山と呼び、その煙は絶えず天に昇れり」といふにあり。中には多くの痴漢が、一婦人の爲めに心を迷はして身を滅茶〱にしたるもあり、其狀頗る滑稽をつくし、殊にその末段、天子の富と尊さとを以て靡さむとするに及び、讀者も、この度こそは、少女の志を屈して、帝の御意に從ふならむと、半ば疑ひ危める際にのぞみて、妾は元來變化の身なれば、といひつゝ、飄然去つて天に昇るあたりに至つては、この書の中なる帝はもとより、讀者をまでも呆然たらしむる作者の意匠と技倆とは、實に賞嘆に堪へざるものあり。思ふに、こは作者が、當時の世態に慷慨するところありて、かく架空の物語を作りたるものならむか。文章は、毫も彫琢を加へたる痕は見えねど、古雅簡潔、たくみに哀怨喜怒の情を描き、徒に虚飾華美にのみ流れたる當時の文章とは異りて、つきがたきの妙味あり。今二三の文例を擧げて、愚評を加ふべし。

○今はむかし、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹をとりつゝ、萬の事につかひけり。名をば讃岐造麻呂となむいひける。その竹の中に、本光る竹一筋ありけり。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いと美しうて居たり。

(釋義)今は、むかし　當時の物語本は、大抵かゝる冒頭を置くを例とせり。今よりは昔の義○竹取の翁　竹を取りて營業とせし故、竹取の翁と稱せられ

しなり○野山にまじりて云々　野や山に入りて、竹を取りては、色々の物を作るに用ひたりとなり○あやしがりて云々　竹の本に光るを怪しく思ひて、そば近く立ちよりて見れば、竹の筒の中光りたりとなり○いと美しうて云々　甚だ美しき姿にてゐたりとなり。

〔評論〕以上は是れ、竹取物語一篇の冒頭の文字にして、またこの物語の發端なり。この竹の中より出てたる美しき人こそ、長じて數多の男子の心をなやまし、時の帝をさへ、戀に苦しませたまふに至る主人公にはありけれ。けり、ける、たりなど、終止言いと多くて、句の短く切れたるは、これ簡古なる當時の文躰なり。

翁いふやう、われ朝ごと夕ごとに見る竹の中に、おはするにて知りぬ。子になりたまふべき人なめりといひて、手にうちいれて、家にもて來ぬ。めのをうなに預けて養はす。うつくしき事かぎりなし。いと幼ければ、こに入れてやしなふ。竹取の翁、この子を見つけて後に、竹をとるに、ふしを隔てゝ、よごとにこがねある竹を、見つくることかさなりぬ。かくて翁やう〳〵ゆたかになりゆく。

〔釋義〕われ朝ごと夕ごとに云々　これより以下、人なめりまでは、竹取の翁の言葉なり。わが每朝每晩見る竹の中に、いつもこの人の御坐あるによつて、この人は、必ず我子となるべき人ならむと知りたりとなり。なめりとは、ならむ、なるべしの意○手にうち入れて　手の中に入れてとなり。うちは意味なし○めのをうな　翁が妻の嫗のことなり。めは妻の義、をうなは老婆の義○こに入れて云々　こは籠なり。小さければ、籠の中に入れて養ひたるなり○ふしをへだてゝ云々　竹の節と節との間の筒の中に、黄金の入りたる竹を、幾度も見つけたりとなり。よとは、節と節との間、かさなりぬは、度數が重なりとの義○やうやう　次第〳〵にの義○ゆたかになりぬ　有福になること、即ち家の富むことなり。

〔評論〕竹の筒の中より生れしといふ、これ尋常の人にあらざるなり。しかも容姿美しきこと限りなくして、竹取の翁は、この美しき子を得たる以來、家は次第に富み榮ゆといふ。また以て、この姫の賤しき人にあらざるを知るべきなり。さても、この姫は果して何者ぞ、また何が爲めにこの世には生れ來しぞ。

姫に關する讀者の好奇心は、やうやく是より起り來らむとす。

（未完）

春のうた

從二位伯爵　東久世通禧

海邊霞

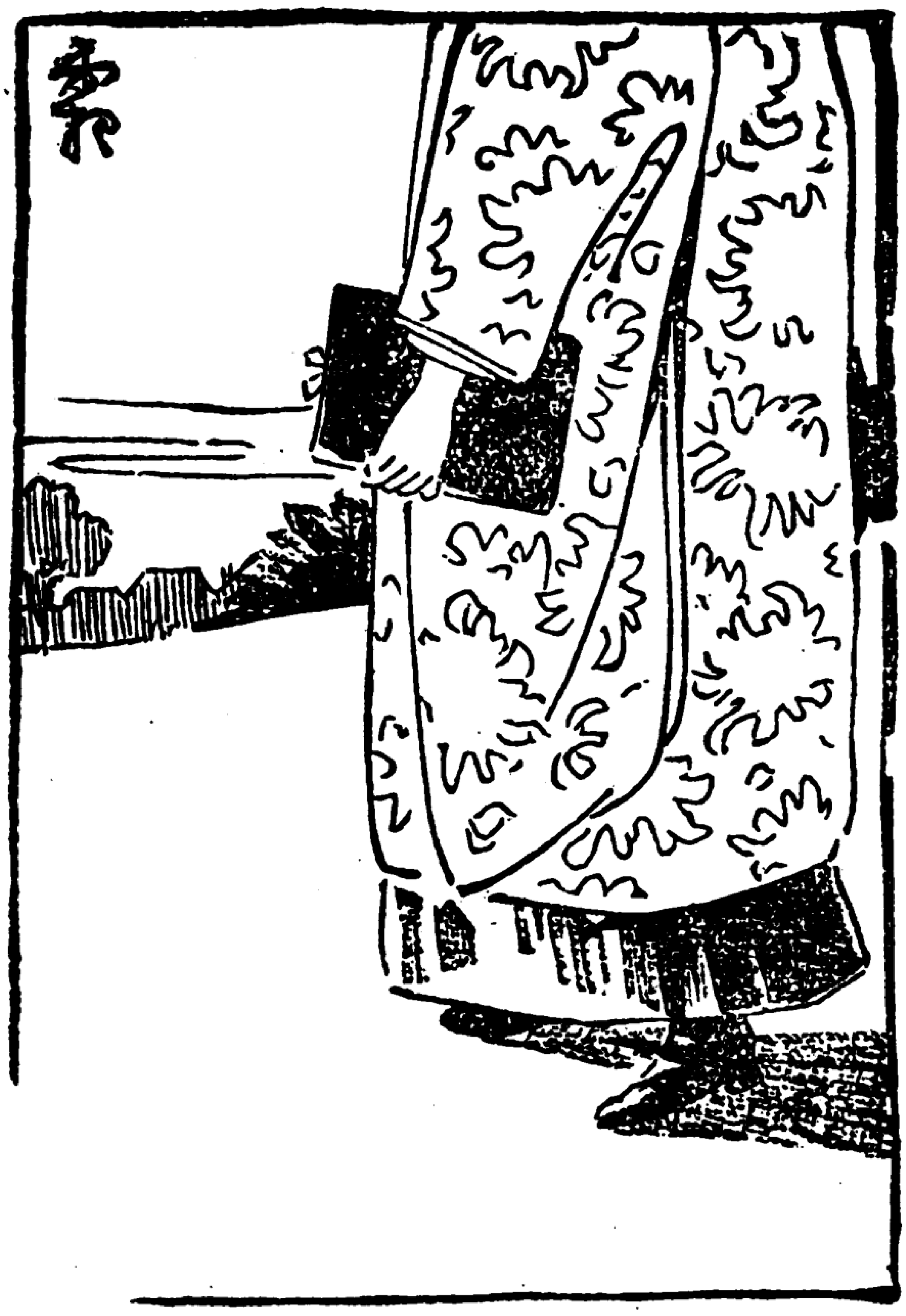
わだのはら沖つしらなみたゝぬ日に
いよゝたつは霞なりけり

うら／＼となぎたる沖をゆくふねの
白帆はるかに立つかすみかな

海邊梅

ゆふ汐のさすがまに／＼ふねうけて
杉田のさとの梅の花見む

芝浦のあまが屋かけてにほふめり
濱のみそのゝうめのしたかぜ



柳上鶯

風わたる柳のいとのいとまなく
枝うつりするうぐひすの聲

うぐひすの聲のにほひに青柳の
花なきえだもはるや知るらむ

野雲雀

畑麥はまだ穂にいでぬ春の野の
かすみのおくに雲雀なくなり

かすみたつ野べの芝生はすみよきを
雲井にのみもなく雲雀かな

破窓の寒梅

文學士　鹽井雨江

冴えかへるまゝの山風に、一日吹きさらされたる天地は、今や氷りもはてつる、そよとの音もなく靜まりかへりつ。此の頃の寒さに痩せつくしたる木ずゑの、木の、見わたす限り、力なげに打ち萎れて、全く死したる如きが、薄暗く黄昏かゝる山べ。昨日今日を結びしまゝにとけもせざる霜柱は、蹈みやぶる一足毎に、劍をつんざくひゞき。小さき肩には、やゝ餘れりと思ひしまでに、今日は樵りつみし柴の重みのうれしさは、身に露ほどの寒さはおぼえねど、手足は更にわがものにあらず。霜も嵐もたまらざるあばら屋に、獨りまちてながめ給はん母の寒さ淋しさは、なか〳〵ならむを、一足も疾くと、思ひはやれば、馴れし足もとも、落葉の上の霜にとられて、幾度かまろびつ、やう〳〵に下りはつる山路。行きに歸へりに、とはではやまぬ父が墓、小徑を折れて、小走りに一町。見れば、今朝手向けし閼伽の水も、氷りつめたり。山あひにめづらしくて折り來たれる山茶花の二枝、氷りをやぶりてさしそへ、柴木を肩のまゝにぬかづきて、また小走りに、もとの一町。

日は全く暮れたり。宵の明星の白くさえたる彼方、黑う聳えたる鎭守の森かげ、ちら〳〵と明くほのめきて、みあかしの光り、數をそへたる、今宵は大晦日の夜なりけり。此の頃の日毎、詣でゝは祈る兄の身の上、まとう毛布の袖も、夕べは氷り、うちふる劍の柄にも、朝は霜の結ぶといふ滿洲の戰場、今日までも寒さの障りのおはせず。霰なす彈丸、篠なす銃劍の中、血しほの河をふみ、死屍の山を越えての進軍、今日までも薄手のなやみもおはせずとか。產土神のひしと守らせ給ふらむ有り難さよ。さらば、今宵は是非にきこえて、今までの冥助のよろこび、且つは、かへる明日の年の變はらぬ守りも祈りてむ。さなり〳〵、待ちたまはん母人の心もとなけれど。

しばし階下にぬかづき終り、下ろしたる柴木、再び肩にする間も、歩みながら。さてそは母人のと、二三町はやがて走りて志さす家路に、さしかゝる村長の門前。初春は先づ此處にこそと見えて、新しき千年を迎への松竹の門飾りに、早咲きの梅のそへ木も、はなやかなる側ら、立ち並べたる大旗の幾本、何の爲めぞ。

屋形の方には、謡ひどよめく人のさわぎ、「進め、大和の大丈夫よ」の詩吟は、聞きおぼえたる校長さまのお聲なり。一向に急ぐ心は、殊更に思ひもとめず。鎮守の森の大杏樹と並びて、村の名物とうたはるゝ白塗りの長土塀をすぐれば、舞樂やはじまりたる、どう／＼はら／＼と起る大皷小皷の音に、幾うねりの畷路を逶られつ、また谷徑を幾めぐり、やう／＼に細くとありとばかりを幽に見ゆるわが家の火かげ。今は骨のみ打ち殘る萱葺門に、枯れかれ立てる杉の老木の一本姿、今宵は常ならずあやしう目にとまりて、二足三足見かへりて、たゝずむ門口。「おゝ雪か、歸へりてか、案じてぞ　寒かりつらむ」。迎へたまふ母のやさしき聲音。「アイ母様」とふりむきざま、駈け入れば、細々と見る燈火も、家うち光りみちて、玉の臺とばかりうつりゆくあばら小屋。唯だ母様よと繰りかへしつゝ、柴木を



下ろすほど、「さぞ寒くてと思ふに。冷えたらんが」と、はやくもくみてすゝめ給ふすゝぎの湯。おぼえず湧きかへる涙の、ほろりと。

一雫／＼母の情けをあつめたるすゝぎの湯、掬ふ手毎に、心の中に押し戴きつゝ、顔をすゝぎ、手足を清めはてつ。今日、谷間にゆくりなく求め得たる根芒の若き、夕饗のあつ物にと、圍爐に榾柮を焚き添へなどしつゝ、母様はと心づきてよべば、内庭の方に物搗く杵の音。「あなや、母様、おき給へね」と走り出づればなかまひそ、明日は元旦、せめて赤飯をもとての母が志し。今僅のほどぞ」との仰せ。「心づきてはありしかど、歸へりて一時の事と、うちおきたるものを。思はざるかゝるみ心づかひを知らざりしかしてさよ。兄上のおはせば、さる苦しきおんもの思ひを、み業をまては、いかて。させさせまゐ

らせては、兄上の妹としてのわが道も立ち侍らぬ。是非にこの身にまかせ給ひて」と、強ひて手を取りての爐邊。やがて取り出づる夕げは、わが爲め溫かれとの母が用意の芋粥に、足らぬ心根の僅に添ふる根芹のあつもの。わけて据うる兄上への影膳は、なか〳〵に、一層もの足らぬ母が思ひの種ならむ。

心にかゝるは、此の頃すゝみたまはぬ母の食事。今宵は僅に、根芹のあつものをのみ、めづらしとて、唯だ二椀を重ねられしのみ。つもる思ひに傾く年齢の末に、杖柱唯だこれをのみの兄上にさへ離れられし此の冬のみ心細さは、いかに。あんじらるゝは寒さのお障り。わが身をかばふみ心に、氣強うよそほひ給へども、何にとなうみ顏のいろもみけしきも。兄上の門出の折りよ、「かゝる草莽の身も、なほ皇軍の花のはしにも數へられての君が召し。おどろが奥に殘さん民草が譽あぐべき門出ぞ、さらば」とふみならす門の板橋、勇ましうてのみ出でたまふみ足に、「雪よ、母上を。」さすが二度三度立ちとまりて、殘したまへるみ言葉。「あんじな給ひそ。兄上の分をも、母上の孝養、今日よりは、此の雪が」とちぎりし答へは、いかで。わが心はかゝるなり。必ずかゝらんわが願ひなり。されど〳〵、女子のかひなさ。身は粉にもなれ、骨も微塵と思へども、手足の力のたらぬがち。兄上のいまさば、疾くも整ひてあらむ元旦の用意、明日といふ此の暮れまでも。せめて心ばかりの赤飯をもとのみ心づかひせさせまゐらする悲しさよ。兄上が露營の夢にも適ひなば、さぞ骨をさす寒さ、腸をちぎる苦しさ、ふがひなき妹もてるくやしさ、血になくうらみにやおはすらむかしこさよ。

せめて肩をもさすりまゐらせんと立ちよる母の背後、「いな今日はおきね、晝の疲れのさぞならむを」とふりむき給ふおん目をかすめて、一滴。「あな、母様、心地あしき方もや」と、靜によりそへば、鼻うらかみ給うて、「何に、いづくも惡しうはあらず」とのたまへど、さする手さきには、何んとなう昨日にまさる肩のやつれ。はしなく迫きあぐる胸の涙に、しばしは無言。母は何にをか思ひ給ひけん、「はやおきね、さまで苦勞させては、母冥加も盡きまする」と、ほゝとうち笑ひ給ふに、うれしくて、「あの、母樣の。かばかりの手業に、母の冥加の盡きます事ならば、親不孝の子は世には侍らじ。神さまは、さる容易き人の子の母はつくりは給はじ。神さまといへば、母さま、鎭守さまへも、今夜は既に參詣してまゐりしぞ。それも歸へりの遲れ

待りし道草の一つにて」といへば、「そはよくこそ」とばかり、しばしいひさしたまへる母は、「さては、村長の邸を通りてか。大なる旗の立ち並びてありつらむ。彼處の二男も、夕べ俄に召集令、今朝出立とかにて、村の者總出にて見送りしとの事。此處にも一人まゐるやう、其方の山一のあとにてのしらせ。よしをいうて、我が家はもれたり。五十年鎭守の祭りにもおぼえなき見事なりしと、奥山のお瀧婆の、さきほど歸へり路に立ちよられてのはなし」。

こゝにと途ぎれたる母の言葉は、やがて「嗚呼」と長く低き嘆息の聲。「嗚呼、雪よ、ホンに人の子と生まれても、かくまでの幸不幸。かの新作の召集には、唯だ役場の小使が一枚の書きつけ。送られし人とては、唯だ途までの校長さまの一人ありしのみ。其方も、新作も、常に嫌ふ愚痴、いふまじとは思へど、かひなき親の子となりしそちたちのいとをしくて。父のおはしし頃のわが子ならば、言ひふらさずとも、頼まずとも、



新作がかゝらん門出。愚痴とのみな笑ひぞ。髮の毛の多くてとだに、爪の形のよしとだにも、わが子ほめらるゝときけば、うれしき親心。鎭守の祭りへのわが子の衣裳見かへりゆく人の數をかぞへてほゝゑむばかり、人によしめでたしと見せたきが、親心。あな、笑ひてか。其方は笑ひてなれど、親の心はかゝるものよ。ホンに、其方とても、いぢらしや。今日明日は、二七、二八の花の蕾。それを、おどろの髮つゞれの袖、明け暮れ雨風にさらさせて、山の椎柴、野邊のま草、こりつましてのみ暮らさするを見るが、いかで〳〵、この母の心かは。これを思へば、悲しうて〳〵。わが身にものを思はせじと、やさしき心に、いつもつくらふ其方の笑顏。それを見るたび、思ふ度、うれしくてやさしくて、いぢらしくて、胸には涙の絶ゆる時なき旦暮。ながむれば、忌まはしや、目にとゞまる向ひの野べ、裏の山々。父が思はぬ最後の悲しみの闇の間に、人鬼の手にばかり取られた

る無念の野山。村長などゝ世に成りすましてはあれど」、と、いつしか激して咳あぐる母の膝、我れを忘れて抱きつきて、よゝとばかりに泣きふしたるが、なほ頻りに苦しげにこみあぐる母の咳に驚かれつ。あな心つかざりきと、慌てゝ立ちつ。さ湯のぬるみたる、酌みて進めつゝ、「母樣、もはや悲しき事のたまはでよ。今はこゝになくとも、かたき心の兄上の、家を思ひておはすあり。己れも必らず兄上を助けて。もとの家まてには遠くとも、必ず此の野山の近き程は。なほしばしは、このあばらやを、長き夢みる心におぼしめし、二人の子が母上の情けにむくいまつらではやまぬ其の曉を待たれてよ。身のならむ秋の末を思へば、雨風にさらすつゞれの袖の野山も、なか／＼に、うれしきわが心。孝養のかたはしの、せめて成らむ曉をたのめば、破れし衾の夜半の夢も、いつも樂しく侍るを、わが身の上の事など、かまへてみ心に。もの思ふを、年つきにつのる病ひのもとの母上。かくては、唯だ一つ心にかゝるは、明日のお命。それ忘れたまふが、我れ等をおぼし給はん今日の母上の情け」と、心強くは言ひたれど、若し兄上に、悲しきたよりもあらん末はと思へば、聲はつまりて、またと言はれず。

やう／＼に落ちつき給ふに、「夜風召さぬやう、もはややすみ遊ばせ」と、强ひてすゝめて、取りいづる夜の物。被せまゐらするかひもなき、手織りのこはき荒栲の、破れてさへ見るくちをしさ。いつ、やはらかき和栲を、せめて母上の夜の衾にかと思へば、またもせきあぐる涙、ぢつとのみこみつゝ、しばしは枕べに、昨日兄よりの手紙に見えたるいくさのさま、今宵もくりかへしてのお伽物語り。いつしかすや／＼と眠りたまふ母のけしきに、夜着のはし／＼、そつと押さへ押さへして、やをら下り立つ内庭。母の搗きさしの杵とりあぐれば、大かたは既に白かり。弱きおん身にての此の荒業、もしや障らせたまふ事はなきか。昨夕いねずしても整へおくべかりしをと思へば、一杵毎に、われとわが至らぬ心の罪をつき數ふる心地に、杵もはづまず。母上にきこえなば、またもの思ひの數と、音を忍べば、なか／＼にはかどらず。やう／＼によき程にし上げて、せどの小川、すゝぎにと立ちいづれば、天は重く雪げにつゝまれて、唯だ黑く黑く氷りはてたる夜半、やれたる窓外の寒梅一輪、闇を破つて、にほひの白く／＼。

水車小屋

佐々木信綱

我等が行き見むとする白瀧は、淺間神社の裏山を上ぼること八丁許りの所にありといふ。淺間神社の森を過ぎ、水車を多くかけたる溪流に沿ひて上ぼり行くに、溪の彼方にさゝやかなる水車小屋あり。其側に二間四方ばかりのいともいぶせき荒家立てり。かゝる荒家にも住む人ありけるよとうち見やる折しも、焦茶色の深き帽子をかふむり、やぶれはてたる古洋服をつけ、白鬚長く垂れたる老人、水車小屋よりいで來りぬ。われ等はロシアの田舍家の油繪などを面のあたり見るらむやうの心地して、足を停めて興味ある活書圖をうち見やりつ。こゝの瀧には一たびも來りしことなき案内の剛力は、道わかねば、彼老人に尋ねてむ、しばし待ち給へとて、小橋を渡り、其怪しげなる老人の傍に行きぬ。此方より打見やるに、剛力はあまたたび其が禿頭を下げ、一語ごとに腰を屈むる樣なり。われ等は、山里に住む人はいたくも禮儀正しきかなと思ひつゝありしに、やがて二人は最後の辭儀を、殆んど地に着かんばかりになして相別れ、剛力は此方に來たり。洋服の人は小屋の蔭に入りぬ。喘ぎ〳〵馳せ來りたるかの剛力はいたくも感慨にたへぬ樣にて、額に手を加へつつ語るやう、實に計り難きは人の身の上なりや。貴客は定めて、彼やぶれ洋服つけたる老人をあやしきものと見給ひしならむ。かの人はもと吉田にありていたく時めきし御師なりしが、移り行く時世の波に漂はされて產を破り、十年ほど前に吉田を去り、其後は何人もその生死を詳にせざりしに、ゆくりなく今日わが逢ひたるなり。吉田と此の川口とは僅二里餘を隔つるにすぎざるを、如何にして何人にも知られずこゝにかくれ住みたりけむ。思ひよらぬ對面にいたくうち驚き侍り。彼の人は深く愧づる色見えぬ。貴客はかの人のボロ〳〵の洋服をまとひたるあはれなる姿を見給ひしとや。いま吉田の警察署のある所こそ、彼の人の元の住家にて、乞食ならでは住むまじく思はるゝ彼いぶせき小屋こそ、今の住家なれ。去にし世の榮華の夢を水車の音におどろかされつゝ、病がちなる老し妻と、この溪間とを天地として世を送る身の上を思ひやり給へや。吉田の剛力にて、われ等ほどの年配のものは、かの人の惠をうけぬ者はなかりしを、今われを見て、愧

らひて老顏を赤うするまで彼の人はうらぶれ給ひけるよといひ了り、ふり返りて水車小屋を見つめたる剛力の眼には、露きらめきたり。

瀑布の音は林を隔てゝ鞺々ときこえながら、瀑布は見えず。われ等は脚元あやうく岩かねを上り行く。やうく、瀧壺に辿りつきて、見上ぐるに、瀧はさまで大ならず。瀧壺の岩に休らふこと少時。馬を憩はしめん爲め、剛力を先にやりて、再びもと來し道を下る。彼あはれなる物語きゝたる小屋を路すがらふとうち見やれば、腰曲りて力なげなる老媼、小屋の裡より出で來たりて、水汲まむと、土瓶片手に溪に下り行く樣、眼にうつりぬ。



あゝ一年

（先師萩の舍先生の一週年忌に）

文學士　尾上柴舟

あゝ一年こゝに一年
木枯のさびたるひゞき
ゆくりなく御夢さそひて
詩の空の燈明となりし
天つ星一つおちしは

あゝ一年こゝに一年
曉寒き御居間の次に
兄達の御あとにそひて
語なくさぶらひにしは

あゝ一年こゝに一年
枯山なす武藏青山
冬草の霜かき分けて
星しろき夕べの土を
常御衣と着せまつりしは

あゝ一年こゝに一年
さめまさむ時もと待ちし
御夢はつひにさめずて
木枯のこゑのさびのみ
癒えやらぬ痛手にしむよ

あゝ一年こゝに一年
涙あれど歌はあらず
痛あれど詩もならずして

今日の日に今日のみ前に
さゝぐべきものまだ持たぬ
あゝ一年こゝに一年
かくせよの御旨なかりき
御教はかくあらざりき
しかながらあゝしかながら
一年はつひにめぐりぬ

あゝ一年こゝに一年
「毒草」の奇しきかをり
「天彦」のたかきひゞきに
うらやまし兄の御弟子ら
御眉をひらきまつりし

あゝ一年こゝに一年
たゞ小さき小さき「銀鈴」
これだにと御座の前に
そとおきて立ちてゆく子を
あはれとは見ませ師の君

湯の宿

大塚楠緒子

湯の宿の雨の半日欄に寄りて
　山と語りぬ雲と想ひぬ
山と水と何をか語る人の世の
　人にきこえぬ長物かたり
とはに秘むる山の仙女が胸の思
　泉を熱く絕えずや沸かす
二人ゆき三人歸り來る湯元道
　湯の香かをりて百合の花咲く
めをと連れ榛名歸りの山かごに
　ゆはえつけたる萩美しき
雲に水に興じ盡くして花瓶の
　百合の香に醉ふ湯の宿ごもり
こよひまた按摩の笛の音よくして
　人思ふ身の胸にしむかな

女子文壇の發刊を祝して

國分みさ子

王師露を征して國威萬國に輝く折しも文苑又新に一光彩を添へて女子文壇は發刊せられぬ悦しさのあまり

みいくさの勝ちてうれしき新年に
ふみの園生の花もそひけり

家庭と下女との關係

湖月

家庭の内幕を尤も能く知り得る地位に居るのが他人としてはその内の下女に如くものがないだらうと思はれます、それとも大厦高樓で極めて複雜な大なる家庭になると下女などの一年や二年でとても知り得ることが出來ないだらうが世間普通の家庭の内幕などは下女として這入れば一年もたゝぬうちにその家の隅から隅まであらゆることと一切知り得ることが出來るといひます、かういふ處から見ると下女などいふものもその家にとつてはなか〳〵油斷のならぬもので、一家のよいこともあしき事も下女の口から漏ることが少なからぬものであらうと考へられます、なにしても下女は早くその家の事柄に通じてなにくれとなく世話してくれるのは主家に取つては大いによろしい次第でもありませうけれども、しかし事により物によりては下女などにしられては甚だ困ることがなか〳〵に多いことだらうと思はれます、それはどういふとかといひますれば所謂家庭内にある處の秘密の事であります、この秘密をその家の下女がよく知りまたよく世間に漏らし勝ちなものですから下女を使ふ上に餘程注意しなければならないといふ事になります、それとも家庭内に全く秘密なしといふならばともかく苟も一家庭をなした以上に多少はともあれ秘密がないといふ家庭は上下通じて殆どあるまいと思はれます、すでにこの秘密が一家内にあるものとすればこれを下女に知られては甚だ迷惑千萬であつて主人の威信に關係を及ぼすやうになつて來る、でありますから某官吏などが下女や書生を自分の家庭に入れることが私は大嫌ひだとまでいひましたが實際にさういふ感じが起るかも知れません、口さがない下女のことでありますからそれが側に居つては

世間話も出來なからうし又一家經濟の事なども容易く話せないといふことからして折角われ〳〵が自由を欲する家庭がこれらの爲めに妨げられて味も「そつけ」もないと思ふのも尤もなことであるやうだが然し相當の家庭をなした以上には下女を使ずに濟ますといふとが實際に行はれないとだらうと思はれます、どうしても一人なり二人なりそれ相應に下女を傭はなければならない、已にそれを入れた以上は一家の秘密が世間に漏れるといふ懸念が起つて來る、さらばといつて使はずにも居られないかれやこれやて頻りと下女の交替をせしむる人もあるやうですがこれは下女を使ふに策の得たものといふことが出來ないだらうと私は考へます、そんならばどういふ方法にしたら甘く行くかといはれてもなか〳〵困る、家庭の內から秘密を全くなくするといふことが無論出來ないばかりでなくもしもこの秘密が家庭にないやうではその家庭といふものが眞に無味乾燥であつて殆ど家庭の價値がないやうでもあるし、それかといつてその秘密はなるべく世間に漏したくないといふやうなことでもあるからして、どうしても一旦下女を傭ひ入れた以上には所謂恩威幷び行はれて行くやうに使用しなければならない、しかしこの恩威などいふことは口や筆てこそよくいひますことてすけれども實際に行ふ上にはなか〳〵むつかしいことであつてうまく行ふことがかたいのであります、だから先づ下女を使ふ上には、あまりに懸隔を立てずにしかもよく惠みよく敎へて自然に主家の恩義に感ずるやうにしむけていつたならば目に一丁字ない無學文盲の下女といひましても人の子てあるからしてその恩に感ぜぬといふとがあるまいと思はれます、さうすればその家の事でもあることないことなんでもかんでも世間にいひふらすやうなことは萬々あるまいと思ひます。



御題お伽噺

木村小舟

寒い〳〵風がヒユー〳〵と吹いて來て、山の頭を掠めますと、其夕から早くも白い雪が、チラ〳〵と降り出しました。

この雪は地の上には未だ積りませんが、山の頭は冷たいものですから、忽ち眞白になりました、けれども山

は平氣で、いくら雪が積りましても、夫れが爲に氣を挫いたり、首を傾げる樣な見苦しい事は致しません。』

すると丁度大三十日の晩のことです、天から一人の神樣がいらしつて。

『コレ〳〵山や、明けて目出度い新年の御勅題には、新年の山と仰せ出され、山の爲に之位名譽な事はない、さア明日は陛下に御目見えさするのだから、チト身仕舞をしろ』

と仰しやいますので、山は大に嬉しがり。

『有り難う御座います、こんな頑固な私でも御勅題に撰まれた其上は、國の基のゆるぎなき樣、大君の爲に盡しますから、どうぞ宜敷く願ひます』

と、御辭儀をしますと、神樣は喜んで。

『ウン夫れはよく言ふて呉れた、ぢやア己が冠と帶とをやるから、早速之を身に着けろ』

と、雲の冠と、霞の帶とを下されましたから、山は喜んで其冠と帶とを着ますと。

『オヽ大層男振りがよくなつた、之で己も安心したワイ』

と、神樣は大きに御滿足で、再び天へ御歸りになり、間もなく形をかへて、東の海からキラ〳〵と輝きながら。

『アヽ立派な姿になつて呉れたなア、私がこれから輝してやるから、さア思ふまゝに祝へ〳〵』

と仰しやいますと、昨日の雲の冠も、又霞の帶も皆紫色に輝き、眞白な雪の躰に照り反つて、四千餘萬の日本中の者が、何れも其氣高い姿に、帝國萬歲を唱へましたとさ。めでたし〳〵。



冬季吟

小波

磯千鳥富士を斜に舞上る
やゝ白き近江の山や川千鳥
枯蔦や野火に危き一つ松
枯蔦や矢ザ間朽ちたる西の丸
木枯しや借家普請の椽の隙
木枯しに飛ぶや鎮守の寄進札



塩井雨江先生選

天

美しい水、清い水

秋田縣神宮寺蒲 佐々木きく代子

遠い遠い奥山の細谷川を、チヨロ〳〵と流れ出て、そして、今自分の足下を、さゝやく樣にうたふ樣に、やさしき聲をたてゝ、又水の神が小鈴でも振るやうに涼しい音をのこして流れ行くのである。あゝ、此の美しい水は、深い夏草に包まれて、誰れくむ人も無い山の井に湧き出たのであらう。殘んの星かげに、汀の白百合に置きならべた、その露の玉が、はら〳〵とこぼれて、流れ來たのであらう。せまき岩間にせかれては別れ、別れてはまた合うてくるうちには、たき木とる賤の男の手にむすばれたこともあらう。青き淵となつて、色濃いつゝじを映した事もあらう。春の名殘の花びらを、此里に誘うて、さて、それを今何處に送る。あゝ清い水。自分は我知らず兩手にむすんだのである。

(雨評) 幼けれど、可憐の限りなきものあり。短けれど詩韻の遠くひゞくものあり。

地

初春

駒込追分町二〇 鳴野みさ子

去にし一年をあだに過ししことの口惜しうて、除夜の鐘聞くも、何となく悲しう淋しう、われと吾が心の解しがてに、枕とりしは、たゞ今しがたと思ひてし、それもはや去年のもの思ひや。目覺めて、鷄の高うほがらかに啼くこゑきけば、希望の光りみちわたりて、新玉の幸ある日をぞ告ぐるがごと。心さはやかに起きいでゝ、はゝき目清き庭見れば、心地よげなる大路小路の松竹や、げに千年とぞ、つるも舞ひ來ん。日のみ旗

はゆるやかになびきて、かくて、太陽の新しきみ光り、まばゆくのぼりぬ。昨日は枯野とわびしく思ひなされしあたりも、紫にうち霞める心地して、何とやらむ句のいづべうも思ぼゆるよ。いざ、きよらに溢るゝ若水くみて、うたげのとゝのひして、新たに恙なき年かさねませる父母のみ顔をがまむ。嬉しうすが〳〵しきは、たちかへる新た世の春とこそ。

（雨評）平凡なるやうにて、中に、平凡ならぬ筆致あり。舊きがやうにて、中に、新しき趣味あり。

人

山里の秋の夕暮

静岡縣榛原郡初倉小學校内　山本娟婦子

見よ山里の秋の夕暮。くれかゝる空の色、東の一面うす淺黄を流し、西の方うすきうすき代赭と朱にて彩色したる。さては、南の空、北の色、一刻一刻暮色に蔽はれ、仰げば絃月中空にあらはれ、彼方の林は墨の如く、此方の松は漸く黒し、平和にみのれる千町田の稻、夕日をあびて黄金の色まし、木渡る夕風、散りゆく紅葉、一片二片、而も、萬斛の詩情を語る。聞け、山寺の鐘のひゞき。餘韻は長く長く淸風に送られ、かすかに告ぐる秋の夕暮。鍬負ひてかへる農夫、家にはまつらん其の妻の夕餉の煙か、藁屋に低く。塒をいそぐか、鳥の一群一聲二聲空にのこして行くこなた、小川のさゝやき自然を歌ひ、聲愛らしく流れ流れて、水車の音は同じ調子に秋のみのりを祝ふが如く、其の趣味いかに面白きよ。小供のすさむ笛の音は、日露協商破裂してときこえつ。それも　いつしか聞えずなりて、うつりゆく暮色、秋の夕映のあはれ。情にもろき詩人の筆はさもあれ、詩才なき身は、禿筆投げて、こゝ瞬間のながめを弄し、俯しつ仰ぎつ、此のパノラマの中に逍遙へば、幽遠なる乾坤、魂飛びて身は全く自然と同化せんとす。あゝ、此の瞬時の風光、あゝ此の一塲の情景。

（雨評）未だおぼつかなけき詞なれども、詩情は下にほの見ゆるものあり。未だたど〳〵しき筆なれども、美は行末に待たるゝものあり。

秀逸

千人塚

澎湖島馬公城内　山門若葉

哀れに響く入相の鐘聲は、殷々として諸行無常の音を大空に傳へぬ。

吁、淋しき夕暮の天よ。只薄暗き夕暮の地よ。汝は果敢なき人の子を、如何なる境に導かんとはする。今しも一疋の水牛、牧童に曳かれたる儘、遅々として無心に吼へつゝ迪り行くあり。今この歸牛の將に過ぎらんとするかたへの孤丘、枯花暮風に戰ぐの邊り、一個の累々たる、尖錐形の碑石は立てられてあり。

此所ぞ、過ぎにし征台の役、比志島將軍が、幾千の貔貅を提げて、敵軍を壓迫し、血河屍山の大活劇を演じたる所にぞある。

時しも、皇軍長驅、敵をして、島内に、足跡を、絶たしめけるが、襲ひくる病魔は、又如何ともする由なく、遂に我忠勇の諸士は、枕を並べて、恐るべき此病魔と戰ふの止むを得ざるに至りぬ。

天何ぞ我將士等に倖せざるの甚しき。正義忠魂の勇士は、日に日をついて、黄泉の客となるもの夥しく、遂に九百九十九士の英魂をして、空しく孤島の邊陲に、彷徨たらしむるに至りぬ。吁。

古句に『無慘やな鎧の下のきり〴〵す』と。よしや不世出の才を抱きて、天下を蓋ひし人も、無慘や、肥肉すでに水となりて、地下に注ぎ、靈は早く昇天して、三尺の地下枯骨の横はるを見ては、人生の果敢なきを嘆せずんばあらず。花や、開落あり。月や、盈虧あり。皆瞑の士よ、恨む勿れ。紅顏二八の少年も、路邊一抹の風に、奪ひ去らるゝものを。君等の芳名は、深く塚の面に刻まれて、其功蹟を彰はし、長しへに、國家重鎭の神として崇められむ。幸に瞑せよ。

夜は昏々として、紅木埕の村を罩め、風しん〳〵と身に泌み渡りて、冷く顏を流るゝは、露か涙か。

（雨評）文は整ひたり。筆も力なきにあらず。されど、や、詞のものたらぬものありて感さまでには動かず、情熱の足らぬ心地するを惜しむ。

雪の山家

神戸市榮町五丁目六十一　中村きく

花にあくがれ、月に明しゝは、きのふをとつひのごと

思ひつれど、隙ゆく駒のあがき早く、立田姫の織りなせる錦も、いつしかあせゆきて、木枯すさぶ頃とはなりぬ。

さらぬだに物わびしき山里のあはれさ、一きはなれど、又樂しきことのなきにしもあらず。よな／＼音信るゝ嵐も、いつしかふけゆきて、もの靜かなる朝、つとめて柴の戸をおしあけ見渡せば、うら珍らしくも雪ぞつもりて、野も山も、白妙の衣かつぎたる如く、庭の面は、枯木に時ならぬ花を咲かせ、いぶせき藁屋さへ、玉のうてなとまがひ、軒の松が枝は、雪高くつもりて、折れなん計りなるを。小鳥のわびしく集ひて、其の羽風に雪をちらせる、春の花にもおとらぬ眺めなり。

またあまりにわびしき折は、隣の家に音信れ、聖書の物語りなど耳にしつ、いたづらに語り過してかへらんとすれば、坂路のいたく雪のつもれる夕べもあり。

やむごとなきあたりの、此山里にわび住なし給ひて、此おもしろの景色をながめ給ふもあり。

吉野山峯の白雪ふみわけて、入りにし人を慕ひし操、はた、小簾かゝげて、高根にまさる御名を得給ひしも、皆此雪にぞしのばるゝ。

いみじく降りつもりて訪ふ人なきをりは、柴の戸かたくとざして、家のまとゐを爐邊に開き、談笑しつ。夜に入れば、新年のかるたのむしろに、ひけを取らじと、百人一首暗誦するもをかしく、文よむの好時期と、ほのくらき燈火のもとに、書とり出で、才高く學深き世の姫たちを、友として、窓うつ雪に眠りをさましつ、日毎夜毎を送る此山里、いかに幸多きことにはあらずや。

（面評）筆すなほにやさしく整ひたり。されどいふことの多くふるきを惜しむ。

新年

近江彦根町　宇多花子

國はじまりて、二千年來ためしなき、新玉の年のはじめを、今日うれしくも迎へぬ。

やさしき日の神は、玉のみ車に召して、五色の美はしき雲間より、うら／＼と東の山の端に出でたまひつ。

貴き家も、賤が屋も、日の丸の旗は、春風になびき、青松紅梅は、美はしく今日を祝ひ飾りたり。

四方の山々、八方の谷々、をちの野も、こちの川も、近き草も、遠き木も、皆新らしき色ふくみて、ゆたけ

く、人の心も、自ら新まりて清かなり。

あやに畏き皇天の御仁惠は、永遠に天地の間に、あまねく、鹽燒く磯邊の海士が茅屋にも、薪とる翁の賤が山家にも、垂れさせたまひて、尊さ限り無き事よ、御威德は外國までも流れて、滿洲の枯野も、西伯利亞の民も、御惠厚き雨に浴せり、げに有難き、大君の御惠よ。

遠き外國に、銃を握り、劍を磨く益良猛夫の營舍營舍にも、赤き心の日のみ旗は、東風にひら／＼と閃くならん。波靜に、風穩かなる黃海の上にも、祝ひの聲は高く轟くならん、勇々しき戰艦の甲板の上に‥‥。

白髮の翁も、九重の雲の上を拜して、有難き御仁惠に泣き、走り回るうなゐ等も、日章旗を翳して、大君の萬歲を祝ひ奉る、

車の響、馬の嘶き、鳥の聲も、雀の音も、皆千代萬代を歌ふ如く聞ゆるに、殊に松吹く風の和琴、岸うつ波の、音樂こそ樂しけれ。

行く人、來る人、知る人、知らぬ人、皆面に嬉びの色溢れ祝の詞は口々に、歡樂の聲、愛々の叫び、戶々に充ち、街に轟きぬ、

彼方の官營、此方の校舍、萬歲の聲、高く震ひつ。

美はしくよそほひて學びやに急ぐ、愛らしの小童、噫、そは、近き將來に於て、馬を遼東の野に躍せ、劍を滿洲の野に、揮ふ人、‥‥あゝ歌ひ行く軍歌の勇ましき事よ、‥‥征露の歌‥‥高く‥‥低く‥‥。

噫此の新玉の年、げに限り無く目出度き事よ。

紫の雲は空に棚引き、愛々の祥瑞は地に充ち、鳥は歌ひ、梅は咲ひ、羽子は踊り、紙鳶は舞ひ、翁は醉ひ、媼は笑ひ、小童は走り、少女は遊ぶ。

內地の人は、笑の中に、醉の中に、新年を迎ふるなり。

さても、見馴れぬ異鄉の天に、新玉を迎へし猛き益良雄の心情や、いかに、噫。

（雨評）文ににぎはしき新年のけしきはあれど、やゝくだん／＼しきを惜しむ。

すみれ

澎湖島馬公城內　若葉女史

青氈を布きたる如き春の野に、戲るゝ小供等の、愛らしき眼に、角力取草と、持て囃されて、其命の果敢なくあはれなるは、すみれなり。

春の女神の媒妁にて、露に一夜の契りを結び、咲き出でし女夫のすみれ、情ある人の、戀に謳はれ、恨みに

かこたれつ、露の年のそれならで、ほゝ笑める姿の、あはれさよ。蜂に戯れ、蝶に媚び、優しき小女に、笑を呈しつ、短かき花の一生を、樂しと思ふ心の殊勝さしたはしさ。

可憐にも、今朝開きたる二本の菫は、小女の手によりて、根より摘まれぬ。鎌のやうなる花の首は、互に卷き付けられたり。

小女は笑める小さき聲にて、

「爺が勝つか、婆が勝つか、一生懸命やつて見よ」

聲かけられしときの花のこゝろや、いかに。兩の諸指に、力は入りぬ。あはれ、濃き紫の二つの花は、くる〳〵とめぐりて、小やかなる小川の流れにと落ちぬ。

アヽ、此花の行方やいづこ。かれは打揃うて咲き出でつ、結びし緣の仇ならで、短かくも、そのおはりを共にせし女夫のすみれ。アヽ、人の世は菫の如く短かくとも樂しくあれ。

（雨評）やさしく面白き思ひつきなれども、前半の前置きの長きを惜しむ。

破窓錄（其の壹）

千葉縣山武郡豐岡村大橋貢方　時岡よし子

里の夕ぐれ

菜の花一路、入相の鐘に、おぼろ〳〵に暮れそめて、胡蝶二つ、追ひつ追はれつ、行き方それと知られぬ。霞にむせぶ小川のかなた、水車ゆるくめぐり、江水、一とひらの櫻花をのせて、遠く春の運命をはこび、河ぞへの柳朧に淡く、夕づゝの光り寂しげに、かゞやきそめぬ。

十六夜の月は清く澄み渡りて、そが光り、二三寸のびたる稻田の水に映り、そよ吹く風に、稻葉の搖るぐたび、小さき稻妻を走らせ、蛙の鳴く音亂れて、雨かとうたがはれ、向ひの村に百姓家の灯の火、飛び〳〵に南の方に一つ……北の方に二つ……。

折りしも、いづこよりか、砧の音、田舍の寂寞を破りて。幽かに聞ゆ。

降る雪

朝まだきより降り出でし雪は、翩々として蝶の舞ふが如く、暫にして、見渡す限り、野べも山べも白妙に、冬枯れの梢も、常盤の松も、時ならぬ花を咲かせて、まださきに春やきにけむと思はるゝを、こゝかしこ、吹きくる山風に飛ぶ吹雪は、さながら、散る花かとも、あやまたれつ。

常には、無くもがなと、いぶせく思ひし賤が伏屋の、白がねを粧ひておかしきに、烟ゆたけく立ち登るさまは、又、えもいはれぬ。眺めになむ。

逝く春

日頃親しき、友垣と、花の下蔭に、鶯の聲を聞き、菜の花咲ける野に戯むる胡蝶の影を追ひ、さては、妹子と共に、佐保姫の霞の衣まとひにし岡邊にさまよひつつ、樂しく若菜を摘みしも、はや夢と過ぎぬ。あはれ、ひま行く駒の足の早さよ。

雲と見し櫻の花も、散り失せて、小田の苗代に雨まちてにや、打ちしめりなく蛙の聲も哀れに、のどかなる春も、いとゞ淋しくおぼえて、夕べを告ぐる鐘の音にも、はや暮れ行く春を送るが如く、諸行無常と告げ渡りぬ。

あはれ、さきには樂しくこの春を迎へしに、今は悲しく春に別かるゝとのをしさよ!。

(雨評)、前段は宛然一幅の畫圖、優美なる筆致愛すべし。後段のこれに伴はざるを惜しむ。

○冬のゆふべ

長野縣坂城町　恩田　苑子

今日の仕事も片付いたから、歌の材料でも取つて來やうと、お日様が胡蝶山へ半分入りかゝつた時、家をこそこそと出た。徑を徑と折れて、杉並木を通り、とある道のそばにある大岩の上に立て、四方をながめて居る中に、彼方から薪をおつた婦人と振分髪の少女が、樂しげに通り過ぎた。間もなく枯れ芝を負た人と、それから商人躰の男がせはしそうに行つた後は、寂として只枯野を冬風が渡るばかりである。

此岩の後の方は、我が里を貫いてる里川が、うね〳〵と、枯野、麥畑を縫うて居る。其ほとりの水車はたえず、ギー……ギー……と云ふ音をさせて、今しも俵を背ふつた人が、水車小屋から出た。私は此景色を歌に入れやうと、考へて居ると、『苑子さん』と呼ばれて喫驚。振向いて見ると、私の學校の校長先生であつた。

『何うです、よい歌が出來ますか』

と笑顔して行つた。暫くして、

『天に代りて不義をうつ……』

と鈴の様な清く澄んだ聲が聞ゆるので、一寸岩の陰にかくれて、密に見ると、お隣の芳ちやんと綾ちやんの姉妹で、『運送』と書いてある提灯を持て、樂しく唄つて來る。多分例の車迎へに行くのであらう。芳ちやん、と云つて、岩かげから出たら、唱歌はパタリとやんだ。

『此の晩にどこへ行くの』と問ふと、

『車むかへに……』と耻しさうに、答へて早速に行つてしまつた。

あゝ、愛らしい彼の二人は、去年の四月母に別れ、其

家も富にあらねば、父は雪の日も風の日も、三里餘りの所へ、其日〳〵の活計をなすべく車ひくのである、二人は年葉も行かぬに、夕暮を提灯さげて迎へに行くのが常である。冬風の身をきるのと、朝早く起るのと、水仕事をすると、後妻のむごいのとは、彼の少女にとりて、如何に辛いであらうか。あゝ富の家、實の母ならば、この慘憺たる苦勞もあるまいに。

情にもろい私は、思はず涙を流したのである。斯る間に、遠山の麓、鎮守の森、草家、杉並木も、夜の神に抱かれて、だん〳〵と薄暗くなつたけれ共、彼の二人は來ない。私は、彼の二人の事に泣きながら、家路に急ぐ。折から雪まざりの時雨が降つてきた。

あゝ、芳ちやんは綾ちやんは、二人の父様は、今どこらを歸へつて來るだらうか。

○橋畔の柳

越後中蒲原郡嘉瀬村　五十嵐　富美子

村の南を流るゝ小阿賀野川にかけた橋の畔に、年經た一株の柳がある。その蔭に、苫屋根の小茶屋を設けて、駄菓子を商ふ老婆は、七十近い白髮頭である。

立ちこめた朝霞は東風にあらはれて、流るゝ水の面、萌え出でし岸邊の草、さては、老婆の小屋にまで、照り添ふる日影は、いとのどかである。

軍歌をうたひつゝ、學校へ行く一群の子等が通り過ぎた後て、柳の糸がそよ〳〵と微風になびいた。

すみれを一握りづゝ持つて、柳をくゞつて出て來た二人連の少女は、老婆に何やら言葉をかけて、ほゝゑみつゝ、船のつなぎある岸邊の方へ行つた。

短い羽織を着て、古鞄を提げた村長殿が、肥大の腹をつき出して、てく〳〵茶屋の前を通りかゝると、老婆は無言で腰をかゞめて禮をした。

どや〳〵と高聲で相語らひつゝ、橋を渡つて來た三人連れの男は、いづれも菅笠を冠つて、もゝ引脚袢といふいでたちである。これは、この村から三里ばかりへだてた龜田町の機買である。先になつた男は、茶屋の前へ來ると、腰の煙艸入から煙管拔き取りつゝ、「今日は」と元氣よく老婆に聲かけて、立ち止まつた。つゞいて、後の二人も、傍の休息臺に腰を下した。

老婆がすゝめた茶を飲み菓子を食ひつゝ、「今年は梅の花の咲きかたが早い」といふ話、「道路普請がこゝかしこに始まつてある」といふ話、「機業家も夏ものは利益が少い」といふ話、話の種はなか〳〵盡きさうもなかつたが、ちようど今し新津停車場についた北越汽車が、汽笛を鳴らしたのに驚いて、「イヤもう十時だ、そろ〳〵出かけませうよ」といつて、三人は立ちあがつた。

三人の機買の笠が、村境の森かげに見えなくなるころまで、老婆は店先へ出て、柳越しに川面をながめて、餘念なかつたが、やがて内へ引つこんで、三人が茶盃にのせて行つた茶代を、帶の間から出した巾着へ入れ

て、茶道具を持ちつゝ奥の方へ行つた。ひるげの煙、家々の軒にたなびきそめ、丼の上に羽叩きしてうたふ鶏の聲ものどかに、酔はしむるやうな光を放てる春の日は、いまし橋畔の柳と相對したのである。

○追懐

豐後國竹田町　大島菊子

東の空オレンヂ色に明けゆくと、山も川も、森も林も、皆一様に金色に彩られた。何とも云はれぬ、美しい初春の朝景色に見惚れて、年改まる芽出度さを、幾度となく、神に感謝したのである。

三十七年の一ヶ年は、妾が爲には、血と涙との月日であつた。末々諸共に此煩さい浮世を渡つて行かうと固く契りし靜江さんは、暖い風が吹いて、櫻の花が一片二片散り行く春の夕、美しい花の様なむくろを、地下に横へて、陰府路を辿る人となつた。あの美しい靜江さんが奈うして亡くなつたのだらうかと、毎日毎日、泣きの涙で、春も暮れ、夏も過ぎ、物淋しい秋になると、一層傷い感じがして、蟲鳴く夕、月の夜半、雨の晨は更なり、常に靜江さんの事を想ひ出すのである。何時もにない、心地よい或日の事、一人飄然家を出て、枯野の中にツクチンと佇んで色々な想像に耽つてゐると、涸れ果てた聲で「姉さん姉さん」と呼ぶのは、芳さんの聲。「憲ちやんが死にましたよ」と云つて、泣く泣く去つた後には、寒い風が、物凄く枯野の原に、吹き荒んで、やつれ妾を思ふまゝなぶつてゐる。

西も東も分らぬ、此玉の様な稚兒を奪ひ去るとは、どうした慘酷な事だらう。これでも神が世にあるのだらうか、とさめざめ、嘆いたのであつた。吁、最う思ふまい、云ひもすまいと、涙ばかりに何時しか年は暮れてしまつた。暗黒の年が今光に生れた、此の新しい年を迎へたのは、無論芽出度いが、さて靜江さんや、憲ちやんが居たならばと思出てゝは、流石に涙の種である。

二人が亡くなつた後は、満身の愛情は、皆芳さんに注ぐので、何故芳さんがそんなに可愛いかと問ふ人があるが、それは妾自身が分らないので、丁度花に向つて、花よ、何故汝は斯く美しきかと問ふのと同様に、唯可愛から可愛のだと、答ふる外はない。つまり、一種のインスピレーションが、心の奥の琴線に觸れて、「可愛い芳さん」と響くのである。

若し現世から、芳さんがないとしたなら、奈うであらうか。世の中は荒廢の巷と觀ずるの外なく、妾が命脉たるアツフエクシヨンは消え失せて、浮世の煩さい、果敢ない、想ひは、さなきだに寄る邊もない此孤兒を、層一層幽暗の境に陷るであらう!!

○なき母

東京　柳　きよみ子

疲れたやうな、夕方の光線は、湖面に映じて、其反射が山の裾の方一面に、輝いて、向の小丘に五六の藁葺屋根の百姓家が、丁度、文人畵の材料にでもなりそうに、傾く夕日は、ぼろ裏屋まであらはであつた。

あゝ、此藁屋の内に、明けても暮れても、ひん／＼高く降八軒、なり渡るやうに、雪の夕べも霜の朝も、糸つむぎをして居られたのは、我一人の母にてゐましたるよ。

あはれはかな。あはれはかな。今此の傾くばかりなる藁屋はあれど、母は世に在まさじ。あゝ遠き返らぬ旅人になり給ひぬ。三年前の事を思ひ偲べは、胸もはりさけんばかりなり。あゝ、三年の昔、我師範學校の寄宿舍の二階にありて、尤も今のやうな夕照が輝やいた時ガラス窓を越して下の方の曠い／＼テニスコートの方を眺めて居つた時、小使は、小林さん／＼と叫んだ。ふと見れば、電報ですよ!!! と云つたのであつた。あゝ、其時の聲、其時の現況は、今尚心の中に、ありありと殘つて居る。

あゝ、實に、我は我が一人の愛する母を、此時失なつた。此藁屋の塵あくたの内に永眠せしめた我は、母の終焉を知らざりし不幸の子なりき。三年の後なる今月、此村に來て、此藁屋の前に徐に立ちて、號泣したり。せめては今まで長らへさせ給へば、糸織の御被布位は召させ申して、平淸き隱居室位には御住ませ申したるものなるを。あゝ我は云はじ、語らじ、むねつぶれん。

○寒紅梅

伊豫國新居郡新居濱 坂梨雅子

吹きなば吹きね、降らば降れ、あるゝも降るも勝手なりと、我物顔に冬の風神、雪を蹴立てゝ、長白山を捲き下す暴威、肌を裂き鼻も耳も落ちなん寒さに、細き流れは氷り詰めて、堤に立てる冬枯の痩柳嵐に伴れて高く低く、自然の音樂を奏しつゝある滿洲荒野のさ夜中!。

然らぬだに日軍の奇襲に、度々思はぬ不覺を取りてより、是れに備ふる事彌々嚴に、蟻さへ入り兼ぬる樣に歩哨の數を增しぬるに、何處を如何に來りけん、矮少なる一土人、折りからの暗にまぎれ、クロバトキンの陣處目ざして、抜き足挿足しのび寄り行く!!!

「止れッ! 誰だッ!

闇の中より露兵の濁聲諸共、暫しの暇も有らばこそ。逃れんとする土人の手首、むんづと引捕へスラブ人の金剛力、振り切らんとあせるを、事ともせず、

「貴樣は何だッ。

「土人て、外に惡漢でもないッ。

「此夜更け、何仕に來たッ。多分敵の間者だろッ。本陣へ同行する、歩めッ。

露語巧みに辯解する土人を、無理に引つ立てゝ去つた

後は、又木枯しのひとしきり

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「何御心配は御無用です。
と言つて、今しも消えかかつた篝火に、薪を加へつゝ、靜に頭を上げたのは、年の頃二十七か八だろうと見ゆる色の淺黑い青年士官であつた。此處は日軍の前營である。青年士官と向き合うて居るのが、年頃三十八九の、色は軍人としては珍しい程白うて、長面の鼻下の八字が、又其人の品位を高めて居る陸軍の中佐であつた。
「而し、君は信ずるか知れないが、如何に大膽ても、女の身として、易く出來る事ぢやないからな!
「ですが、私の考へでは、女だから仕事が易いだろうと思ひますね。頭をトンビになして、支那服を著けた處、何う見ても、日本人とは見られませんから!
「それでも、第一歩哨といふやつが立つてるぢやないか。
「ハ、そうですね、難事は難事に相違ないが……、實ね話がそれますが、彼の婦人は、戰爭前此方に來て居たそうです。淸語露語兩方共仲々上手ですよ。
「むう!、君はよく其人の由來を知つてるな。
中佐の眼は急に輝いた。
「ハ、それに就いては、又面白い談があるです。其人と云ふのは、年は廿四位いの品の良い顏立ちで、色の白い、まあ十人並を越してますね。僕等の目から見れば、ハ……。
「いやッ、君等直にそれだから、ハ……。
大尉はあわてゝ
「いや分りました、ハ……、それで、其人物は極優しい無口な方で、始めは天津の公使館附武官の夫人だつそうですが、其武官が、此度日露戰爭で、當地に來てるそうで、一躰その良人の武官と云ふのは、極めて一徹な人物で、出征の折りに、無理往生、泣いてすがる夫人に、三行半を食はして出征してしまつたそうです。可愛想ぢやないですか。それ夫人は、偕老同穴と盟つた夫に去られて、何望みがあろう。苟しくも軍人の妻であつたのだ。幸い知つてる露淸語を應用して、大いに國に盡そうちゆんですな。如何にも盛んぢやないですか。丁度我隊が當地に着いた折りでしたが、部下の兵が間諜を捕へて、僕の處へ引張つて來ました。それが謂ゆる其夫人でした。小官も其時は實に意外でした。思はぬ事から、敵情偵察の好都合を得て、今迄得た其敵の動靜偵察の功は、軍に大なる便利を受けしめたのですだから、此度の事も彼が一番だろうと信じて出したのです。
中佐は驚くが如く、憂ふるが如く、又泣くが如く、謝するが如き、種々顏の色を更へて、終りまで熱心に耳を傾けて居たが、結了ると同時に、言葉せはしく、
「ぢや、君、!君、その名は何か、知つてるか。
「上官は、何か御心當りでも有るですか。

「いやなに―、その、そんな事は無いが!!!

「エ……、名はそうだ、寫眞の裏……、一寸待つて被下い。

「何?、君はその寫眞を……。

「ハイ、寫眞は實は此度の事は容易ならん事だから、若しも捕へられた時は、良人で有つた人、名は申しませぬが、他日分明つたら、國の爲め死んだから安心してくれい又、是れが片身と差上げてくれつて遺して行つたんです。小官は其時覺えず、嗚呼罪だ、社會は罪だと叫びました……と、鼻をかんで語をつまらせながら、ポッケットから取り出して、包んだ桃色のハンカチーフを除けて、差し出した!。

「どれ! おや、梅子ッ、兎せッ!!!

「エッ!!!

「寫眞抱きしめ、すつくと立上つた中佐、面喰つて顔を上ぐる青年士官、隣りのテントに居眠りして居た士官、にゆつと顔突き出して、

「どうしたつ。

折りしも、篝火プッと消えて、黑白もわかぬ眞の暗中。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

新玉の年立ち返りて、今日こそは我明治の三十有八年一月一日、内地ならば禮服の折り目正しく、御目出度うを繰り返して祝ふべき日をぞ、修羅の巷! 昨夜來の大雪に、野と云はず山と云はず、一面の積雪には、哀れクロパトキンが御得意の雪戰如何にや。さても、又此處如何せし、露軍が繩張り内には、正月の初、血祭りか、雪に亂れし唐紅! 後にて聞く高島梅子とやらん女丈夫が、巳年元旦、日未だ高からざるに、胸には多くの秘密を抱いて、滿洲の露と散りしとや、憐れ!

（了り）

○花を見て亡き友をおもふ

八代女學校　本島とよみ

小萩よりほろ〳〵とちる白露の行方したはれ、かれたる我庭のそゞろなつかしうなりて、心なくおり立ち、歩を庭にむけぬ。月いや高くすみ渡りて、千草の下にすだける虫の音の、我むねには一しほかなしさのまさり來て、やるせなき涙のみ出てくるよ。わすれもせじ、今宵の如き月淸き夜、われは、したしき露子の君と、共に手に手を取り、ま垣のあたりそゞろあるきて、此處許にさける白菊をいたうめでしに、あゝ今宵はたれとめでんか。

したしかりし露子の君は、去年の秋わらはをすてゝ、遠くかへらぬ旅におもむき給ひぬ。

其時のかなしさは、云はずもがな。御墓の前に立ちて、そゞろ昔をくりかへししも、幾度ぞ。此白菊手向けて石碑をいだきなつかしいとなげきしも、幾度ぞ。あはれと云ひし朝もあり、淋しと云ひし夕べもありて、わするゝひまなき妾が身、如何におぼしやらせ給ふか。

土下の人、かれたる秋を見ては、よゝとなき、涙のかわくひまもなくよわりはてたる姿が身。
あはれ、今宵も亦此花手折りて、友の御墓の前にさゝげんか、よき香を。

○月下の想

上野國太田町 紫雲女史

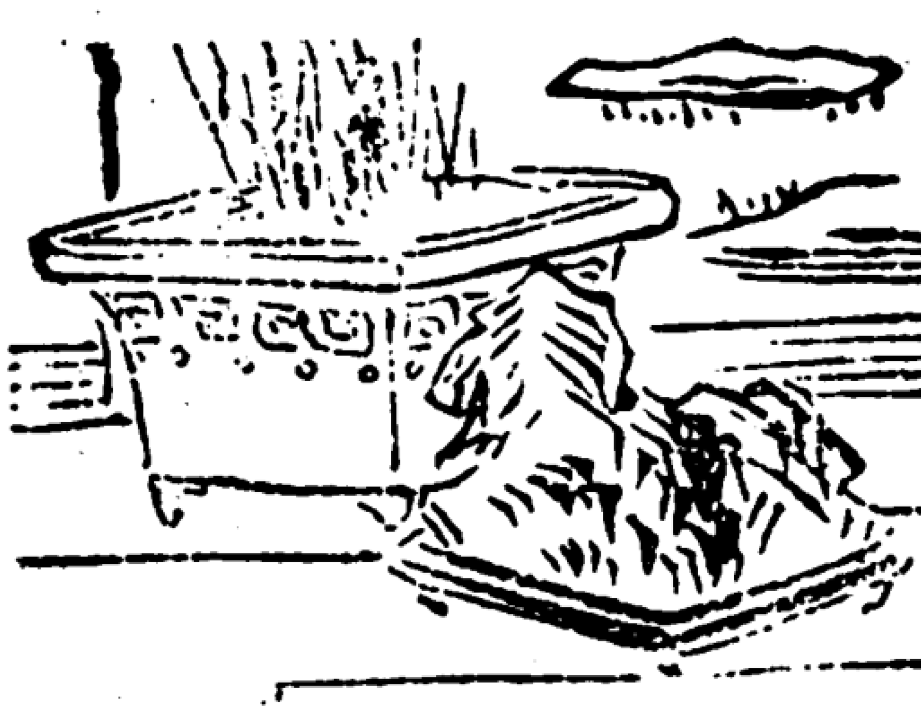
庭の白菊に、瑠璃を宿したる明月を仰ぐも、うたてし。戀しき夫に別れてより、はや一年の冬は暮れなんとす。さるを絶えて、風のおとづれだにあらぬごと、筑紫の花に、故郷の姿を、忘れ給ひしにはあらざるか。さても戀しきはわが夫よ、恨めしきはわが夫よ。
あれよ、友におくれて、空行く一羽の雁、南をさして戻るも、いと懐かし。
やよ孤雁、心あらば、翼をかしね。さらずとも、この思ひ、戀しのわが夫に傳へてよ。

○露營の月

名古屋市西魚町二丁目 戸田敏子

とゞろ〳〵と踏みならし、いさみ狂ひし荒駒も、今は其足掻を靜め、宵の篝火も殘りなく消え果てゝ、月さへ愈々さえゆきて、草葉の露にやどるそが光りに、喞々すだく虫の音、いとうらさむき夜風につれて、いと悲しくも枕に訪づるゝ、草をしとねのものゝふの、あゝ、夢はいづこを彷徨ふらん。

しん〳〵更け渡る大空に、澄みも冴えたる月下を、連々なきわたるかりがねに、ふとまどろみをやぶられ、いつしか深き思ひに沈みて、
明日をも知らぬ身ながらも、さすがにふるさとの戀しくて、遙かに偲ばるる、あゝ母上の老いの身に、さぞや今頃は此傾く月をながめつゝ、きぬたやうちておはすらん。いや更け渡る秋の夜半の。
あゝ思ひやいかに亂るらん。
狂ひおたけぶ荒獅子も、ひしがんいとたけきものゝふ、たとへ幾千萬の仇敵、汐の如くよせ來とも、平然、片頰にほゝゑみの見ゆる、天晴れ日本ますらをも、たへぬ思ひに亂れては、そゞろ征衣の袖にひと雫。
あゝ宿るは、夜半の白露か。
おゝ汝れよ、かたむく月よ、いざゝらば、汝れが清けき光りもて、明日は我が屍を照らせかし、
いづれ死すべき此身なれば……。



消息文

天

雪見に招く文

麹町　ゆかり女

冬とは申しながら、春の花の色香にも劣らぬけだかき花の、きのふよりさき初めて、野も山も一つらに、庭田畑のわいだめもなく、岩ほのうへまでもさき揃ひ、見渡しきよく、心もすが〳〵しきこの雪げしき。日ごろはあの眺めあきつる西方山の、けふはさまかへてねりぎぬ着て寝たる姿の、めづらしく見らるゝを、あはれ、夜の神の恵の光りを添へ給はらんには、ましていかばかりをかしかるべきなど、わりなく思ひ出づるに日頃へだてなきあなた様と、今宵の雪を月の明りにめで歌ひつゝ、つもるうさばらしのせまほしさ、あすの下調べなし果て給はゞ、道すがら歌の種をも拾ひつゝ、八時ごろより、御出かけ給はりたく候。さすれば、雪より深き、あなた様のまごころを、うつす鏡も有る宝に御いざなひ申すべく候かしこ。

（両評）可憐の愛すべきあり。添ふるに、才氣の愛すべきあり。愛すべきの文といふべし。

地

虚飾を戒むる文

千葉縣山武郡千代田村岩山小川方　呉たけ子

御身が常にめでたまひし、南の窓の梅の花、きのふけふ咲きいでしを見るにつけても、いかにおはすとなつかしうぞおもひまゐらする。あはれ、此花の、ふる白雪をしのぎ、寒けき風にたへて、ほころび初めし其姿の清らさ。貞淑なる女子が、容儀端正なるにたぐへつべく、又其かをりのことなくゆかしきは、擧止の閑雅なるに准ふべくなん。牡丹の艶なる、女郎花のなまめきたる、ふと心ひかるゝものにはあれど、此梅の節操

には及びがたかるべし。徒らにたゞあてやかなるは、厭はしきものに候。ことに御身のごと、物學びに餘念なき事あるべからざる際は、虚飾に心ひかされて、なすべき業を怠るごとき事あるべからず。さりとて、女の身として蓬髪垢衣、みだりに磊落書生をまなばんは、片腹いたき極みに候。たゞ常々心がけて淸らかに奥ゆかしきさまこそ、あらまほしく候へ。こは姿形のみにはあらず。友垣との交り、其他なべてのわざ、眞心をもてとり行ひ給ひ候はゞ、人も慕ひなつかしみ候事、梅の花を見るがごとくに候ふべし。かく山川をへだて候程に、梅の花の咲くを見てだに、まづ御身の上の思ひ出でられて、學びのやにて、我よりもなほ深くこまやか學び心得給はんことの見まほしくて、老いたる人の如きくり言、あしくなおぼしそ。いとしき妹よ。我はいまださばかり老はしはべらず。三月の試驗終りて、郷に歸るの待たれぬる哉。共に野邊に打つれて、美しき草花を尋ね侍らん、あら〳〵かしこ。

（雨評）むづかしげなる事を、優にやさしく言ひつくされたるところよし。花の引きごとにてはじまり、花のことにて情をのべさゞめたるところも、おもしろし。

人

出軍の兄に遣はす文

兵庫縣美嚢郡吉川村　山本菊子

この間の御玉章、くりかへしくりかへし、面白く讀みはべり申し候。仰せの通り寒さもよほどきびしく相成り、朝の雪げ、夕の嵐にひとめも草も枯れんと致し候有様、御地はさぞと察せられ候。されど、兄上さまには、此寒さも厭はせ給はず、日毎の軍務に從事せられ候由、女ながらもいと胸廣き心地致し候。扨て過ぎにし日の○○○占領の有樣など、こまやかに御知らせ下され、中にも、其際首尾よく任務を盡され候そのうるはしき水莖に接し、兩親はじめ皆々大いに喜び御祝ひ申し居り候。

思ひかへし候へば、一と年の昔、御出軍の首途にお別れ申し候てより、兄上さまには、天暗くして地霑ふ滿洲の野に、晝は汗馬に鞭うたせられ、夜は荒野に露營せられて候御艱苦、嘸々御心痛ませ給ふ事とおしはかりまゐらせ候。これに引きかへ、私には何の障りも無く、暖かなる父上母樣の許にて、何一つだに不自由

く、むざ〳〵と日を過し居り申し候事、實におはづかしき次第に御座候。

されど、御出征の際、こま〳〵と眞心こめて御教訓下され候言の葉は、今尚ほ耳にのこり居り候。「さても學びの道を怠るな」とのおさとしのほど、思ひ返し候ては、思はずはらはらと散る露は、しらず〳〵紙上をぬらし居る事に候。お言葉にて、一入勉强いたし、せめては御厚意の萬が一つにもと、妹の花子とも相語らひつ、日毎登校致し居り候へば、何卒御安心下さるべく候。

をり〳〵の御手紙に、御地の寒さも承はり、何をかまゐらせんと思ひめぐらし候へども、よきものとて思ひつかず。聊か御長命をいのらんため、千人の手をわづらはし仕立あげ候肌着二枚、小包にて御送り申しあげ候へば、何卒御落手下さるべく候。是には千人結びと申し、大いなる意味のあるものにて候。如何なる難題苦難に接し候とも、此千人結びの肌着だに御召し居られ候へば、それに退轉して不忠不孝無禮無道等仕るべき氣遣ひ無之候と申傳へ居り候。是れ元より世人の勝手なる申し分に候へば、悉く信ずべきには候はねど、また一つは胃寒の財とも相成るべく候へば、何卒御召し下さるべく、偏に願ひ申し候。追々寒さも相まし候へば、我家の事ども、少しも御懸念なく、精々御身を大切にせられ、一たび平和のあかつきには、天晴なる功名して、早く名譽の凱旋遊ばされん事を、偏に祈り申し上げまゐらせ候。

尤も斯樣の事、兄上樣には、女の我等が申さずとも御存知の事に候へ共、兄上をのみ賴みまゐらする妹の愚痴、お叱りなきやう一重に祈り候。

（雨評）筆づかひ、縱横變化の妙を欠く嫌ひはあれど、いかにもおとなしき妹の情はたしかにこもりたり。

秀逸

母を失ひたる友の許に紅葉送るとて

周防國御堀川向　堀　龍　子

時雨しめやかに降暮す昨日今日、いとゞ眺め勝ちにおはすらむと想ひ侍るにも、さらぬだに濕り勝の袖、いよ〳〵ぬれ勝り候。早や一七日も明日と相成候に、歎きつゝも過ぐるものよと、今更夢の樣なる心地致され

候、哀れ、昨年の此頃、露分け迷ひし折、何とか仰せ給ひし、何とか聞き參らせし、「母の我が爲めに苦勞するにつけ、老後の樂見せてやは」と、宣ひしよ。それその學びの道のまだ終へ給はぬ内にしも、まだ三十路の行く先樂長き母君を失ひ給はむとは、とても世は夢に候よ。夜毎〳〵の寢覺めに聞かれし砧の音の打絕えては、中々に夢結ぼれぬ夜寒むの床に、さらでも淚多き君の斷腸の思ひさこそと、他見ながら袖ぬらして候よ。されど、君の御才學、日頃の孝養にて滿足せさせ給ふらんに、少しはなぐさめ給ひてよ。扨、年頃母君の御賞にあづかりし紅葉、今年も色染めて候に、愛でにし人の今は無ければ、紅葉もさぞな、本意なからむといとしうて、一枝御靈に參らすになむ。色あせて候へども、ぬれつゝ折りて候へば、淚に色あせしと思して、露のまゝさゝげ給ひてよ。こを受け給はん靈の心、花の心より、我が心の内よ。噫、云はじ〳〵、此の上は!。筆も怪しうふるへて候へば!。天の上より君を守り給はんに、御身を損じて、御歎きをなかけ給ひぞ。

（兩評）才氣は見ゆれど、なほ雅のこれに伴はずたど〳〵しきをなしむ。

別れて久しき友の許に

前橋市紅雲方　若山みどり子

ふりたる枕詞にも候へども、しづの小田まきくりかへし〳〵て、懷しきみ文拜し奉りぬ。げにも、すぎつる彌生の春のころ、今猶めに浮ぶ高崎停車塲にて、つゆけき袖を別ち參らせてより、早やこゝに六年の月日を重ね侍りぬ。其間、花さき匂ふ春の野邊、さやけき秋の月かげにも、もろともに四つの袖つらねてむつびかはしゝ事の偲ばれて、東の空のみなつかしう、みけしきを伺ひなんとは思ひつゝも、たゞ京の空とのみ、おはしまし所も知られずして、春秋毎に、今日や雁の便りも聞ゆらんか、明日は御玉章もや有なんかと、甲斐なきことども思ひつゞけて、いとはかなくも暮らしぬる心の中や屆きけん、ゆくりなくも御玉章給はりし事のうれしさに、胸のみをどりて取手ももどかしう拜し侍るに、かぞいろ君の御二所始め奉り、君にも御變りもおはせぬ由、何より嬉しう存じ奉りぬ。思へば筒井つゝふり分髮のいたいけなりし六年の昔、青葉冷しき木の下蔭に雛遊びに餘念なかりし事、峰の紅葉色ずき染めて、月影さえ行く秋の夜半、互に月をもてはやし、

おぼつかなき三十一もじを作りては、笑ひ興じ候事も、今猶おぼえておもひのみぞいてられ侍る。あゝ筵舟ながしゝからす川、鬼事なしゝ公園地、櫻狩せし淸水山、指さし見てしはる名妙義の山も、其儘にかはらであるを、懷かしき君はおはせで、友なし千どりの妾は、只たのしかりにし古人の夢のみ、いつもくりかへされて候。
なほ聞え上度事どもは、利根の川水たえもなく侍れど、急ぐ心の小車の、こゝにて筆をとめ侍る、あなかしこ。

（兩評）優美の愛すべきはあれど、やゝいひまはしのまだしきをしむ。

出征の夫に送る文

栃木縣　齋藤秀子

寒さ一入きびしく相成候處、如何ゐらせられ候か。定めて御達者にて御働き遊さるゝ事とは存じ候へ共、氣候の變る異國の事とて、日頃の御健躰も、若しや病氣にてもと、朝夕案じ申候。留守宅にては、幸に何の變もなく、母上様も追々めす御齡にも似合はず、いとまめ〳〵しくゐらせられ、麥蒔や稻刈なども、皆御手を降され、誠に御健康にて、壯年の私などは、とても及ばぬ處に御座候。一郎も至極達者にて生ひ立ち、あなた様の御出立頃は、まだはらばふ事さへむづかしく候ひしを、只今にては、さつ〳〵といざり出し、障子や柱などにつかまりては立ち、立ちては轉びなど致し、「まんま」「ばつば」などの片言も申す樣に相成申候。農事も近所の人々の御蔭にて、案外早く片付き、稻も一昨日悉皆始末をつけ申候處、例年のざつと三倍の豐作にて、出來も隨分よろしく候間、御安心下され度候。この肌着は農事の暇に縫ひたるもの、誠に粗末なる出來に候へ共、何卒御着用なし下され度候。尙日增に寒さ相募り候まゝ、ゆめ御油斷遊されず、御健康にて隨分國家の爲め御盡力の程、一重に御願ひ申上候。

（兩評）文は整ひたれども、情の動かざるを惜しむ。

かるた會に友を誘ふ文

岩代國伊達郡小島村　菅野和子

戰爭熱に心勇み、待ちに待ちし旅順の陷落、「ハルビン」の攻擊を見ずに年を迎へしは、永き恨みと被存候。兄上には出陣將卒の苦心の程を思はざる言かなと叱られ候。さはあれど、武裝せる松の內を、悄然と過ぎこす

は、これこそ敵に弱點を示すものと思ひ、何か活氣ある團居に一夜あかし侍らむと、日記取りいで候に、恰もよし、骨牌會に妾が連戰連敗せる去年の今日にて有之候。其夜の事思つる毎に、昨夜の如く興迫り、くやしがりて、武夫樣の和手搔きし事や、泣き出し相になりて笑はれし事ども思ひつゞけて、此度こそ讐を酬いんと氣込み居り候。取つて五つの弟も「負けるとロシヤだ」などゝ同情を表しくれ候。

されば今夜は骨牌大會を催し候。何卒御用事は晝の内に御濟し遊ばされ、黃昏より御光來待上げ候。母上樣には、例の讀み方御賴み申候。尙御近所の照子樣千代子樣は、是非御同伴なし下され度、男子の人達も、御知音の方あらば、御誘引の勞を取られ度候。それにつけても、武夫樣及び其友の君達には、出征せられて、御不在なるは、遺憾に存じ候。然し、こゝの戰報を御通信申さば、一縷の慰問にも相成べくと益々得意がり居候。先は御誘ひの言葉のみ、あら〳〵かしこ。

（評）才氣は見ゆれど、筆のまだしきを惜しむ。

○戰死者の遺族を慰むる文

神戶市榮町五丁目　中村喜久子

光りのどけき春の日も、靜心なく、滿洲の空や如何にとのみ忍ばれ候ひし御脊の君の上、聞くも勇ましき名譽ある戰死をなん遂げ給ひしと耳にせし時の心中、筆につくされず候。君には其後ねられぬ夜のみおはします由。他人の身にてもさなるを、さおはせむも理りにこそ。されど、此度の御戰は東洋の平和を保つべき義戰なり。かく名譽ある御軍に召されて、こよなき功を顯し給へる、誠に忠實武勇のますらをとよばるゝ男子かひある御最期、君よ、屍は滿洲の露と消えぬとも、其名は千歲の後までも殘り候を。

あはれ、此大御代に生れて、徒らに朽果つるものあるを、脊の君には、人々よりぬきんで給ひての、御いさをし、誠に御勇ましく存じ候。

しかも、君には、尙御勇ましき若子達のおはしますを、如何に戰爭の御遊びに三軍を叱咤し給ふ樣、父君の御面影寫し出し給ひて、誠に末樂もしく存候。君には若子樣の御成長を以て、御心を慰め給ひて、父君の志を遂げ給はらんを樂しみたまはんことを、この上は、偏に願上まゐらせ候。

○歲の暮に故鄕の母君に贈る文

札幌北一四七の一　小山かく子

吹く風寒く身にしみて、朝な夕な堪へ難き今日此頃、母君には如何遊ばされ候や。私事上京の途中には、初旅初奉公の事とて、行くさきの事など彼是打案じ候ひしも、夫もいつしか昨日の夢となり、只今にては主人

の氣請けも宜しく、實直に勤め居り候。去り乍ら、時々他人の情薄さに驚き、母君の御膝下を忍ぶ夜半もこれあり候。

多事多忙なりし卅七年も、數日中に逝んとして、歳の市も賑はしく、主家なども目の廻らん計りの忙しさに、此手紙も夜の寒さ身に迫る午前の一時に認め申し候。弟には『よく〳〵勉强せよ』妹には『水し業など、母君のお手を煩はさせな』と、姉が申送りし由、よく〳〵御申しきけ下され度候。少くも月に一度は必ず御機嫌伺ひの書面なりとも差上ぐべしと思ひ居りしも、主人ある身の、心のみにて、御無沙汰に流れしことも、度々ありしが、萬々御情察の上、御寛容下され度候、先は取り急ぎ御詫旁々御伺ひ申上候。

○新年妹に送る文

大阪西區西長堀北通五丁目　山田稻子

とうとう御正月になりまして、新年は御芽出度うございます。姉さんも、お年が一つ多くなりましたから、春江さんも八つになつたのでしたね=。去年のお正月前、まだ姉さんが家に居た節の事。春さんは毎日聞きましたてね、姉さんもうお正月迄何日つて。其時に、姉さんが今日から五日目ですと言つたら、春さんが夫は夫は喜んで嬉しさうな顔をなさいましたよ。今年もさうなんてせう。お母さんに毎日聞きましたか、兄さんでしたか。モウ四日だとか三日ですと聞きなさつた時に、春江さんの喜び顔が見たかつたはね=。去年のお正月迄餘りお上手でなかつた手まり突きが、今年は餘程上手になりましたらうね。手まり突きと言へば、隣のきイちやんが、お寺の椽から落ちましたてね。春江さんも餘り一生懸命になつて、手まりを突くと、お寺の椽かち落ちますから、氣をつけて突かんといけませんよ。お父さんや、お母さんに、よろしく御しやつて下さい。さよなら。

○梅花にそへての文

香川縣香川郡宮脇正覺寺裡　藤井靜子

北山は今に去年の雪けにさへ侍れど、日に增し寒もうすらぎ、長閑に覺ゆるを、我庵のまがきの梅花、日南によれる方は、來る春をも忘れやらず、四つ三つほゝゑみ、香りもいとなつかしう侍れは、一人して打ながめんもいかゝやと、一枝手折りて御許に參らするよ。あはれ、淸き御文机のほとりに插み賜はらば、花の面目にこそ。なほ日頃おたしなみの御言の葉もらさせ給ひ、一首給はらば、鶯の初音よりそれよりも、嬉しき事になん、あなかしこ。

○菊に添ひて友の許へ

越後巻高等小學校　內關千代子

秋もいよ〳〵深くなりまして、をちこちの木々、一と朝ごとに、葉の數もうせ、何となう物淋しき折柄、あ

なた樣には御變りもなく、御勉强の由、御目出度く存じ上ます。就いては、御存じの通り、私は菊を非常に好み、春の頃よりぢーやに手傳てもらひ、心苦して育てました効があらはれまして、白黄紅などいづれも美しく、畑一面に咲きそろひ、よいかをりが、プン〳〵と風に送られて、私の書齋まで舞込みして、ほんとーに嬉しいのです。其れですから、暇さへあれば、裏へ出て、菊をながめて居ますが、かかる樣を一人で樂しむは、あまり口惜しさに、一枝差上げますから、御文机の上にかざし、學びの折に御ながめ下さい。私さへ嬉しいのに、菊もさぞ喜ぶでせう。然し、之れはほんの一枝で、見るべきふしもありませぬから、御勉學もさることとなれ共、時には御身躰の御保養とも思召し、來る日曜には、御妹樣御つれ、御出下さい。菊もさぞ待つて居るでせうから、是非見に來て下さい。御待申して居ますよ。そして、菊に付ての知識を、互に語り合ひませうね。ほんとーですよ、左樣なら。

○都の友の許に

宮城縣志田郡敷玉村　桂島登美子

其の後は打絶え御無沙汰のみ致し居り候に、隙行く駒の淀みなくて、何時の間にかは、秋も深う相成り、千草の虫の音も絶えて犬の遠吠かすかに枕邊にかよひ候等、實にもさみしき時になり候を、御許の君には如何すごさせ給ひてん。定し奥深き文の林をたづね給はんと、御羨しう存じ上げ候。さるを、こなたは秋の田舍のとて、毎時〳〵いそがはしく、文など手にせんはおろか、用達さへ仲々に覺束なく候へど、たゞをかしくもあはれなるは、庭の黄菊の、見る人なきに、凛として動きなき操を、わづかに其芳香にもらし居るにて候。あはれ、汝も都に住家求めなば、やさしき姫君の文机か、はた貴き殿の床間にかざれて、今の憂き目は、他所吹く風のそれならんに、そをすてゝ、此の草深き賤が庭に吹き匂ひ、不運になき居る吾身を、朝に夕になぐさめ呉候、其の心根の程、優にやさしく、かくてこそ菊の菊たる所以を感じ入り候。さ候へば、ひとり田舍に殘され候賤の女の彼の涙も、よう〳〵うすらぎ、今はたゞてん春の試驗を、夢に現に待ち居るのみに候。あはれ、都の君よ、田舍の晩秋かくの如く至りて、さみしく候ふを。

○新年故郷の姉に送る文

名古屋市西魚町　戸田敏子

あらたまりぬる年の始めの御ことぶき、めだたく申し納めまゐらせ候。

世の中は戰爭の話にて、ここも、かしこも、いと騷しく候。加へて、此戰爭のために、不景氣のから風は、吹すさび申候て、何處も淋しく、極めて悲慘なることばかり耳にし、眼に見るものは、みなかなしきありさまのうちに、此目出度新年を迎ふるこそ、いとおかし

の氣請けも宜しく、實直に勤め居り候。去り乍ら、時々他人の情薄きに驚き、母君の御膝下を忍ぶ夜半もこれあり候。

多事多忙なりし卅七年も、數日中に逝んとして、歳の市も賑はしく、主家なども目の廻らん計りの忙しさに、此手紙も夜の寒さ身に迫る午前の一時に認め申し候。弟には『よく〳〵勉强せよ』妹には『水し業など、母君のお手を煩はさせな』と、姉が申送りし由、よく〳〵御申しきけ下され度候。少くも月に一度は必ず御機嫌伺ひの書面なりとも差上ぐべしと思ひ居りしも、主人ある身の、心のみにて、御無沙汰に流れしことも、度々ありしが、萬々御情察の上、御寬容下され度候、先は取り急ぎ御詫旁々御伺ひ申上候。

○新年妹に送る文

大阪西區西長堀北通五丁目　山田稲子

とうとう御正月になりまして、新年は御芽出度うございます。姉さんも、お年が一つ多くなりましたから、春江さんも八つになつたのでしたね＝。去年のお正月前、まだ姉さんが家に居た節の事。春さんは毎日聞きましたてね、姉さんもうお正月迄何日つて。其時に、姉さんが今日から五日目ですと言つたら、春さんが夫は夫は喜んで嬉しさうな顔をなさいましたよ。今年もさうなんでせう。お母さんに毎日聞きましたか、兄さんでしたか、モウ四日だとか三日ですと聞きなさつた時に、春江さんの喜び顔が見たかつたはね＝。去年のお正月迄餘りお上手でなかつた手まり突きが、今年は餘程上手になりましたらうね。手まり突きと言へば、隣のきイちやんが、お寺の椽から落ちましたてね。春江さんも餘り一生懸命になつて、手まりを突くと、お寺の椽から落ちますから、氣をつけて突かんといけませんよ。お父さんや、お母さんに、よろしく御しやつて下さい。さよなら。

○梅花にそへての文

香川縣香川郡宮脇正覺寺裡　藤井靜子

北山は今に去年の雪けにさへ侍れど、日に增し寒もうすらぎ、長閑に覺ゆるを、我庵のまがきの梅花、日南によれる方は、來る春をも忘れやらず、四つ三つほゝゑみ、香りもいとなつかしう侍れは、一人して打ながめんもいかゝやと、一枝手折りて御許に參らするよ。あはれ、淸き御文机のほとりに挿み賜はらば、花の面目にこそ。なほ日頃おたしなみの御言の葉もらさせ給ひ、一首給はらば、鶯の初音よりそれよりも、嬉しき事になん、あなかしこ。

○菊に添ひて友の許へ

越後卷高等小學校　內關千代子

秋もいよ〳〵深くなりまして、をちこちの木々、一と朝ごとに、葉の數もうせ、何となう物淋しき折柄、あ

なた樣には御變りもなく、御勉强の由、御目出度く存じ上ます。就いては、御存じの通り、私は菊を非常に好み、春の頃よりぢーやに手傳てもらひ、心苦して育てました効があらはれまして、白黄紅などいづれも美しく、畑一面に咲きそろひ、よいかをりが、プン〳〵と風に送られて、私の書齋まで舞込みして、ほんとーに嬉しいのです。其れですから、暇さへあれば、裏へ出て、菊をながめて居ますが、かかる樣を一人で樂しむは、あまり口惜しさに、一枝差上げますから、御文机の上にかざし、學びの折に御ながめ下さい。私さへ嬉しいのに、菊もさぞ喜ぶでせう。然し、之れはほんの一枝で、見るべきふしもありませぬから、御勉學もさることなれ共、時には御身躰の御保養とも思召し、來る日曜には、御妹樣御つれ、御出下さい。菊もさぞ待つて居るでせうから、是非見に來て下さい。御待申して居ますよ。そして、菊に付ての知識を、互に語り合ひませうね。ほんとーですよ、左樣なら。

○都の友の許に

宮城縣志田郡敷玉村　桂島登美子

其の後は打絶え御無沙汰のみ致し居り候に、隙行く駒の淀みなくて、何時の間にかは、秋も深う相成り、千草の虫の音も絶えて犬の遠吠かすかに枕邊にかよひ候等、實にもさみしき時になり候を、御許の君には如何すごさせ給ひてん。定し奥深き文の林をたづね給はんと、御羨しう存じ上げ候。さるを、こなたは秋の田舍のとて、毎時〳〵いそがはしく、文など手にせんはおろか、用達さへ仲々に覺束なく候へど、たゞをかしくもあはれなるは、庭の黄菊の、見る人なきに、凛として動きなき操を、わづかに其芳香にもらし居るにて候。あはれ、汝も都に住家求めなば、やさしき姫君の文机か、はた貴き殿の床間にかざされて、今の憂き目は、他所吹く風のそれならんに、そをすてゝ、此の草深き賤が庭に吹き匂ひ、不運になき居る吾身を、朝に夕になぐさめ呉候、其の心根の程、優にやさしく、かくてこそ菊の菊たる所以を感じ入り候。さ候へば、ひとり田舍に殘され候賤の女の彼の涙も、よう〳〵うすらぎ、今はたゞこん春の試驗を、夢に現に待ち居るのみに候。あはれ、都の君よ、田舍の晩秋かくの如く至りて、さみしく候ふを。

○新年故郷の姉に送る文

名古屋市西魚町　戸田敏子

あらたまりぬる年の始めの御ことぶき、めだたく申し納めまゐらせ候。

世の中は戰爭の話にて、こゝも、かしこも、いと騷しく候。加へて、此戰爭のために、不景氣のからき風は、吹すさび申候て、何處も淋しく、極めて悲慘なることばかり耳にし、眼に見るものは、みなかなしきありさまのうちに、此目出度新年を迎ふるこそ、いとおかし

く候。思ひまはせば、去にして新年は、あたたかき父母のお膝下にて、あまきお雑煮など味ひ申し、歌加留多の遊びに、姉上様のお手に赤線の引けしとかにて、いとゞ叱かられなどしつゝ、極しみ申しつるに、今日は旅の空に、さみしき新年をむかふる事に候。
御存じの通り、妾の他郷の空に、齢を重ぬるは、今年が初めてにて、其さみしさも、一しほに候。昨は斯うもせし彼れもせしなど思ひ出され、今はなんとなくものたらぬ心地せられ、そゞろふるさとの偲ばれ申すことに候。まづは、御ことほきまで、あら〳〵。

○師のもとに送る文

水戸高等女學校　萩谷ちよ

四方の山々、にしき着て、美しき暮秋のころを、慕はしき師の君には、いかに遊され候ふや、伺ひあげ候ふ。御地河原子は、眺めきよき處に御座候へば、定めて御心なぐさめのよすがとも相成るべく候はん。妾はあしわけ舟のそれならねど、色々さはり多くて、今までなほざりに過し候ふ段、幾重にも御わび申しあげ候ふ。
さてとや、師の君には御やまひの故とは申しながら、きのふけふ御退職あらむとは、つゆ思はざりしよ、あはれ悲しくもいたましく候ふて。
妾がかく愚かなるものゝ、普通の文字を解し、拙なくも文をつゞるに至りしは、師の御恩にあらずして、はたたれの賜とやいはむ。
あはれ、かく厚き御めぐみを受けし師の君と、御わかれ申し候はねばならぬ、身となりし妾のこゝろ、御推察下されたく候ふ。
さはさりながら、逢ふものゝ必ず別るゝは、浮世の常とぞ承り候へば、今は思ふまじ、今は悲しまじ。たゞ師の君の御よはひ永からむことを、蔭ながらいのり居り申し候ふ。
時下向寒の節に御座候へば、精々御保養なさるべく、偏に御ねがひ申し候ふ。かしこ。

○北總より文壇に（第一信）

總州我孫子第二尋常小學校　中村由より

紅葉の秋去りたれど、心の秋今猶盡きざる妾は、桐の一葉に相みとめ候。秋はとかくもの淒く憂ひ多き時に御座候。扨、妾の父は、去年の花の頃、風荒き滿洲の地に參り、今は旅順口にありて日々策畧をめぐらし居る由に候。實に長き年月の中には、さま〳〵なることあるとかや。ある時は刀折れ、ある時は彈丸盡き、やがてをかしきこともある由に候。又ある者は敵彈に手を折られ、ある者は衣をさかれ、ある者は傷をうけて、淋しく立てるに、秋風の音を立てゝ吹き來るさま、實に哀れなる由に候。實に戰爭とはおそしろきものに候。
妾は慈愛深き父に別れ、み情け深きみ母とも袖を分ち、

今他郷の學びの庭に、蕾の子等と手を取りつゝ、日を送り居り候。故郷は唯み母と一人の子供のみに候。故に、妾の家族は、三ヶ所に分れたるに候。常に思ふ、三人共に逢ひて樂しむことありや否やと。そを思へば、實に悲しく相成申候。妾が家族の境遇お察し下され度候。實にわれ〳〵の身を露命と云ふも宜なるべく候。とにかく心の春は未だ遠かるべく存じ候。先は筆のまに〳〵かきつらね候間、御一讀下されたく、あら〳〵かしこ。

(完)

○戰地の兄に送る文

千葉縣千代田高等小學校三年生 小川武子

今朝は思ひもよらぬ軒端の梅の、時をえがほに咲きそめぬれど、野べはなほ袖寒く候へば、嘸や滿韓の地は餘寒一としほ甚しくと思ひやられ候。扨て、兄上樣には、銃を枕に草のしとねの野營の夢、如何におはしまし候か。定めし健かに劒とらるゝならんと、蔭ながら賀し奉り候。降つて、妾始め父上母上弟吉郎なども、障りなくよはひ相加へ、殊に吉郎などは、去歲とかはり候て、いとおとなしく相成り候間、他事ながら御安慮下され度候。兩親の奉養は、妾及ばずながらかよわき腕を勵ますべく候へば、家鄉の事には、寸毫も焦心遊ばさず。何卒御身を犧牲に供せられし兄上樣には、死を鴻毛の輕きに比し、義を泰山の重きに置かれ、『憂きことの猶ほこの上に積れかし限りある身の力ためさん』と言ふことを膽に銘じて、御奮戰遊ばされ、芳名を史上に垂れられんこと、妾の切望に堪へず候、餘は後便を期して、細々申し上べく候。あら〳〵かしこ。

○雨の日に友へ

敦賀かえて子

さても心地わろき雨に候はずや。

さち深き園のほとりにゐますきみ、いかに無聊を慰めたまひつるか。

テニス、ピアノもあきたまひて、スケッチに、あるは新躰詩に、さぞやおもしろの日々をすごさせ給ひつるならむに……。

あゝ想へば、げに世は夢の如く、まぼろしの如く候ふかな……。あはれ、もだへつるわれ、尊き泪かし給はらずや。

○負傷兵を慰むる文

越後卷高等學校內 千代子

美しかりし四方山の紅葉も、いつしか根にかへり、枯れし梢になく鳥の聲さへ、そゞろ身にしむ初冬の頃と相成候折柄、あなた樣の御便りの今に聞えざれば、いとゞ心許なく、朝夕に御うわさ致し居候ひしに、計らずも田町姉樣より、たしかなる御話承り、一時は夢かとばかり驚入り申候へ共、お命までには及ばざる由、まづは嬉しく、又も御顏を拜し戰語りを聞かんと、そ

なたの空を打ちながめ候。御文によれば、次第に戰地に深入なされ、去る日沙河激戰に加はられ、猛烈なる突貫最中、遂に左腎部に名譽なる御重傷遊れ候由。其當時の有樣、實に思やられ申候。北越健兒の面目、之れに過ぎたるは御座なく候。目下菖蒲城の衛戊病院にて御治療中との御事遠からず御平癒遊すべくと存じ候へば、精々御大切になし下され度く、かげながら祈り居申候。取あへず御見舞に參るべき處なれ共、少女の身なれば思にまかせず、せめての御心慰みにと存じ、手製の草花御目にかけ申候へば、御笑覽下されたく候。まだ〳〵申上げ度き事は、たくさん有之候へ共、何れ後れし雁の便りと、先づは取急ぎ御伺ひまで。

○友より寫眞送られたるに返す文

伊豫國今治町　大塚寺歌子

日毎御目にかゝりても猶あかずのみ思はれしを、斯く遠ざかり參らせての朝夕、いとし御なつかしさやる方なく候て、此頃はいかにすごさせ給ふや、面かはりやし給ひけんなど、一日の中には二度も三度も申いてゝは、皆に笑はれる程に候。折から、最近の御撮影なりとて、一葉御送り下され、取る手おそしとうちひらき、拜し參らせ候。まことに昔のまゝの御姿、なつかしく、思はず文子樣と我を忘れて呼び參らせたる程に候。横から見、縱から眺め、見ても〳〵もかぎりなくいひ知らぬなつかしさを覺えられ候。かねて御對にしつらひし彼の寫眞ばさみに入れ、机の上にかざりつけ、ふりむきては、獨りほゝゑみ居り候。就いては、私のも早速御送り申すべきに、天長節にうつしゝもの、寫眞屋大變こみ居候よしにて、今に出來上らず候まゝ、出來しだひに御送り申すべく候。先つは御禮までに。あなかしこ。

○田舍だより

肥前國香春　笹波露子

文の園の姉樣方よ、妾は拙き筆もて田舍だより申候。薔薇月は今や紅葉月となり候て、田舍の眺めも、こよなく美しく候。物言へば脣寒し秋の風と芭蕉人の歌はれし如く、朝な夕な音づる風も、いと淋しく心地せられ、山も野も紅の色を流し候。野邊の草々には、紫の菫桔梗花すすき女郎花藤袴などの七草も、自惚れがほに咲きそひ、昨日も今日もつきぬ眺めに、日の暮るゝ毎に名殘りをしく候。まして、蟲の聲々も聞きなされきりぎりすくつわ蟲鈴蟲などの音、一入思ふこと悲しく、袖しぼる夜も有之候。
何しろ三里の山奧に候へば、紅葉に明けて紅葉に暮るると云ひたき程に候。先はあら〳〵ながら、細き事は又申述ぶべく候、かしく。

○親しき友におくる文

千葉松尾町　平川遊幾子

おなつかしき御玉章、うれしう拜しまゐらせ候。さてとや、承れば、このたび夫の君には、某師團の中隊長として、戰地に渡り給ふ由、御出發は明後日とや。豫てより身を軍籍に置き給ふ君の、御出征は御覺悟の上とは推し候へ共、斯く急の御事とは思ひもかけず候ひき。さぞや御許樣には、御驚き遊ばしし御事と御察し申上候。日限もつまり居り候とて、かれこれと御出發の御用意に、御忙しうも渡らせられ候はむ。
人の世の別れと云へば、かりそめの旅立ちさへも悲しきを、ましてや行き玉ふ先きは、砲煙彈雨のその中とて、御許樣のみ心の內、悲しく候も、さる事ながら、申さば、このたびの夫の君の御出發は、これ御出世の首途。さるを若しも御許樣にして、世の常の婦女子の如く、お別れを惜み玉ふ樣の事あらば、それはいたづらに、後顧の憂ひを殘し參らするもの。申すもをこなれど、この上は日夜に夫の君の、御無事を祈り給ひ、勇ましき勳功を顯し玉ひ、やがて御凱旋の日、名譽の勳章を胸に、輝し玉ふを御待ち成さるべく候。先はとりいそぎ御手紙の御返しまで、夫の君へも宜しくとこそ、あなかしこ。

○友の許へ女子文壇新設を知らする文

韓國平壤　野口辰子

一筆申上まゐらせ候。御許樣には最早御承知の御事とは存じ上げまゐらせ候へども、此度女子文壇新設致され、愈々明くる春を待ち、早々より御發刊に相成る由聞き及び申し候ふ。
是れ迄は女子の文學は、數々候ひしものの、文壇としては適當のものも見當り申さざりしを、折柄幸ひに善き文の友かと存ぜられ候まゝ、早速申し込み致し置き候ふ。御許樣は、常々より文歌に御熱心の結果、御上達には候へど、今より一層御勉勵あらせられて、ます〳〵御芳名を擧げられ候うては、如何に御座候哉。御勸め上げまゐらせ候ふ。
殊に第一回の發刊には、目醒しき好文歌も現はるるならむと豫想し、今より樂しみにて候ふ。尙色々の投書を募集致され居り候ふ故、御投書の御參考にもなり申さばやと、其日限や種目及び發行所代價等は、別紙にしたゝめ添へ置き申し候ふ。
先づは亂筆にて、御知せ旁々、御勸めまで、あら〳〵かしく。

○歌留多會に招く文

石見すみれ

まつて居ましたお正月も、きましたので、けさほどから、おつかさんと、姉さんに、お手傳して貰つて、それは〳〵奇麗に、御飾も出來ましたの、此間、東京の伯母さんから頂いた、歌かるたもありますし、まだまだ外に、雙六や羽子やいろんなのがあります。今晩皆て歌留多を取るつて騒で居りますの。あの花子さんもいらしやるんですから、いらつしやいよ、ねきつとよ。



塩井雨江先生選

天

案山子

福島縣耶麻郡奥川村　杉原孝子

私は田圃の間に生れ、風にふかれて立つて居りますが、身躰の構造は至て簡單なもので、全身藁にて、組織せられてありまして、身躰には簑を着け、頭には笠を戴いて居るばかりで、外に身を守るものはありませぬが、元來身躰が壯健で、且、忍耐の强いものでありますから、雨の夕も風の朝も、怠つたことはなく、自分の職務に精を出して居ります。

私の職務は、極く單純な事で、田圃の間に居て、鳥や獸の、農夫の汗を流して働いて作つた作物に害をなすものを防ぐ役目でありますれば、日々頼まれて、作物の番をして居ります。されば、一名を「鳥おどし」とも云はれます。それで、自分の職務を果すには、たゞ田圃の間に立つて居つたばかりでは、甘くありませぬから、弓矢を持ち、勇を鼓舞して、弓を滿月の如くに引きしぼり、今しも、放たんとして居る樣子をして居りますけれど、私は鳥獸を射るための役でありませぬから、よく自分の職務の本分を守り、何時も仁と云ふ事を忘れませぬで、一度も鳥獸を傷けたことはありませぬ。個樣に私は思慮して、自分の職業を勉めて居るにもかゝはらず、世の人々は、

智慧一つ足らでおかしき案山子かな

など云うて笑つて居りますが、誠に淺はかな考へだと思つて居ります。

總て、生物は進化する傾向あるものであれば、私等も個樣になるまでは、長き年月を費したのであります。それで、私等の先祖の此世の中に出て、人のためになつたのは、遠い昔の事であります。其原因を聞きますに、古三皇の世には、人が死んでも、まだ、棺槨殯葬など行はれませぬで、ただ白茅に包みて、野中に置いたさうです。そうであれば、これを鳥や獸が來て食ひ

ます。其時、或孝子は、これを見るに忍びないで、彈を作て、これを守らせたと云ふことを聞きました。その彈と云ふものが、私等の先祖であるそうです。さうであるから、「そぼつ」とか、「そぼと」とか言はれた時代もあれば、「とりおどし」と呼ばれた時代もありましたさうです。

吾々は斯く遠い昔から先祖の職業をうけ繼いで來て、如何なる日も怠らないで、働き、農夫のために力をつくして居りますから、春の初めより、秋の初めの頃までは、大層可愛がつて、呉れますが、秋の末頃になりますれば、私等は追々入用がなくなりますから、誰も可愛がつて呉れる人はなくなつてしまひます。實に世の中の人は、薄情なものだと思つて居ります。個樣な始末でありますから、彼の玄賓僧が

　山田守るそほつか身こそ哀れなれ
　　秋果てぬれば訪ふ人もなし

と詠せられたのも、無理ではあるまいと思つて居ります。　（終）

（雨評）雖に變はりたる面白きところはなけれど、其の順乎としてすなほなる、文もまた、案山子の、命せられたるまゝ、雨風に立ちて動かざるが如し。

地

家庭日記

札幌區北一西七の一、　小山かく子

▲一日、曇り。青柳女史に送るべき手紙に、午前半日を費やす。午後、玉井姉來訪ふ、詩を論ず、大した氣焰也。輕川より姉上歸る、萎れし紅葉一枝を手にして。晩食後は、姉上の輕川談にて持ちきる。紅葉のお土産が大笑ひの種子。

▲二日、晴。小樽の妹より、端書來たる明日出京すべし云々。新進行曲の演奏練習に、二時間近くを、オルガンの前に費す。夜に至り、明日の天長節奉祝會と共に、妹の歡迎を兼ね、園遊會を催すべしとは、母上の發議なり。一同賛成、委員二名の抽籤に、兄上と、同居の山田氏との當撰。姉上クスと笑はる。

▲三日、晴。各戸風になびく旭旗、美事なり。午前十一時、妹着。園遊會、豫定の如く正午開會。薩摩汁、鳥飯、フライ、の御馳走、咖啡（コーヒー）だけは味甚だ可なり。芋汁の豚は皮のまゝにて、しかも、毛の付きたるあり。

母上顔をしかめ玉ふ。福引あり、喝采。トランプ、室内テニス、何れも面白かりき。午前一時頃、一同草臥て眠る。明朝一番遲く起きたる人は、菓子卅錢を買ふ約束なり。

（雨評）多少才氣の見ゆるものあり。

人

冬の朝

千葉松尾町　平川遊幾子

今朝はいつにもまして、寒さのはげしき事よと思ひつつ、起き出てゝ見れば、地面は眞白く雪かと見まがうばかり霜の降りぬ。あゝ美しの朝霜よ、妾はいたく霜をめづるなり。その消ゆるのいさぎよき、又何物かたぐふべき、

うつくしの朝景色眺めて立てば、彼方より手拭頰冠りして、手桶さげて、霜柱踏みくだきつゝ來る人あり。近寄れば角の六藏爺が、我が家の脊戸に、水汲みに來れるなりけり。「お早う御座います」、と妾に一禮して行きぬ。あゝ爺よ、寒むからむ。若き身にも寒さの肌に泌むやう覺ゆる此の朝を。水仕の業の、いかに老の身に泌むらむ。妻なく、子なき不幸の身、あゝあはれの爺よ。板戸洩る夜風に夢破れし夜半、いかに心細う思ふらむ。この里に住みてより十餘年の長の月日を、淋しう獨り暮らすとか。

かく果敢なごとなど思ひ居れば、いつしか皆々起き出てぬとおぼしく、家の內は賑はしうなりぬ。臺所の方に、あれ初氷よと、妹の呼ぶ聲聞ゆ。あゝ、今朝は寒さもはげしきに、氷も張りけるかと思ふ內、妹は手に氷のかけを持ちて、姉さんこれ氷よと自慢げに見するもをかし。それ食ひて腹痛め給ふな、學校を休むやうな事ありてはならずなど、說き聞かすれば、あゝさうねーと、庭を目がけて投げ捨てぬ。されど惜しきにや見守るもあはれなり。

折りからニヤア〱と、小猫の側に寄り來るは、今朝は又一入寒さのはげしければ、人の膝の上懷しきにやあらむ。妹はいそぎ抱き上げぬ。妾は勝手元に至り、火を持ち來り、火鉢に入れ、冷たき手を暖めつゝ、今日の學課の下調べにかゝれば、妹も同じく書物持ち來りて、知らぬ場所など、問ひたゞすなり。

兎角する間に、朝餉の膳は運ばれ、一家一間に集ひて、食事は始まりぬ。あゝ樂しきは家庭の團欒よ。食事終れば、妹は早や書物を包みて、學校に行く仕度しつゝあり、折りから門邊に愛らしき呼び聲の聞ゆるは、同じ學びの友の、妹を誘ふなりけり。軈て打連れて出で行きぬ。

妾も、そこら片付け終りて、早う師の許に物すべきか。

（兩評）多少の情あり、景あり。

秀逸

秋のそゞろあるき

熊本縣八代高等女學校第三學年　弓削えい子

秋も漸々深けて、庭の小萩ふく風の音、時雨に通ひて、浦淋う覺ゆるに、唯たれこめて物の本のみ繙かんよりは、いて今日の日曜、近わたりに秋の野末を訪ひて、をかしう囀づる百鳥の聲きゝ、扨は千草の花に、木々の紅葉など見ましなばいかに心ゆかるゝならめと、頓の事なれば、伴ふ者もあらで、家を出でぬ。

空はうらうら、晴れ渡りて、さながら藍を塗たらん如く、麗しさいはんかたなし。何處を指してと言ふにあらねば、唯そゞろ〳〵と打歩む。何時しか町はづれを過ぎて、堤に掛りぬ。松の梢もまつはれる蔦の葉の紅葉したるが、緑の葉の絶間より、見え隱れしたる樣、いとゆかしくて繪にも書かまほしうこそ。

松並木を過れば、先見ゆる川向ひの一つ家、木立の間よりほの見えたるいとをかし。路のかたへに芝生の岡邊、そがたもとを流るゝいさゝ川、里のうなひの群れ居て、よねんなく漁る年長の男の子、稚兒負ひたるが、銅鑼聲して歌ふ鄙唄さへをかしく、聞く人の心からにや、長閑に生延ぶる心地ぞする。此わたりの家を見るに、多くは柱すゝけ、軒傾き、壁おちたる物にて、家の内そゞろに思ひやられて哀れなりや。

見渡しの千町田には、稲の穗波面白く、吹く風にさやさやとかたみにすれ違ふ、年の豊けさも知らるゝ賤の男、賤の女、老いたる若き打ち揃ひ、稲刈もあれば運ぶもあり、いと忙はしげに苦しさも思ひやられてなん。されど、一莖九稲の實りあるを見んには、苦しさも何も打忘れ、何心なくのゝじり合ひつゝ、世の秋と言ふさへ知らざらん樣にて、我乍ら心ゆかし。

このあたり吹く此頃の風に、哀に咲く女郎花、人招く

と見ゆる花薄、扨は名も知らぬ千草、八千草の咲き亂れたる中にも、ま萩の乙紫に匂へるこそ、いと目出度けれ。草間にすだく虫の聲々、心細く聞ゆ。めづれど盡じと思ふ程に　秋の日あしの暮れ易く、夕日影、野寺の松の梢におちて、夕雀竹藪に群れ噪ぐ樣、何にか例てん、似よりたる物もなし。

　立ち返り又も來て見ん夕景色
　　伏見の里ぞ見まくほしけれ

折しも響く入相の鐘に驚かされ、名殘を惜みて、もときし路に向ひぬ。ふとあとを見れば、月影木の間にさし出でて、いとさやかなるは夜をも見よとてか、日毎に學びやにいそしむ身は、暇ある毎にかゝる遊びをなさば、物の哀をも知り、齢をのぶるよすがともなりなんか。

（評）文は整ひたり。

○將來の婦女

千葉縣夷隅郡占澤村　鵜澤水月

性剛直にして智あり、擧動輕捷にして敏なる者豈に獨り男子のみならんや。性質柔和にして愚、且つ事を執る緩慢にして暗なる者、豈に獨り婦女子のみならんや。又男子必しも尊く、婦女子必しも賤しきの理あらんや。然るに我國現時の狀態は、男女の間隙甚しく懸隔を生じ、男子は驅馬に鞭ち、輕裘を被り、揚々として自由に社會に奔走し、忌む所、憚る所なきも、婦女子に至りては、常に男子の壓制を受け、悄然として一生の愉樂を失し、怏々として年霜を經過する者の如し、加之、男子には奴隷の如くに取扱はれ、其進退意の如くならず、懼々恂々として家政を整理し、只悲哀的の活劇を演じ、其身を狹隘苦痛の境界に沈淪せり。嗚呼婦女子の權利は、斯くの如く範圍狹隘にして、男子權利の範圍は斯くの如く洪大なり、之をして正當なる男女の間隙と謂ふべき乎、夫れ天賦自然の權に、男女決して異なるの理あらんや。天禀固有の勢に、陰陽決して同じからざるの道あらんや。然り而して、男尊女卑の弊、今日の如きは、實に其極度に達したる者にして、婦女子の不幸、否國家の不幸、焉より大なるはなし。既に男女の間隙斯の如き不權衡の生ぜし其源因に至りては、一にして足らずと雖も、從來の勢ひ已むを得ず、遂に此弊果を生ぜしめしならん。今や、社會は政治にまれ、宗敎にまれ、工藝にまれ、進歩の狀況を呈せざるなく、亦進化の實を表はさゞるなし、此時に當り、我國古來の弊風は、將に地を拂て去らんとす。婦女子社會の狀況の如きも、女權擴張の論、朝野に洽く起り、漸次改良の端緒を開くに至れり、嗚呼何たる愉快ぞや。是に於てか、妾は大呼して、幾多同胞婦女子諸君に計る所あり、何ぞや、婦女子諸君にして、此

固陋なる弊習を洗除し、男子と同權の地位を占め、將來の國家に益する所あらんとせば、宜く處世の要を知り、貞操の道を知り、社會の新舞臺に顯はれ、婦女子本務の活劇を完演せられん事を。

○女子文壇の發兌を悦び

下總國印旛郡富里村根木名　小高せい女

文の道ひらけ、女子が積むとしの不幸も解け、行く先きのいばらも苅られむとす。たか木はみどりをそめ、同胞姉妹の幽谷より移るをまつの麗はしき氣候とはなれり。いかに悦ばしからずや。こたび東なる京の女子文壇社の愛兄の君だちが、女生のために開かれたるおほむつびの集ひにあづかる事の、いと嬉しくなむ。また君たちが御心をつくしたまひ、愛國の厚きをいとゞ悦ぶのあまり、吾が拙きをもかへり見ず、思ひを述べてよろこびを、

　しき島の大和ごゝろの櫻ばな
　　咲き匂ふべき時はきにけり
　山かけにすむ鶯も春くれば
　　たかき梢に鳴きそむるなり

○はつどしのけさ

長野市田町二九　飯塚きせ子

はなやかなるはつどりのこゑに、ほのぼのとあけそむるはつどしのけさの、のどかさ。ひさかたの遠きみそらにきらめけるこぞの明星のかげも、いつしかきえうせて、淸きあさかぜにはゞたきいさましく、ひとむれの小雀のたのしき歌うたひつゝ、おのがじゝひんがしのかたへととびゆく。紫紅したるあやくものたなびくあたり、こがねの色したるは、つゆの光、あきらけき御代の姿とも思はれていとたふとし。のぼりゆくまゝに、いづかたも希望のひかりにみちわたり、きのふにかはるけさのながめ、老もわかきもうちつれだちて、ゑがほかたむけ、とそくみかはせる、げに世にえがたきむつみのむしろ、いつもかくありたしと思はる。まして、ことしは世にためしなきかちいくさむかへたるけふ、戰地のいくさびとの心いかにぞ。かゝる祝ふべく賀すべき此のはつどしに、うまれいでたる女子文壇のゆくすゑもたのもしく、とりどりにうれしきは、明治三十八年のはつどしにこそ。

○小　女

下總國印旛郡富里村根木名　小高淸子

小女、實に小女ほど、罪のない可愛らしいものはない。天使として神の子として、詩人の歌にも、やかましく云ふてはないか。ほんに無邪氣な小女のほゝ笑むを見ては、誰れか愛慕の情を起さぬものがあらう。

かの可愛いらしい手籠さげて、春ならば菫、蒲英公、土筆やさしい白い赤い蝶々がとんでゆくのを追つたり、靜かな神々しい流れのある川で、筏舟うかせて餘

念もなく遊ぶのを見ては、たとひ親身の血をわけた中でなくても、言ひしらぬ、愛戀の情に打たるゝてあろう。

靜やかに吹く、凉しい風の柳の下で、青いあたらしい苔に寢ころんで、小鳥のやうなやさしい聲で、唱歌をやつたり、あちらこちら驅けまはつて、疲れた後は、うと／＼眠つて居るのを眺めると、きつと神さまのみ子で、天の福音をつたへやうと、來降まし／＼たのではないかと、疑はざるを得ないのである。

實にや、昔より、無邪氣な可愛らしい小女を見て、そゞろに神の化身かとまで、詩人のさわぐのも理りである。男の子よりも、動作がしとやかで、性質がすなほだから、尊ばれて可愛がらるゝのだ。二つ三つのまだ頑是ない兒は、男でも實に、可愛らしい。天使としてけだかいが、やがて獨りで歩行いたりするやうになると、ぢきに亂暴をやるから、しまひには、やさしかりしけたかゝりし面影がなくなつて來るのだ。女の兒はさうでない。うまれつきからおとなしくて、しとやかであるから、なか／＼、其性質が變らんので、天使の性質がある。あゝ尊い小女よ、崇高い小女よ。我れは永久に、其無邪氣で可愛らしくあれと希ふので。若しすこしても、おかしないやらしい浮世の風に觸るゝと駄目だ。もうさきの日のやさしかりし、天眞爛熳な風情がなくなつてしまう。そうして、あだめいて、おつくりをして、もう／＼神々しかつた面影が、なくなるのである。

あゝ、罪なことてはないか。浮世の風は、かうも人の兒を、厭なところへ陷れてしまうだらうかと、思ふと、我は限りない感慨に沈むのである。多くの女の兒が、しまひまであゝやつて無邪氣で、可愛らしかつたら、どうであらう、誠にけだかい尊いことではないか。神のみ子としても、我はぬかづくのであるが。しかし、この天眞爛熳、無邪氣で花のやうな時代といふものは、極く僅かで、ぢきにせち辛い浮世のあら浪に漂はされて流れゆきては、もうむかしの面影も、認められぬといふやうになるのが、實に悲しいことである。

あゝ、やさしの小女よ、我れはそゞろに、今の無邪氣な可愛らしい心が、始終保たしめたいのである。

あゝ浮世の風は、如何にしても、かれを邪しまなる、惜くべき、魔道におびきさるであろうか。ましろい、雪のやうな心を、墨のやうに汚してしまふてあろうか。實になげかはしい、いたましいことてはないか。悵然としてそゞろに、世のつれなきに泣き倒れんとした。獨り水聲は長へに淸く、雪影は心なく飛ぶのである。

○惜歲暮

神戸市榮町五丁目　中村きみ

今年も殘り少なになりぬ。

春の花秋の紅葉にあくがれ興ぜしも、昨日のこと思ひ

つれど、あすか川の流れは、やむ瀬なく、心のかぎり惜めども、甲斐なし。

いわけなきをりは、幾夜ねば一月と指をりかぞへつゝ、よろこびしも、今は過ぎし昔なりけり、

ちまたには、門毎に、しめなは結び、松かざりなどして、こん年を迎ふるにいそがはしく、其程につけて、物とりかはしなどして、賑はゝし。

物學びに都にいでし若うどたちは、歸省するにや、行李かつぎ、鞄かたてに、あるは自ら車にのりて走りあふ様、うれしげなり。

われは一人淋しく机により、己が一年の中になしたることを顧れば、いと〳〵はらだゝしき事のみなり、今年こそは學びはてんとて、はげみし文も、半を少し過すのみ。今年こそは父母の御心を慰めまつらんと思へど、またならず。いつの世にあるらむと、いと〳〵おぼつかなくもかなし。

あゝこん年こそはつとめはげまばやと思ふ折しも、日あたりよき南向のまどより美はしき聲して、

病みませる母をみとりてあちきなく
　今年も逐にくれんとすらん

あゝ何所の人なるぞ、かくの如き歌を詠ぜし心は、……
……われ幸にも病める人なく、たらちねはいと健かにましませど、たゞわが學の術のならざるを、

年老いしわがたらちねはまちませど
　學はならず年くれんとす

○新　年

周防國山口御堀川向　堀　龍子

自轉なしつゝ回轉に暇無かりし地球の、爰に目出度う、三百六十餘回を了りて、今日うらゝかなる初日の御影ほのぼのと明け初むる空高く、朝日の御旗の風になびくも先づ嬉し。早くも若水汲むにやあらん、車井戸の音さはやかに、賤が門べの松竹も、瑞雲靉靆として、千鶴萬龜の齡をこめ、軒に引き渡せる「しめなは」おごそかに「ゆづりは」などの春風にゆらぎて、宛ら心なき草木も、御代を祝ひて笑ひさゞめくにも似て、果ては、雀の千代千代と囀るうれしさ。昨日迄は鬼と云はれし人も、今日よりは、ゆたかにほゝ笑むおももちありて、かたみに年のほぎこと云ひかはすも、樂しや。やがてまどかなる團居に、例の屠蘇雜煮も、今年は一際目出度う祝ひつる様よ。世の常ならず嬉しうなむ。つくろはぬさまに、母君の活け給へる白梅の香は、室内に匂ひ溢れたるに、そと障子押開けば、さつと吹き入る初風いとも心地よく、涼げたる聲はりあげて、千代〳〵と唱ふものあるに、ふり向けば、あら！愛らしや、一羽の小雀、床の活花を木傳ひて、聲を惜まずいや高々と囀るなり。皆々目出度など云ひ罵るよ。間もなう、愛らしき少女の二人三人、妹誘ひて學び屋の式にと行きぬ「君が代」の餘韻殘して、玄關の盆は時の間に名刺、美しき繪葉書、扨は、年玉などうづ高く盛られぬ、程なく妹も歸りぬれど、早や羽子もて騒ぐ「風

が吹くからいけないワ」と云ふは、正しく妹の聲「風よ吹け〳〵紙鳶あがれ」と、はるかに聞ゆるは、近きあたりの童の口ずさみならん。

短き日は早や暮れたれど、人の通りはいよ〳〵多く、千鳥足おぼつかなげに、往來をねり行くも、をかしや。明かるき燈火のもと、加留多會は開かれぬ。我源氏、妹平氏、我が友は我れに、妹の友は妹に、加留多に妙を得給へる從姉の君は、讀み番にと定りぬ。父君も來給ひて、妹に力を添へ給へば、母上は我が側にて、ほゝ笑み給ふ。今日の勝利は源氏よと云へば、いかで源氏に劣を取るべき、平氏の赤き心に敵はなしと力む：：…。やがて、あないとほし、あたらむざむ、たんせいてらし給ひし敦盛の君の紅頰、誇りげもなき、「口髮」りゝしくゑどられたるに、敵も味方もどつとあげたるときの聲、室内にひゞきて、賑しさ云はん方なし、流石の直實泣くにはあらで、涙を流して打笑へば、今しも夜更くる月影の笑ましげに見下しぬ。

○新　年

常陸土浦町　[illegible]人

年月のうれひも、きのふにつきし心地のせらるゝは、げに新玉の年のはじめぞかし。兄さま〳〵と妹のよぶこゑに、目さめて起きいづれば、わらびの如き手には早も羽子板もてり。とよさかのぼる旭もいとうらゝかにて、軒端のあたり千代〳〵とさへづる雀の聲も、けさは何となうのどかにきこゆるなり。賤が家のしるしばかりの門松も、みどり一入ふかく、國旗はひら〳〵と風になびきて、何くの果か我が君が代を祝はざるべき。二人、三人、あるは五人六人、うれしげにはた樂しげに、さま〳〵のことと語りあひつゝ行く、小學生徒の愛らしさよ、いづれ學びやにてめでたき今日を祝はふなるべし。新聞くばる男の、腰なる鈴の何となう勇ましくきこゆるは、めでたき附錄あるを、しらするためならむ。幕ひきめぐらしたる鎭守の社には、おさなあそびに、おとな交りて笑ひさゞめく、げにもたのしき、今日の日や。弟は樂しげに凧をあげ、妹はうれしげに羽子をつく、げにおもしろの今日の日や。あはれ、けふ一日の心もて、一年ながらすごしてしがな。

町さかるにしたがひ、國旗の數少く、行かふ人は稀なれども、けふを良き日と祝ふ眞心に、などてへだてかあらむ。

夜に入れば家族こぞりて、かるたとり〳〵むつましくあそぶ愉快さよ。夜の更くるも知らずかし。

○旦日の記

越後長岡千手町　杉本しん

年立つ今朝の空を見渡せば、戶每に飾る青松は、欣然として初春を迎へ初日の光うるはしく、東の空を金色に彩りなし、旭日のみ旗は軒端に飜りて、吹く風の音何となく長閑に聞え、老も若きも、男も女も、何れも

喜びの色、面にあふれ、羽子つく乙女の心なき樣見るさへ樂しき今日の日ぞ。家々は齒固の餅、屠蘇、壽を祝するなど、昔のさまは今も猶すめり。夜に入りては、千門、萬戸、何れも業を休みて此日を祝ひ、笑聲歌曲に交りて喧しく、椒酒の匂鼻をついて、飲まざるに醉ふ。今日の旦日、げに人の心の和やかなる時にやあらん、社會の潮流はこぞりて歡樂の巷に向ひて集まらんとはせり、げに樂しき事の限りは、年立ちかへる今日にこそ。

斯くも喜び樂しむ國人の裡にも、猶泪を飮んで悲しく、辛く、此日を過すもの丶多きはかへすぐも哀れなる事にこそ。

わが家に近き杜の木の間の、一つ家の淋しさを誰か知る杖と頼み、柱と頼みし良人は、去年の春、幸か不幸か出征の途につき、殘る妻の母子を養ひ、からくも日毎のたづきを送る程に、何ともか弱き女の手、日に增し傾く家の財產は、今日此頃は其極に達し、饘粥さへも滿足に給せずして、何も知らぬ幼子は、日夜飢になき、寒さになき、積る憂へに責められて、凄き迄靑白くやせし妻の、顏色見るさへいたましき此一家。

嘉祥、都に鄙に滿ち、朝野に籠むる今日の日も、屠蘇の酒一滴も、雜煮の餅一切だにも口にせで、只悲しく、辛く泣きわびて、此一日を過さんとは、噫、世に悲しきこと多かるめれど、斯ほど悲しきことは他にあらんや。わらはの如き浮世を知らぬ者にも、此一家を見る時は、思はず落す涙の幾雫、吁天に在す我等の父よ、願くば、此一家に福音を傳へ給へよ。願くば此一家を導きて、ハセバに入らしめ給へよ。

○初春五趣

敦賀かえで子

初日の出

たれこめし朝霧はらひのけ、山の端のほのぐと紅さしつ、やがてうるはしの初日かげ、かしこの里も、こゝの街も、その神々しきみ惠み浴びぬ。

雜煮もち

ことしは、こひしき兄うへのみいくさにつとめたまひければ、もち祝ふ膳のいとさみしげなり。てもおもしろや、お齡たけ給ひつる祖母うへの、雜煮もちかみきれぬにくるしみ給へるさまの……。

かき初め

とし每のわが家のならひとて、けふ父うへはじめお祖母うへたちの、みそなはし給へるに、持ちなれぬ筆の太さよ、てもはづかしやな、あはれあめつちの神さまと心にいのりつゝ、そと筆おろしぬ。見事なりとて父上打ゑみ給ひつ。

かるた會

とし子さま、たに子さま、たまきさま、つね子さまの四人を招きて、なほお隣りの貞一さまも加はり給ひぬ。われとかね(下女)とを加へて七人。かるた會もよ

うしぬ。源平のくじは、われと貞一さまとつね子さまと三たりと、あとの四人は平家と定まりぬ。はじめわれかちぬ。つぎは平家に勝ちとられしぞ口惜しき。かくしていくたびか捷ちつ勝たれつ、たのしき半日をぞすごしける。

はつゆめ

けふは朝とくふしどはなれぬ。まづお父うへに、年賀申し上ぐれば、なにか打えみたまひつ、初ゆめいかにとのたまひぬ。われはづかしければ、おもて赤らめつ、なにもみまいらせずとて、のがれかへりぬ。

○思ひ出の記（一節）

加賀　みどり

明日は御葬式、今宵十八日の夜、いよ／＼棺に入らせ給ふなり。まづ御沐浴なしまゐらすとて、新しき盥、手桶、柄杓など運ばれぬ。すべて、いつもの翁、かひ／＼しう、水を入れ、湯を入れて加減し、藁床打拂ひて、そと御支へ申しまゐらす、御手足など、なしまゐらすまゝにならせられ、げに、勿體なき事ながら、人形をあつかふよりもやすき御樣なり。白布にて一とわたり洗ひまゐらすれば、儀式とて、身緣のものかはる／＼湯をかけまゐらす、皆々柄杓片手に、涙の袂放しもあへず、吾はせめてもの暖きところをと、かきまわし／＼かけ奉りぬ。終れば、豫て調へつる御召の御衣袈裟、こと／＼く布なり。御珠數も白木の儘、木綿糸の小やかなる房なり。絹の御衣に金絲彫ばめたる御袈裟尊く拜み奉りしを、御袖のかげに、水晶の大房なるが、ひらめき給ひつるを、長しへの御門出とて、質素なる御出立かなと、嫗のこぼす一言に、一座ぞつと袖しぼりぬ。棺の中に端座して、御手合せ給へば、藁をもみてはつめ、もみてはつむ。あはれ、これが御顏の見終めと思へど、つく／＼とは見まゐらする力もなくて、蓋はいつしか釘づけになりぬ。幾重の衣袈裟にまとはれ給ひ、心こめての御備に、紙にて造れる蓮花幾十面、さあれ、かゝる悲惨死物、今更何の御慰になるべきか。

妄想やら、愚痴やら、涙やら、是ではならぬと床をいでぬ。沸きてありといふに、直ぐ樣湯に入り、衣打着換へて、今暫しのお名殘をと、御棺のお側に侍りぬ。追ひ／＼に、人は集ひて夜は明けたり。

彼此十一時、やう／＼内行とて讀經あり。己が焼香さへいつ終へしやら、やがて本葬になりぬ、男衆の焼香は今なり、いざ火葬場へといはれて、衣は皆布の更なるに解換へたれど、鞋はきしむるすべなし、靑竹の杖にてたど／＼しう、足を運ぶといふにもあらず、御櫃の動きたまふまゝ、いつしかに我も動けるならむ。

火葬場にて、また短き御經あり。了れば心をこめし御備も、あゝ暫し、御櫃を眞裸に竈の上、堆高き藁に炭二三俵さしあけ、俵も共に積み上げぬ、あはれ、無慘といはんか、恐ろしといはんか、人の世の心地だにせ

ず。さて、それより麻幹の小束を解き、身緣のもの火を點けて移しまゐらせよと、あまりの事なり、いかて成し得らるべき、二つ三つの頃は、答へ奉るべき言葉も知らず、七八つには、惡戯ざかりの御心配を加ふるばかり、一人にて何も斯も出來る樣になれば、彼地此地飛び廻りて、慰めまつる隙さへなきまでに、御苦勞をかけながら、御逝去とて今更に、いかて／＼手づから火を點け奉るをうべき、如何なる罪の報いなるらん。とはいへ儀式とあれば、これがまた人の道、孝の道、却つて御慰めともなるべしと、漸うの理屈に心を仰へて、震へながらそと附けて、慌て丶手を引けば、藁二筋三筋にて消えぬ。再び點けん心なし、さあれいつまてか燒えてやあらん、烟はむら／＼と頭より渦きか丶るを、躊りつ丶、ひたと冥目して動きだにせず。

突然肩を打たれぬ、眼を開けば、火は御棺にや移りけん、一としほの猛勢なるに、滋げき涙もかれはてにけり。最う日もあひなしと促され、いわけなくも踵を返しぬ。沙地を一帶の松原なり、いとゞしう運びかね、一步進みてはたゆみ、二步ゆきては止る切なさ、今より思ひみるだに、金の鎖に引かる丶よりもつらき心地なりけり。倒れんずるを辛うじて、ふと顧みれば、やう／＼白うなりつる烟が、淡紅の雲に映られつ丶、遠の林をかすめて、いつとはなしに消えゆく。あ丶わが胸、わがこ丶ろ、首も手足もかたうなりぬ。折ふし、いづこよりともなく、颯とよせきし一と風に、惡感ぞつとばかり、胴振ひして倒されたり。

日はおちて、御骨拾ひにといふ。われは臥しゐて、行かざりき。

野おくりの戻りや鬢に秋の風

二三日の後、口へいてぬ。

五尺四寸に餘らせられしお躰が、僅八九寸に足らぬ箱に入れられて歸りましけるに、聲はなくて、ほろり／＼。

今日は大そーな、人てしたね、

いはれて、

左樣てしたかな、

の答、一同までも泣かせたり。後の藪に年月かけて棲ふ梟の、今宵も亦月はうすし、物いふやうなるも哀れなり。

●新玉の年

茨城縣水戶高等女學校　萩谷ちよ

鷄鳴あかつきを告げぬれば、むらさきの雲はやひんがしのそらにたなびきぬ。やがて、四方のけはひやう／＼白めば、とよさか登るあさ日のひかり、いとうら丶かにしてたふとく、軒ばのあたりちよとさへづる雀のこゑも、けさは何となうのどやかに聞ゆなり。しづが家のしるしばかりのかどまつも、みどりのいろひとしほふかく、日のみはたはひら／＼と風にひるがへりて、いつくのはてかわが君のさかえを祝はざるべき。

まして我がみいくさの向ふところ、敵なきがごときめでたき時にあたりて。
三人ふたりいとうれしげにたのしげに、軍のことをかたりつゝゆく、學びの子のあいらしさよ、いづれめでたき今日をまなびのやに祝ふなるべし。折りしも新聞をくばる男の子のすゞの音、何となういさましくきこえくるは、あれはよ我がみ軍のかちを知らするにやあらむ。
とばりひきめぐらしたる耐には、幼なあそびにおとなうち交りて笑ひさゞめく、げにたのしさは新たまのとし。弟はうれしげに凧をあげて堤にたち、妹はやる羽子にあくがれて庭のもによろこび、さらに浮世のうきごとも知らずげに。
あはれ今日のこのうなゐのこゝろもて、一年ながらにすごしてしかな。
町さかるにしたがひ、み旗のかずすくなく、ゆきかふ人はまれなれど、今日をよき日と祝ふまごゝろになどてへたてかあらむ。
夜に入れば家族こぞりて、かるたとりにふくるを知らざるがごとき、あゝいかにたのしみの極めなるよ。

○學　生

高岡市新旅屋門前　石浦節子

稚き子が、毛糸もて編める辨當を、西行振に、脇掛けて、雪の朝など、息氷らしつゝ行くは、尋常小學校の兒童なるべし。筒袖の愛らしさ、懷きてもやらまほし。
小倉の紺の洋服に、半ズボンうがち、靴の音勇ましく、鐵道唱歌とやらん歌ひつれて、竹切れ手にふり〳〵、三々五々歸り來るは、高等小學校の男生徒ならん。女は紫、はた、樺色の袴、長らかにうがちたる床し。話の内に、英語取り交ぜて、都の街を行くは、中學生徒なるべし。時計のひもに、短艇競爭、或は、劍術の全勝紀念章をさげたる雄々しきも見ゆ。十四五より二十計りなる少女、束髮姿に、白き物は見たくもあらぬ面の色、何所となく、生々として物靜かなり、女學校の生徒ならん。互に睦じき話に英語なん、ちりばめたるいと雄しく見ゆ。後は如何なる、實の賢母とならん、と思へば、めでたし。
三十年にもならんばかりの大男、角ある帽子を戴きて、いと落着顏に赤き門を出入るは、大學校の生徒なるべし、いつかは博士の位にも登る人々と思へば、氣品さへ高くも見上げられて、なつかし。

○新年の樂

石見すみれ

限りなき喜びと、限りなき望みと、限りなき惠とを負ひて、初日の光、東の空に匂ひ出でぬる頃、漸く我門邊に至りつきけるに、綠色こき門松、日の光を受けてえもいはずうれしげなる樣に、先つ我がかへりを迎へぬ。急ぎ門をくゞり行くに、取りて六つなる我弟の、

なにやらんたはむれ居たるが、走りよりて、『坊や六つ、おみや』など片言まじりに叫び出づるを、母君の聞きつけ玉ひて出て來り、早くも歸りし事よ、年取の雜煮も、御身を待ちてありしに、疾く〳〵、抔、もてなさるゝ、身に餘りて嬉しとも嬉しく、共に家に入るに、父君をはじめ、三つ上の姉、二つ下の弟、何づれも、とやかくとどよめきつつ、やがて諸共に雜煮の膳に座る。弟は雜煮の文字をたづね、姉は歌留多の遊びを進めつゝ、笑ひ興じてものし終ふる頃、近き邊りの小學校に君が代の唱歌は起りて、いとも長閑に響き渡りぬ。學校に遲れたる恨みは知らず、げにたのしきものは、年の始めの團欒なりけり。など記し終れば庭の梅が枝に鶯のさゝなけるこゑ二聲三聲。

○女子文壇發刊せらるときゝて

福岡大學醫院　中原サキ子

萬象漸く秋たけて、冷露草葉に玉をかざし、冷風長しへに虫聲を送りて、雲なき大空に、並生松の木の間を分け出て澄み昇る月を眺めては、亂れもつれし心緒、順もなく往時をくりかへし、二とせの昔、郷國佐賀市中の小路なる佐賀女學校、今は淋しき人の住家となりつれど、學びし其折の事ども想ひ起されて、今昔の感ぞやるかたなき。同じ窓の友は、はや業を卒へて、其特質の才能を發揮し、或は文學に、或は美術に、或は音樂に、各其嗜好を伸張して、群衆の中に聳立せらるるに、われのみは何故にかく不甲斐なきぞ。また何んたる不幸の身なるにや。われも一度びは赫耀たる功名の花手折らんの希望の旅につきたれど、ひたぶるに急ぎし心は、あだ櫻、夜半の嵐に散りはてゝ、今はかく見るかげもなく、肋骨あらはなる胸を抱て徒に友の勉強を羨み、成功を妬みて、己れ成す事もなく、みだりに絕望の淵に沈んで、煩悶の闇を辿り、只管天の無情を怨みつ。眺むる月は霞わたりて、見るもの聞くもの、一として傷心斷腸の種ならざるはなきに、夢か現か眞か迷か、さて東都の師の君の許よりはなち給ひしかりがねを、遠きみ空に、深夜病の床にきく。『君よ、さばかりの病魔に心志を奪はるゝ勿れ、君が好む文學は、吾が女子文壇に來り學べよ』と。

嗚呼、これぞ宛も暗夜に一點の燈火を得し心地して、僅に見認めし光妙の明は、積年の鬱悶を拂ひて、雲霧を排し、わが心鏡を照しぬ。仰ぎ見れば、美しや、月は幽玄の空高う淸影をかけて、我病窓をさし覗きて、意あるが如く、微笑むが如し。いざやわれも立たん、身は病魔の手にあれど、筆をつゐに、友の後追はんに、何んの難きかある。

松の梢を漏るゝ月の光を浴びつゝ、ベットの上に枯瘦の躰を支へて、拙なき筆をしぶらすれば、夜はいたくふけぬらし、殘んの月影は玄海の面はにかゝりて、世は太古の靜にかへりにしとき、筆を擱て眸を閉づれば、無言に語る過去の響は、我胸の琴線をぞ打顫はす

るなる。

○美しきもの

新潟縣西蒲原郡卷 松永重子

目出度き春を唱へ出つる鶯の歌も、旭に匂ふ櫻の花も、霞に沈む夕日も、月に匂ふ卯の花もうるはしく、夏は菖蒲に、螢、夕風のそよく川べの景色よろしからずや。秋は峰の紅葉も色つきて、夕日にかゞやく、また人の目も枯れて、霜にをごる白菊の花、降り積る雪景色、何れ劣らず美しく、また樂しき眺めながら、最も美しきは人間の生れ出でたる時の心にしかじとなむ覺ゆる。そは多くの言葉を要さじ、それ無我無慮、寶玉のそれよりも尙美しく神なるを、されども、此清淨無垢の人の子をして、其の天然の美を發揚せしめむは、そも誰の責任ぞ、そは產みの母、其の母親ならずや。母親を置きて、他に一人もなし。母親の任、また重しといふべし。胎兒敎育はいざしらず、否不必要とせず、幼時の庭訓、それよろしかるべし。三つ兒の魂百までもとの諺言を味ひみなば、一日たりとも等閑に附すべからざるは、兒童に對して母の注意なり。玩具、衣服、食物、否智情意の完全なる發達を測るも母の任務なり。故に明治時代の婦人たる者は、自ら身を愼み、家を修め、益々兒童の敎育に心を用ゐ、以て寶玉の如き人を世に出し、君の御爲め、國の爲に、其身を捧げしめなば、これにまましたる美しきことは世にあらじ。あゝ美しきこと、美なるは、幼兒を完全に發達せしむるにあり。之を思へば、婦女子の責任大なりといふべし。いでつとめてやあるべき。戰捷國の婦人、いざや、もろとも其任をつくさむ。

○出征兵士を見送りの有樣

鳥取市立高等小學校第二學年 尾崎しづ

十一月二十三日は、步兵第〇〇聯隊第〇回の出征軍を見送る日なので、早朝、れいの小國旗を持つて、菊橋の所へ行つた。まだ早いと思つて居たのに、先生始め皆行義正しく並んで居られた。我は直ちに列の中には入つて見ると、お友達は皆つや〳〵とした髮を美くしく結び、リボンをかけ、手に〳〵日の丸の旗を持つて居られる樣は、誠に奇麗である、やがて喇叭の音が聞へ出したので、一同列を正して、待ち受けて居ると、いよ〳〵喇叭の聲が近くなつて、靴の音さへ聞へだした、間もなく四百有餘の國家の干城は、足なみ正しく、我等の前を進んで行くので、我は聲を張り上げ、旗をふりかざして、萬歲を連呼した。肩にになへる銃や、日にきらめく劍の光には、如何なる敵をも打ち破るやう、兵士の顔はさも勇ましく見へたので、我は大に嬉しく、又強くあつた。後、我が家に學校の書物を取りに歸つたが、我の耳には、まだ萬歲の聲が殘つて居た。

○初雪の我庭

京都府與謝郡府中村　靜秋

天長節のあくる朝「めざまし」のよぶに驚ろき起きて戸を排すれば、何事ぞ皚々眼を射て面を向くべくもあらず、熟視すれば初雪なり。初雪は我庭前の年經し梅、色深くかたちよき松、しだれし柳等の枝に積り、匂ふが如くきらきらと輝く樣は、朝日に匂ふ山櫻にもまさりて美しく飾りぬ。そが上に鳴き居るは雀なり、さも治る大御代を祝ふが如くさへずり、余の常に愛する犬は、初雪を珍らしく思ひ走り廻るなり。我も急ぎて火を起す、茶煮る、火鉢を抱へて端坐す、筆を嘗むる、茶を飲む、されど苦吟久しくして一句もいでず、恰も詩人然たり、文人乎たり、其中にも日光はこれを照らしてその光燦然たり、此の景、筆舌も盡し難し。あゝ初雪の降れる我庭は眞に美事なり、然も今や共に見るの者はなく、去年の初雪には、我姉と共に景筆を取りし、妹とは浮世の旅かあゝ我れは之れを思へば潸然として涙は下るのである。

○女子の德

神奈川縣都筑郡新治村　苅谷靜子

見よ、太閤は、婦人八重子の力を得て關白となり、梁川星巖は、婦人紅蘭と共に學び、益軒の妻初子は、文筆の才ありて家政料理の旁ら夫の著述を助けて、其名を成さしめたるなどは、うるはしくも又奥ゆかしき心地せらる、さるを世には、夫は妻を虐待して、一生を憂愁の中に送らしむる者あるとぞ。こはそも婦の德如何によらざるか。

夫は婦を愛憐し、婦は夫に承順にして、石井の水靜に、波瀾起らざるを以て極美となす。夫婦相反目するは、和を致すの道にあらざるなり。「毅然たる節操は秋霜より烈し」と。良婦たらんとするもの、溫雅婉順にして、貞淑の德を守らざるべからず。

花顏粉粧せずして、齒は駢として眞珠を含み、眉は遠山の新月を畫き、千絲の髮は鬖々として漆を欺むき、其艶美なる事玉の如く、威儀整々徐々として漫歩するは、一目して紳士の令孃たるを知る、かゝる貞節靜婉にして、自ら閨秀才女の譽ある婦人、其長所を炫ふと云ふ事に心せよ、淑女、勉めよや。

○元日

靜岡縣磐田郡田原村彦島　名倉貫子

「何となく嬉しきものはあら玉の年まちたるあしたなりけり」とは、都鄙老若のわかちなく、今日の初日にうち向ふ大かた人の心なるべし。げに鷄の聲花やかに曉を告げ、神棚に引きはへたる注連のうちに輝く燈明ひかりしらけて、やう〳〵明け行くほど、さらぬも大かたは歳ぞなへの鏡餅わかつもあるべく、喰積いはひ、屠蘇くみかはし雜煮のもちを祝ふめり。都おほぢの八ちまたは、見渡すかぎり、松竹の千代の綠に埋もれ、

軒ごとにかゝげし日の丸の旗ゆたかに打靡きて、さしのぼる朝日の影に匂ひあひたるほど、二頭引き、一頭引きの馬車、さては馬、人力車やうやうしげくなりゆきて、縦に横に織るが如くゆきかひ、童は男女おの〳〵むれをなして、凧あげ、獨樂まはし、鞠つき、羽子追ふに、日影やう〳〵高うなりゆけば、若人も打交りて顔に墨ぬられたるやさしさも忘れて、そゞろにうちきそふめり。萬歳、鳥追の門ごとに年をことぶける、姿かたちこそ昔には似たらね、なほ何となくゆたかなるに洋服または羽織袴着よそひたる人の、千鳥あしゝたるなど、げに新年こそめでたきものなれ。こは都のさまなれど、今日をまちとりてことぶくさまは、野末山おく富める貧しき處につけ、程に從ひ、いづこか異ならん。誰れかは同じからざらん。されぱこそ、よべは年の關越えかねて、ほと〳〵穴にも入らまほしげに見えし人も、今朝はほろ酔ひの聲おもしろく、新しき年の始になど歌ひさゞめき、此の曉まで債はたるとて、鬼の如く、夜叉の如く、責めのゝしりし人も、今日は、大黒の如く、恵比須の如く、ゑみかたむけて、拍子とりつゝ、千歳をかねてなどことほぎうたふなれ。しかし世のさま〳〵なる、人の心の同じからざる、此の樂しく、のどかなる年をむかへても、猶物毎にあらたまれども我ぞふりゆくとつぶやく翁もなきにあらねど、それはた屠蘇の盃手に取りたらん時、雜煮の汁すゝりたらん程のこゝちは、さは言へど、仍ほ何となく嬉しからずやは、されば、春立つと思ふ心は嬉しくて又一年の老ぞ添ひけると歌ひしや、やがてまことの情とはいふべき。

○秋のそゞろありき

福島縣石城郡平鎌田町　君子

霜月の十日あまり八日の日、ともとち花園子と、ともども、田舎のわたりさびしき里に、そぞろありきしぬ。去ぬる日どもの、雨のため道いとわろく、よき片ほとりを、花園子先に、わらわは後よりつきそひぬ、されど處處みづたまりあり。鬼の如、五六度あまり。道すがら見もてこしに、田面一面、黒う黒うして、かりさられし稲かぶども、行儀正しう打ならび、遠ふくの小田に耕しつる人の、二三人あちこちにはべる様ども見逃しがたき、景色とてこそをぼゆ。漸にして、小里のほとりにぞ至り着きぬ、赤黄の菊どもは、はかなげに、萎れ、只白菊の、いとすがすがしう香へる、書にも、書かまほしうなん。賤の男、しづの女ども、打まじり、笑ひさざめきつつ、稲こきつる、男の子、女の子の、かまびしうさけびつゝ、わら運びつる狀いといそがわしく思はれつ、濃淡のもみぢ、しげれる小山麓の、柿の木は、彌生の花それがごと、紅ふあかふ、實のみつけるさま、繪圖の奈良の都の御園のそれがごと。世は寂しうして、峯吹く木枯の音ども、西の山、湯の嶽の方に、十日あまり、八日の月影さむうさむう、わらわ

のちまたに、夕餉の烟の太う太う、秋の豊けさを、語るもうれし。折しも竹笛の秋の夕さびを破りて、高く、低く、平家の某の青葉の笛もしのばれつ。瞬間雁のなく音の一聲高う。

○女子文壇の發行を祝うて

神奈川縣都筑郡新治村　苅谷さう子

年立かへるあしたの、み空の氣色、昨日の名殘もなう、うらゝかに、晴れ渡りて、軒端に囀る雀の聲も、いとすが〳〵しく、八十島の松の枝靜かに、四方の海は、波と風との音を絶ちて、久方の天の日かげを長へに祝ふらん。

かけまくも、上は、あやにかしこき九重の大宮人より、下は、あまさがる、深山の奥の賤が子、藻鹽やく苫屋の子に至るまで、今日の日の目出たさを祝ふも、又いといさまし。開け行く我大御代の惠の露に、文の林のいや茂りゆき、わけ入る道も、日にさかり、年にすゝみて、其道々のをしへの書も、さわなりにしとは云へ、婦人に授くべきもの未だ多からざる故、新玉の年たちかへる、けふをよすがに、婦人の智識を磨き、才能を開きて、新なる良家庭を作らしめ、又は古生を捨てゝ新運命に進ません爲めにとて、女子文壇てふ、新雜誌發行遊ばさるるは、誠に喜ばしき事にこそ。

こは賢婦、才女の君達の打揃ひて、いとねむごろに教へ導き給ふ所なれば、良母も出でん、善人も出でん、先は、嘻しき餘りに、おほけなくも、かく祝詞申すになん。

○所感

千葉縣我孫子第弐尋常小學校　中村由

靜かなりし青柳の糸、北風に吹かれて、日に月にもつれ行くやうなり。ゆるう流るゝいさゝ川、淸うして小石も一つ二つとかぞふるなりしが、今はにごりにごりて、流れもいそがはしう見ゆるなり。あはれ、如何にしてかくなりしぞ。人のわざか、風のわざか、神のわざか、あるはいくさのはか〳〵しからぬにてか、いづれにもせよ、かくの如くになりしぞうたてき。

あゝ秋は去りしか、去りぬ。されど、そは紅葉の秋にて心の秋は今なほ盡きじ。あはれ、何時に至らば、のどかなる春となるべきか。

心の秋、そは何をかいふ。こは、惠みの露のかゝるところ、民草に袖をぬらす涙あるを云ふぞかし。さは云へ、袖をぬらす涙出づる、如何に、そはみな世のかはれるに因るならむ。

あはれ、み國のためとはいひながら、出征にし丈夫の身の上ほど哀れなるもの、世にあるまじ。その出で立つ時や、親、はらからにいとまを告げ、日頃枕を同じうしたる妻子を後にして、海を渡り、山を越えゆきて、知らぬ國の地に踐み入り、風寒くもの荒きところ、たゞ一つの軍服に身をまとひ、あるは野に寐ね、あるは

山に臥し、實に千萬の苦しみを經るのみならず、いざ戰ひの聲かゝれば、雨の如き彈丸の中を進み行き、勝たずば死すとも止めじと勇ましげに戰ふ丈夫の心、げに健氣なれど、その有樣いかであはれならずや。

又、後にふり殘されし妻はらから、如何に哀れなることよ、朝な夕なに雲山千里を隔つる劒きらめく地の忍ばれて、三寸の胸に血潮湧き泊りて、かはくひまなき袖の上に、又もふりかゝる如何に哀れならずや。

あはれ世には幸うすきものゝあるぞかし、殊にふるさと守る妻や、秋來りて紅葉散るも、野菊の霜になやむも、草枯れて虫の聲たえ〲なるも、目にも入らず耳にも入らず、たゞ〱露の命を露に宿して、昨日も今日も出征にし夫が身を思ふのみならず、神ならぬ身のひたすらその境遇を知るよしなく、糸より細き音をもて嫋々と泣けるその目にたばしる涙や如何に。

あはれ今の世のなか〱に心うきことよ、よしやこの心の秋の立ちて、長閑なる春に至るとも、親は子に別れ、子は親にわかれ、なげき苦しむもの世にいくばくぞ、思へば悲しあさましや。（完）

○或一日

伊豫　高橋かめよ

空には一點の雲もなきよき日なり。朝より何をして、樂しく遊ばばやと思ふ折から、幼なき妹の、姉さん貴女のお友達がお出でなさいましたとのつげに、飛立つばかりうれしく、行きて見れば、秋子樣に、雪子樣、あまりの嬉しさに、心もおちつかず、まづあがり玉へと、我が室にいざないて、粗茶をまゐらせなどして、小學時代の面白おかしき事ども語り合ふうち、秋子樣の、誠に妾常に思ふ市のほとりの中に住み居るよりは、かくしづかなる眺めよき家にすみたしと、雪子樣もともに口をそへられ、ことに、こゝは土地高くして、吾等の方の町は更に、遠くは沖の島までも見亘され、眺めよしなど、そゞろにうらやみ給より、それでは、何日までも〱こゝにとまり玉へなど言ひて、なか〱話もつきず。さる程に十二時を知らせしより、晝食を進め、又々話す中、雪子樣は向ひの山の、今を見ごろなる紅葉に、目をつけられ、あの山にゆきて見ばやとに、秋子樣も、妾も、共に家を立ち出で、手をひきあふて唱歌をうたひながら行く。道には、野菊、尾花が見てくれかしにさき、すゝきは我等をむかへるよう見えて、いとうれしく、早くも麓につきて登り始む。この山一たいはげ山にて、一すじの道もなきに、所々に「はぜ」の木ありて、今は紅葉をなして恰も赤き衣を着たるようなりと言ひて、友のいと〱めづらしがりしに、この山を紅葉山とまでよぶ事ども語るうち、早や頂につき、とある木のかぶに腰うちかけて、さげかごにもて來し柿を取り出し、食べつゝ、見おろす愉快さは何にたとへん方もなし。遠き〱陸のあらんかぎり、見ゆるかぎり、いづこまでも皆秋のさまを顯し、

又この山つゞきの山には、いよゝ紅葉の錦をおりなして居るなど、誠によき景色なり。雪子様の風流の心あらば、この秋のさまを詠まんものをと言ひ給ひしに、今さらに吾等の無風流にも程こそあれと、皆々口惜しう思ふ中、早や暮れやすき秋の日は西にかたむきて、山に夕日のさすより、一しほ眺めよく、皆々言葉もなくうつとりとして居ると、日は遂に沈み、つめたき風のほゝをなでるに心付き、急ぎ山を下り、我が家にかへれば燈火つけ居たり。湯を友にすゝめ、妾もともに入りて出で來れば、早や母の心づくしの夕食をならべてあり、いと／＼うれしく、山の景色など語りもて、食し終りて、色々の話もしつくしたれば、小說の話こそよけれと妾しひられ、遂に不如歸の話すると、始めは面白く、しだいにあはれになりて、いよ／＼あはれの終をすると、皆々言葉も出ずありしが、しばらくして皆々共に、浪さんは可愛そうだはとのみにて床につく。

○鬼か

越後長岡在乙吉　石川紅雨女史

此所に父子の乞食あり、其の子或家より一椀の殘り物を貰ひ得て來りしが、時しも吹き來る寒風、彼を襲ひ、椀もつ小手ワナワナと震ひ戰き、笠につもる雪は吹き落されて、彼の顏を打つ、彼の心や凍えけむ、目をパチツカセながら此方へと走せ來りぬ。之れを見たる父は、無言に其椀をもぎり取り、小脇にかゝへて逃げむとはしたりけり。子は愕然として父を見守りしが、やがて其目には怒氣滿々として、震へし手は、既に拳を握りたり、……背にかくして。

「タァー、オレの貰ッただい、ヨコセヨ、コセ。」

「何云ふ、親を何と思ふ。――！」

「何に、！盜人、！」「畜生ッ！。」

大切の大切の此椀、！抑も喧嘩の根たりし此椀を打ち捨てゝ、父子二人、所も有らうに、巷の中にて組つきぬ。

巷行き交ふ人々は、足を止めて見かへりぬ。

我も心あるにあらねども、人につれられて眺めて居りしに、やがて巡査は來れり。二人は離れたり、されど尙得も云はれぬ惡口雜言吐いて止まず、巡査は一々事の始終を手帖にかきそへたり。

× × × × × × × ×

我立つ後には身の丈六尺に垂むとする長髯豐頰の紳士居たりき。彼れは他人にもあらず、今しも會堂にて聖書の講義を與へし牧師なりき。彼れは何故にや顏をそむけてすぎ去りぬ。





廣津柳浪先生選

天

巖上の初日出

上毛太田町　渡邊紫雲女史

『姉さん、早く來ないと、お日樣が出て仕舞うよ』と弟が呼ぶので、私は火もしを置いて、忙がはしく、燈臺小舍を飛び出しました。

誠に悲しい孤兒の私共姉弟は、只一人ぎりのお祖父さんと、人里遠い海岸で、淋しく燈臺守を致して居りますの。明け暮れ青海原を坪庭の池と見ながら。

左樣ですから每年、美しい初日の出に向ひましては、お祖父さんのお丈夫を祈らうとして、二人で幼な心の誠意を盡すので御坐います。

チョコ〳〵驅けて行く弟の後を追つて、白い眞砂の上を小走りに行きますと、海を渡つて來た朝風は、何んだか氣持よく、髮を吹きますの。

四方は未だほの暗く、物靜かで、此の濱つゞきの松原は濃い紫で、只松の梢の明星がしばたゝいて居るきりで、私共が命の親ともいふ燈臺ばかりが、後ろにぬつと高く聳えて、淸い空氣の中に白色の活き〳〵した姿を現はして居るのは丁度此の近海を警戒してお出なさる夜の御神の御姿の樣に見えます。

愛弟はと見ますと、波打際の大きな巖の頂上に可愛ゆらしげに突立つて、星の樣な瞳をパッチリ開けて、餘念もなく、男波女波のさんざめく沖を見守つて居る。

私は肌寒い襟を掻合せながら、ザク〳〵と白砂を踏み分けて行きますと、年中休みない大浪は、今日も同じ樣に打ち寄せては、岩に碎け、砂を捲いて、足許近く洗ふかと見ますと、又沖の方へ退いて行く。

『姉さん、早く御出てよ』と弟は小さい手で麾て居りますの。私も漸く巖の上に登つて、二人手と手を握りながら、東の方を眺めました。

未だ明けやらぬ綠の空の中には、紫がゝつた斷れ〳〵

の雲が、浮いたり沈んだりして流れて居る。眞東にある小松岩のあたりは薄靄がたなびいてゐる。

『姉さん向ふが赤くなつたよ』と弟は島の方を指した。東の空に美しい紅の彩色がされたと思ふ内に、紫の雲はいよ〳〵紅に變りまして、あなやと呼ぶ間に、太陽は少しく面を水面に顯はして新な光明を放ちました。まあ何んと美しい初日の姿で御座いませう。我等が願は正しく神の嘉納を辱けなうしたと思ひますと、又なく嬉しう御座いました。

『もうお日様ッ拜めるよ』

『そうねえ』

二人が巖の上に跪いて、只管お祖父様の健全を祈りました。

二人は喜んで巖を下りやうとしますと、目も晴るに連なつて、山海共に朗らかな光を浴びて、春めいた樣に見えます、私共が命の親の燈臺も紅く輝いて居りますそれから向ふの風除け岩の上では、懐かしいお祖父様が、白く長い髯を春風に吹かせながら、

『最うお雑煮が出來たぞうい』

手招ぎしてお出でなさるのが見えました。

評　西洋のリイダにても有りさうな題目、作者「巖上の初日の出てふ平凡なる題を捕へて、此の詩趣ある自然の情景を描出す。其の手腕決して凡庸にあらず。

地

初戀

麹町區元町壹丁目壹番地　高橋つな子

妾の御友達に關花子と云ふ同情に富むだ極く心優しいお孃さんがございました。妾とは大の仲善で、學校も同じでしたから、朝早く登校する時でも、お互ひに誘ひ合ひ誘ひ合され合ひして、遊びも共にし、笑も共にし、樂しく交はつて居りました。花子さんのお父さんは或る銀行の頭取で牛込の赤城下に住まつて入らつしやいまして、お住居も廣うござんしたし、お庭も廣うございまして、色々な西洋草も植ゑられて、それは〳〵美しい良いお庭でありました。妾はいつも遊びに參りましては、花子さんと一緒に、この美しいお庭の芝生で、ヴハイオリンを、彈いたり、讃美歌を歌つたりしたことは、幾度でございましたらう。花子さんには一人のお兄さんが入らしつて、お名を義春さまとか

申しました。大學へ通つて入らつしやるそうで、年齢は二十五六でもござんしたらう、顔の白い優形のお方で、角帽を被つて制服を着て、ステッキを持つて芝生などを御散歩になる御容子はまるで一幅の好畫圖でございました。それでお話でもなさると活潑で、思はず知らず吊り込まれることなどは稀しくありませんでした。花子さんもお自慢で、「宅のお兄さま程お話の上手な人はありやしないことよ、學校の先生だつて敵やしないわ。」などゝ學校中觸廻つて、お友達に「嘘だと思つたらお遊びに被入い、論より證據藁人形」つて、おほつほゝゝと笑つて被入る位ですもの。お母さんも優柔やかな上品なお方で、何となく人懷かしくつて被入いましたから、一家笑ひさゞめいて何時も和氣洋々と春風が漲つて居りました。

妾は自分から申しますのは、少し何んですが、性來遠慮深い性質でございましたから、兎角はづかしがつていけませんでした。それに引きかへ花子さんは活潑で交際もお上手で入らしつたから親友も妾より多くございました。或夏の日曜花子さんは妾の宅へ手跡美しい手紙を寄せて「百合子さん、今日是非貴姉にお引き合はせしたいお方がありますから、甚麼御用があつても

✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳✳

繰り合して被入つて下さい」と言ふ文言でしたから、妾は蒸し暑い日でございましたが、折角斯うしてお手紙まで下すつたのに往かなくつては惡いと存じまして、自分の家を出ましたが、途々花子さんは甚麼お方を御紹介なさるかしら？女の方か男の方か？矢張り花子さんの親友のお方であらうなどゝ考へながら、赤城下の家へ着きました。花子さんは飛んで來て「百合子さん宜く來て下さいました。妾先刻から心待ちに待つて居たのよ。早く此方へ被入い。」と喜ばしさうに手招して奥へ驅け込んで仕舞つたのです。妾は豫て案内を知つて居りますから、花子さんのお母さまに御挨拶を申し上げて、何時もの花子さんの部屋へ參りますと、誰れも居りません。仕方がございませんから、其處にあつた「心の華」を見て待つて居りますと、やがて花子さんが入つて被入いまして、室の内から「露子さん早く入つて被入いな。遠慮しなくつても宜いのよ。」と果ては又立つて部屋の外に居た、年頃も花子さんと同じなお孃さんの手を引張つて、無理に部屋の内に坐らせておつほつほゝと笑ひながら、「百合子さん、この方妾の親友で矢島露子さんと被仰るのよ。これから仲よく交際つて頂戴な。」と引き合はされましたから、妾は

それ〳〵御挨拶申して、露子さんともお交際することになりました。其日は花子さんの執持で、木蔭涼しい何時もの芝生で仲よく遊びましたが、其年の九月、露子さんは妾の學校へ入校なされました。花子さんの喜びは申すまでもなく、妾も共々に喜びまして、それからは三人巴のやうに露子さんの家で遊んだり、妾の家で語つたり、花子さんの家で笑つたりして、まるで姉妹のやうに樂しい月日を送つて居りました。

三人が均しく十八の年を迎へた正月二日、花子さんから、今晩學校のお友達と兄さんのお友達と歌かるたをしますから、夕飯を召し上つたら直ぐ被入いとのことでしたから、お母さまに伺つて、花子さんの家へ上がりました。處がもう早くから被入つたと見えて、學校のお友達やらが、大勢參つて露子さんも交つておいででした。花子さんは仲々お骨折りで、妾にも「百合子さん忙がしくつて仕様がないんですから、少し手傳つて頂戴よ。」と獨りで駈けずり廻つておいでゝした。義春さまのお友達も段々集まつて來ました時、玄關で、「御免なさい」と透き通るやうな聲がしましたので、花子さんは「百合子さん憚りさまですが、お取次をお頼みしますよ。」と被仰いますので、是非なく取次に出ま

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

すと、角帽被つて制服を着た大學生、未だに妾は見忘れません、凛々しい男らしい、何と申し上げて宜いやら、目に一種光りがあるやうで、妾は只俯向いてはづかしそうに「お名前は……」と問ひますと、妾をしげ〳〵御覽になつて帽子を手に取つて、「僕は矢島彥麿と云ふものです。義春君に矢島が來たとそう被仰つて下さい。」と亦つく〳〵妾の顏を眺められますので、妾は什麼したことか、躰中言ひ知れず、ほてつて、血が煮え立つやうで、口が粘り着くやうで、樂しい天の御園生へでも往つたやうで、懵然して、自分で自分を忘れて取次致しましたが、自分の心には怪しい雲が懸つて、終始何か囁いて居るのです。義春さまが案內せられたことも存じませねば、皆さま方が笑つて居ましたやら、話しなすつて被入つたやら、那麼ことは少しも存じませぬ。座につきました彥麿さまの席は、妾の席の直ぐ前で御座いましたから、倘々はづかしうて、疊ばかり見つめて居りました。花子さんは心易立てと見えまして、折々話などを仕懸けられます。やがて組を分けて取り競することになりました。幸なのですか不幸なのですか、妾は彥麿さまの組に入りましたが、少しも取れないので、花子さんは餘りと思つて、「百合子さん、

貴女憫然なすつてちやいけません、確かり遊ばせ。」とたしなめられまして、自分でもはつと思ひまして、義春さまが讀み上げる「立ち分かれ稲葉の山の峯におふる皆様が、松と一字筆太に書いたの」…それやこそ御座んなれ、こつちに御座つたよ、お氣の毒などの聲が樂しく、あつちの一隅から起りますと、妾の組の方でも、むべ山風はお手前、かこち顔なのは拙者でなど、、勝負を爭ふので、計らずも雲井にまがふは妾取りましてと言へば、花子さんと露子さんが覗き込んで、「アラ百合子さんそりや大井にまがふよ、おほツほゝ。」と笑ひこけるのですもの。尙あはて、、御手付などして歌留多の仕舞にまでに、やう〳〵三枚取つた許り、自分ても不思議でなりませんでした。其夜は家へ歸りましても、一寸でも寢就かれません。只現に見、夢に見して、獨りで樂しんで居りましたが、或日學校のお友達にあの方は露子さんのお兄さんと聞きまして、妾は甚麽に吃驚致しましたらう。露子さんは今迄何故隱して被入いましたのでせう。妾は今でもこれ許りは合點が參りません。其年の四月、妾達三人は、首尾よく學校を卒業致しました。以來妾は懐しい故郷へ歸りましたが、都の友の便に、花子さんと矢島さまと御結婚なさいましたと聞きまして、妾は甚麽に悲しんだでございませう。甚麽に口惜しんだでございませう。人知れず涙を袖に絞つたのは幾夜かは存じません。自分が初戀!あゝ〳〵、どうぞ、あとはお尋ね下さいますな。

評　精細なる筆致と、美しき感情の流露せるとを以て、暫く「地」に推す。

人

追分節

千葉縣印旛郡富里村
五十一旅館皎月軒方　小高せい子

（一）

「お爺さん今日は。」と、優しい聲。

年紀は二十二三、乳呑兒を懐に抱いて、扮装の小瀟洒とした色の白い女が、入口の閾を跨いだ。

「オ、誰かと思つたらお松さアぢやねえか、こりや珍らしい。……さあ、ずつと此方へ上んなよ。」

編み未了の草鞋や、散亂れて居る藁屑を片寄せながら、懐しさうに恁う言つたのは、六十近い人柄の善ささうな老人である、名を福松と呼ぶので。

「えゝ難有うよ。」と、女は其儘上り框に腰を下して、
「お爺さんは何日も變らず御精が出るんですねえ。」
「いやもう年を取つちや、根から意氣地がねえだよ、さあ其處は寒いだ、爐の傍へ寄んなせえよ。」と、老人は再び勸めた。
「何有此處で澤山ですよ。」と、一寸乳呑兒を搖すつて少し身を斜に、爐へ手を翳しながら、
「あの邦さんもお變りなくお壯健でせうね。」
「邦か、うむ、相變らず壯健で稼ぐだよ、今日も野良へ出て未だ歸つた來ねえだ。」と、福松は爐へ榾をくべながら、一寸乳呑兒を覗いて、
「其子だか、去年の秋生れたと云ふのは。お前に似て酷え好え子だ、名は何と云ふだか喃。」
「春吉と云ふのですよ。」
「春吉、其れや好え名だ。」と、福松爺は身を延して、更に小供の顏を覗き込みながら、
「眞個に好え子だ、可愛いもんだ喃。」と、如何にも可愛くて堪らぬと云ふ風に、其軟かな頬を頑丈な太々しい指で一寸觸つて見るので。
　聽て彼は思ひ出したやうに、
「其れや然うとお松さアや、お前は何日東京から歸つて來たゞね？。」
「昨日歸つたのですよ。」
「昨日？。然うだか、今度は十日や十五日は逗留して行くだんべい喃。」
　お松は急に頽然となつて、
「それなんですよお爺さん、十日經つて歸るか、半年經つて歸るか、目今の處で未だ分らないので困ッ仕舞ふんですよ。‥‥」と、妙に沈んだ口振。
「可笑しい事言ふぢやねえか、十日經つて歸るか、半年經つて歸るか分らぬだなんて、一躰奈何したと云ふのだよ。」と、福松頗る怪訝な面色。
　お松は無言で俛首れて居る。其瞼の曇つて居るのは、強ち榾の烟い所爲でもない樣子。座が何んとなく白けて來た。

（二）

　福松はお松の悲しげな樣を見て、急に氣を替へて、
「那麽ことはまあ奈何でも好えとして、あの猪助さアは相變らず壯健で稼いで居なさるかよ。」と、何心ない問であつたが、お松に取つては深く悲を呼び起す種であつた、彼女は潸々と涙を零して、
「家の人は又送牢られたのですよ‥‥。」と、有繋に顫へ

た聲。
「えッ又喰らひ込んだ？。」と、福松は驚愕の目を睜る。
「眞個に私は因果なんですよ。」と、お松は襦袢の袖で瞼を拭いて、
「家の人が此前牢から歸つた時、お前にも散々苦勞を懸けて濟まなかつた。最う目が覺めた、酒と博奕は斷然止めると云ふて、仕事に身を入れて稼いだのも些か十日か廿日の當座て、持つたが病は癒らぬと見えて、日數の經つうちに又博奕仲間に入つて、私の着物をそツくり、此子の晴衣迄殘らず持ち出すと云ふ仕末、其の結局が遂々またお手が入つて、一昨日送牢られて仕舞つたのですよ。」と、懷の兒を眤と見入つて悲しげに鼻汁を啜つた。
福松はホッと溜息を吐いて、
「仕樣のない野郎だ。猪助さアと云ふ人は、道具を持つちや、仲間の內でも酷え腕利きだと云ふこんだが、博奕ばかり打つて、遂々喰らひ込んだなんて……這麽溫和しい嚊や可愛い兒供の事が氣にも懸らねえだか喃。」と、獨言のやうに言うて、さてお松の顏を繁々と見て、
「お前もまあ因果な亭主を持つたなア喃。」

老の身の涙脆く、彼は連に瞼を瞬くのであつた。

（三）

此處で少しお松の身の上に付いて書かう。
お松は、田地なども可なり持つて、此の本郷村では中流の生活を營て居る彥之亟と云ふ百姓の娘なので、福松の家とは極近い親戚の間柄故、日頃より親しく互に相往來して居つた。
彼は美貌の母に似て、田舍では珍らしい色白で、愛嬌があつて、其の上氣立が優しく、此村での評判娘で、村の若い衆の內にも、此娘の爲めには隨分浮身を窶した者も多かつた。かの福松の一人息子邦造なども其仲間であつたとやら。
お松が東京へ嫁入りしたのは一昨年――彼が十九の夏であつた。之より前既に福松の家から、邦造の嫁にと云ふ申込があつたのであつたが、其の當時の彼の胸中には、這麽邊鄙な片田舍で、一生馬や牛を相手に齷齪と働くよりも、出來る事なら未だ見た事もない東京の、賑かな處へ嫁つて、面白可笑しく暮したいと云ふ、儚ない空想を描いて居たので、福松の方は斷然斷つて仕舞つて、世話する人のあるを幸ひ、親兄弟の留めるも肯かずに、東京本所二葉町とかの、建具職の猪助と

云ふ人の處へ嫁入りしたのである。
併し愈々東京へ出て見ると、哀にも彼の考は一つとして中つて居なかつた。彼は先、東京人の利にのみ趨つて、心の冷淡なのに一驚し、次に自分の來た家には、別に不動産とてはなくて、其日暮しの生活なのに、更に驚き、最後に亭主の猪が酒呑みの博奕打ちである事に心付いた時は、驚くと云ふよりも、寧ろ大に恐怖の念を起したのである。彼は此時始めて、故郷を飛び出して東京へ來た事の非を悟つたのであつた。
猪が賭博犯で初めて入牢したのは、お松が春吉を生んで間もない事であつた。お松は此時既に郷里へ逃げ歸らうとしたのであつたが。春吉と云ふ恩愛の羈絆に引かされて、涙を飲んで恐ろしい夫の出獄を待つたのである。處が猪は出獄後間もなく再び入牢の身となつたので、彼は最早や恥や外聞を思ふの暇もなく、春吉を抱いて我が里へと逃げ歸つたのだ。

（四）

福松お松の兩人は稍暫の間無言で俛首いて居たがお松は漸くにして顏を擡げて。
「ねえお爺さん、私が此樣に苦勞するのも、一昨年お爺さんの處から、邦さんの嫁にと云ふて被下つたのを跳ね付けて、東京なんかへ飛び出した罰なんでせうよ、私は最う然う思ふて諦めて居ます。」と、思ひ込んだ樣に言ひながらも、瞼には涙が充滿である。
「眞個に喃、愚痴を云ふ樣だが、彼の時お前が來て呉れたら、お前も這麼苦勞をしねえでもよかつたらうし、邦も今の樣な偏屈な人間にも成らねえだつたらうに……。」と、ホロリとした。
「喃お松さアや、這麼事を言ふと、お前笑ふだかも知んねえだが、邦はお前が東京へ行つてからと云ものは、全然人間が變つたゞよ、あの賑かな面白い氣質が妙に滅入つて、物を苦にして考へ込むと云ふ風になり嚊持たせやうと思やア、口答一つしねえだつた。彼奴が、一生獨身で暮すだなんて、不可事ばかり、言ふて奈何しても俺が云ふ事肯かねえだよ、それから俺ア未だ聞いた事はねえだが、仕事の時も野良から馬牽いて歸つて來る時も、始終お前がこと忘れられねえと云ふ樣な歌唄ふさうだで、村の衆が皆可愛想だ憫然だと氣の毒がつて被下るだ。俺もたんだ一人の息子のこんだから、可愛想で可愛想で、なんねえだよ。」と、語り了つて福松は手拭で瞼を押えるのであつた。
お松も此際泣かずには居られない。福松の涙ながら

語る邦の切なる心情を聞くにつけ、亭主の猪の淺猿しい境遇を思ふにつけ、譬へ一時の迷ひからとは云へ、何故自分は優しい邦からの緣談を謝絕つて、恐ろしい猪の處へ嫁入りしたのであらうか、如何して此氣樂な土地を棄てゝ、虛飾の多い東京などへ出たのであらうかと、我と我身を恨むと共に、邦に對して氣の毒で堪らぬと云ふ情が、胸元に込み上げて來るのであつた。彼は唯、「濟みません、私が惡かつた」と云ふ言葉を繰り返して、潸然と泣いて居る。

薄暗い夕の幕は、もう其處らを閉して來た、榾は何時か燃え盡きて、家の內は冷い。

「何の因果かまだ目に殘る、
　樣の姿の襷がけ……。」

彼方の田圃道に、馬の鈴の音につれて追分の一節が聞えた、邦が歸つて來るのであらう。

お松も福松爺も引き付けられた樣に、齊しく其方に耳を欹てた。

評、詩興と熱情となしと雖も、老練枯淡の筆、優に一頭地を抜けり。
唯選者は思ふよしありて之を「人」とす。

○神の子

越後長岡　杉本たい

一

三千世界は廣いけれども、恐らく妾程因果な者はありますまい。妾の夫は今戰地へ行つて身をいけにえにして、國の爲に働いて居るのです。そして妾には此年三つになる秀雄と言ふ子があります。それは〳〵ほんとに神の子か天の使かと思はれます。美しい眼の中には何日もにこやかに笑を含んで、紅葉の樣な小い美しい手を延ばして、お母さんお母さんと、妾を呼ぶのです。妾は悲しい事辛い事があると、何日も秀雄をしかと抱きあげるのです。そしてぢつと秀雄の顏を眺めます。そうすると何となく胸が廣くなる樣な心地がして、屹度今迄の憂ひの心はなくなるのです。そして妾の前には、絕えず何者か――幻の樣な――白い手を前に伸ばして招く白髮の老人――いはゞ天使とか神とか言ふやうなものが居つて、悲しむな泣くな忍べ忍べ、ゆくだけゆけば光明が輝く、泣いて黯黑の底に沈んでゐるよりは、笑つて人の世の酷薄から免かれよと、妾の耳に囁くやうに聞えるのです。

噫、今の白い手、吁今の老人はと思ふと、パツト夢の覺めた樣な心地がして、自分は何日もの通り秀雄を抱いて居るのです。妾はどうも秀雄は妾の子であると思はれませんのです。屹度神樣が妾を救ひに來なすつたのであろ！。ア、屹度です、屹度です、妾はこう思ふと、秀雄が一層かわいのです。妾は秀雄が無かつたら妾はきつと死んだのです。ア、あの老人がなかつたら。

妾は吁と云ふて歎く時は、何日も白髮の老人の事、秀雄の事を胸に描いて、思ひ返して勵むのです。

妾はなんてこんなに悲しい辛い身でありますかと言へば、妾の家はあゝ言ふも怖ろしい樣な心地がしますが、妾は皆んな白狀します、實は俗に穢多と卑しめられてる新平民の家なのです。そして妾の杖とも柱とも賴む夫は、前にも申しました通り、此春召集されたのです。妾はどうして生活の道を得る事が出來ましやう。只少しばかりの畑があるばかりで、それに此松尾村の衆からは相手にされんのです。否相手にされぬ許りか、やれ穢多の非人のと嘲り罵られ、虐待されるのです。それに竹さんが門立の時にも、同じ戰爭に行く者を一人除者にして旗一本立てゝくれなければ、萬歲一言云つてくれなかつたのです。ア、あの時竹さんの心は。妾其を思ふと此世に生きてる甲斐はありません。一層妾は死にたくなるのです。ア、此秀雄が居なかつたなら、妾は屹度々々!!!あの時竹雄さんは齒嚙をして破入つたが、妾は悲しくつて〳〵。

たま〳〵さら〳〵と窓うつ枯葉の二片三片。

二

木枯は肌を劈くかと思はれ、寒さはしみ〴〵と身に沁みわたる、夜半寒月一輪、鏡の如く澄みきりたるみ空にかゞやきて、四邊は寂として音もなき夜、妾は跣となりて此松尾村の村端の大戸川を指して道を急いて居りました。其時は妾の髮は亂れ眥はさけて。

噫、妾は何の爲に此夜此所へ來たのでしやうか。仰いで天に向へば、氷の樣な月は尙开が強き光を後ろから妾の背に投げて居ります。ア、此光の未だ蔭れざる前に、わらはは永久に此人の世を去らねばならんのかと思へば、戀しく懷しく、憂ひ悲みを、一つの狹き胸の裡に包みかねたる此月の夜に。

烏の何に駭いてか、ざわ〳〵と塒を飛びだしたのに心付くと、妾は何日の間にか大戸川の岸に來て居るのです。妾は懷中から竹さんの寫眞を出して、しかと抱きしめ、はるか西の方、滿洲の野をさして、兩手を合

せ、ア、竹さんす濟みません、ど、どうぞ堪忍して下さい、妾は遂に貴君の前に死出の旅に行かなければなりません。エ妾は先に行つて三途の川で貴郎を待つて居ります。あゝ竹さんと言ふと、亦もや白髮の老人‼神‼が出て來て忍べ忍べ、ゆくだけゆけば光明が輝く。汝は秀雄を見捨てたのであるかと叱りはげますす如き聲が、妾の耳底迄聞えました。妾は秀雄と云ふ事を聞いて、亦もや迷いました、アゝあの秀雄！神の子！どうしてあの子を遺いて死なれましやう。妾はどうしてこんな心に。いゝえ妾は惡かつた。ア、妾は心得違をして居りました。アゝ天に在す神樣、妾の此深い罪を宥して下さい。妾は此後神樣の導に從ひます。妾は屹度竹さんの歸る迄身を粉にしても待つて居りますと。妾は此大なる罪を悔ひ、再び我家をさして急ぎました。

三

夜闌にして四邊もの寂しく、錦を空に撒きちらすやうに鷺大の雪が霏々として大空を亂れ飛び、凄じく破れ窓を吹く冷い風に、思はず頸を縮め、膚には鱗甲が生ずるかと思はるゝ寒い晩でした。妾は何日もの通り、秀雄を抱いて妾の心を慰めて居りました。キ、ツ、と天井に鼠の音、秀雄は思はず悚然として不安の目で音する方を見上げた。妾はどうして此子をおいて死ぬ氣になつたらう。アゝ妾はどうしてあんな心を起したてあろう。秀雄、お母さんが惡かつた。堪辨してねと、秀雄の頰邊に接吻しましたら、から〱と笑つて、妾の顏をじつと見ました。妾は此笑顏を見て悲いのや寒いのは全く忘れました。ほんとに秀雄は神の子です、天の使です、妾の命の救主です。

やがて秀雄は妾の膝の上ですや〱と眠り初めました。今頃は何を夢見つゝあるであろう――。吁無邪氣なと、妾は思はず嘆息しました。

折から表道にけたゝましく吠え出した犬の聲に、妾は思はず耳を傾けますと、其途端に周章しく戸を叩く人の聲、「電報、々々。」

ハット妾は胸を轟かして、取る手遲しと封を切つて見れば、「タケオセンシス。」えつ竹さんが戰死、えつ妾はどうしやう、えつ神樣は、ほ、ほんとに。……

一陣さつと吹きよする風危ふくも、仄暗い燈火を呑まんとした。

○低語

長野市　安孫子美子

上　汀の思

身は丁度夢のやう妾は不思議な或物の權力に導かれて今夜も亦此裾花の江畔に佇んだ、み空に冴へた望の月は露重たげな汀の小萩と共に其美しい影を水面に碎かせて浪は徐かに夜の錦を織つて居る。自分は例も月の明るい夜魂はいつしか此所へと彷徨つて不知身は此河の流の岸に亡兄様と昔の夢を語るので。かつては兄弟て謳ひ合せた彼の滄浪の詩を現今は悲しい逝く水の調に低くひく〻口吟するのである。

綠の油を湛へた水の底！月を、萩を宿した水の底‼。吁此前には兄樣は人間を嘲つて社會を笑つて而して冷たい死の扉の中に自分と同じく此月に一人ある詩を繰り返へして居るのではあるまいか？。

肌寒ひ風が一陣、浪はあやしくゆらめいて、蹚とばかり足下に碎けた。おどろいて一歩三歩後面の草群に立つたが今夜妾は忘れぬ仇敵の順さんが今回の戰爭に志願して明日戰地に出征べくなつた事を急いで此所へもたらしたので冷へきつた口唇には哀れ夜毎の詩の韻は上らぬのである。近傍の石にそつと腰をおろして、其まゝ向ふの浪の面に俯いて茫然とした。月はいよいよ澄み上つてほしいまゝに青白い光明を自分の頸にまで浴びせかけて居る。思ふと兄樣が逝かれた前の晩も、丁度今夜のやうな好い景色で、自分は沈みがちな兄樣を無理に後の菊畠に連れ出して、同じ細道を兄弟うれしく彷徨ふた。

葉末の露を二人で踏んで鳴く虫の音を二人の耳に……自分は何氣なく其白菊の一枝を折つて暖かい兄樣の御胸にそつと押しあてた時、かたく噤んだ御口の邊には、淋しい微笑がかすかに浮んで、徐かに妾の手を握られて、

「美さん」とばかり。

後は涙にご自分が彼の順さんの爲に、あらぬ汚名を身に受けて親にも告げぬ今日迄の果敢ない運命の其悉皆を妾に語られて、

「美さんも既う十四、兄さんの此憂愁は決して忘れてくれるな。」

と握つた腕に熱い涙を濺がれたが、何んと思つてか又兄樣は斯ふ云はれた。

「此身を僞つて汚名のふちに陷れた其淺間しい罪悲の

程は死迄忘れぬ。が、併し云つた順さんは自分はむしろ可憐に思ふのだ。

と、夜の空に力なげな吐息をして又暗然と俯かれた。妾は手にした白菊を大地に投げ捨てゝ小さな草履に散々に踏みにぢつた。既う夜も寂乎と更けたので、丁度垣の戸を出やうとする時「美さん歌を合唱さう。」勢よく云つて先づ其一節を謳はれた。自分も小さく續けた。

など、夢のやうな過去の歴史は現走馬燈のそれと繰り出されて、尚も妾は茫乎と流れ行く水の面を打ち見守つて居る。斯くして次夜兄様は此河に眠られたので理由は妾の心胸より他に誰知る者も無いのである。月の夜毎こゝなる流の波頭に立つては自分は亡兄が盡きぬ恨を慰めると共に、狂はしい程順さんの其身を呪つた。今も妾は順さんが今回の出來事を兄様に語り了つて、尚も順さんの禍運を此水神に祈つて居るので。

四方は更け行く夜氣に沈まつて、何の音も聞えぬ。只兄様が永眠床の其所ばかりは、時々小さい浪がくづれて、優しい水の低語……兄様の御聲の夫のやう。

「私情の爲に落した命と、御國の爲に捧げた命と何れが美しいものぞ。」斯んな想感は急乎湧いて、自分は慄然として夢のやうな境界から醒めたと思ふと、今向寺の三更の鐘が江を渡つて、小萩の上をすつと流れた。妾は悄乎と浪を背にして立つて、而して最後に呼びつゝ去つた。

「兄さん順さんが明日戰場へ……」

下　思はぬ別れ

順さん……妾は思ふにすら堪へぬ。

兄様とは小さい時からの親しい朋輩で去年同じく東都の國學院を卒へてからは、順さんは直ぐ歐洲漫遊の途に上られたが、日ごろ病身の兄様は此所小さい天地の間に限なき詩興の存在を認めて、徐かに其身を養はるゝことゝは成つたが、順さんが出發と云ふ一夜の事、此所よりは十町許り南の山の手花岡と云ふ所に其時分丁度是も都門の紅塵を脱れて、靜養旁哲學研究に日を送らるゝ某博士の別莊へ招待かれての歸途、ふとした口論は火の手を上げて、果終は兄様は貧乏詩人乞食文士と迄罵られたのを、尚も順さんは其時村盗人と仰せられたとか……。」

斯くて兄様は一年を一人優しいお胸に悶えて、遂々あの青淵に非命の最後を遂げられたのである。噫順さんは吾家には終生の仇、自分が夜毎流に立つて其仇人を

呪ひ殺さうとして、血に狂ふのは寧ろ當然の人情では有まいか。夫れを今回順さんは自から殊勝な志願兵の一員に加はつて、此夕戰地へ行かれるので、村は擧て其德行を讃へた。之を聞いた妾は一時兄さんの御許へ走つて猜みの炎に順さんの身の上に事あれかしと呪ひつくしたが、不思議な水の低語に皇國の生命と云ふ事を知つてからは、既う順さんも懷かしい軍人の一員あらゆる感謝の熱誠を捧げて、自分は是非見送の一人として、影ながら小さい萬歲を加へやうと……。花やかな夕暉は榮ある順さんが土藏の白壁に暫時輝いたが、それも程なく淡れて、軒毎の旗はもう村の停車場へとならんで行く。したゝかに祝の酒に醉ふた順さんの顔は、ほつと上氣したかの樣に、赤々と車窓の縁にひらめひて、今一々に見送の人に永別の言を述べて居る。自分はどこ迄も順さんに面會まいと、并んだ人影に小さくなつて隅へ隅へと佇んであつたが、順一君萬歲と急に起つた最後の祝言に、はつと思て其方を見た時……刹那、順さんの眼と妾の眼と一所に宙に落ち合つて、其所に不可言感をかもしたが、見れば順さんは窓にうなだれたまゝ、涙は瀧と流れて居る。

一聲!! 呼鈴は發車を告げた。

あゝ當時二人の胸の緒琴に通ふた絃の響は……誰も誰も知る者はあるまいに、妾は毎晩此淵に立つて順さんの幸福を祈つて止まない。

○繪はがき

京都　松永幸子

、、つい居家からは廊下續きの離れ座敷で。

新らしい疊を敷きつめた六疊の間の、床の上には古風な花瓶に白梅と水仙とが活けてあつて、壁には筆勢生き〱とした新年の勅題新年の山の圖が南畫流の嫌味なく書かれたのがかゝつて居る。

今火鉢を眞中に一人座つてるのは今日の歌留多會の主人役の敏子である。

年は十七八、丸顏の色白で、愛嬌のある口元、情深かそうな眼、造作なく結んだ束髮のそれが又よく似合ふので。

「姉さん、」

と愛らしい聲が先づ聞えて、とん〱と廊下を走る足音。

ばつと障子が開いて妹の芳子と共に來たのはお約束

の學校友達一人。

「春山さんさア。」と主人顏の敏子は座をすゝめる。

「あり難う。」と春山はそこへ座つて「未だ誰れも來なくつて」

「はアもうぢき來ますわ、」

春山はあたりをきよろ〳〵見廻はして床の間のかけ物を見つけて、

「あの軸誰れが書いて?」と近く寄つて見る。

「あれね。」と言ひ淀む。

「春峰つて。」

「はア。」といよ〳〵極り惡るさう。

「誰れ?清水さんとちがつて。」と嫣然笑つた。

敏子は顏を紅めて。

「はア。」

「あのお方は歸省なくつて。」

「はアかへるつてたけれど差支が出來て今年はもうかへらなくつてよ。」

「そう落膽したのね。」

「あらいやよ。」

「おほゝゝゝ。」

折柄椽側の方に足音が聞えて多勢來る氣配、敏子はそれを機會に立ち上つて障子を開けると、來たのは孰れも同年配の家校友達四人。

「御免遊ばせ。」

「お目出度う。」

などゝ口々に、俄に座が賑やかになつた。

「春山さん早やかつたのね。」と口輕の進藤と云ふのがいふ。

「はア今少し先來たのよ。」

敏子は茶を入れて出す。

「今日は私勝つて見せるわ。」と弘田と云ふのが云ふ。

「ね、今日は廣瀨さんは御氣の毒なのよ、」と意味ありげな笑みを浮べて進藤が云ふ。

「何故?」と、廣瀨と呼ばれたのが問ひ返へす。

「でも今日はね。」と何やら齒に物が挾まつた樣なものゝ言ひ樣。

「知らないわ。」

「おほゝゝゝ。」と皆が笑ふ。

途端椽側に足音が聞えて。

「誰れか來て。」

「萩原さんでせう。」

「否、山鹿さんでせう。」

など、皆の視線が障子に集まる。と障子に寫つた影は小さい。

「芳ちやん。」と振りかへつて居座りよつて進藤が障子を開けると顔を出したのは芳子で。

「姉さんはがきが。」と差出すのを進藤が奪ひ取つて。

「溝淵さん、繪葉書。」と一人それを眺めてると横から。

「誰方から。」と廣瀬が見る。

「御自分に書いたのね。」と進藤は、、、ニッコリ敏子を見て笑つた。

「おや清水春峰つて?。」と蓮田と云ふのが。これは氣がつかぬらしい口振り。

「蓮田さん御存知なくつて。」と進藤は説明も爲さうな口調。

「はア。」

「溝淵さんに尋ねたら解りますわ。」と弘田が云ふ。

「おほゝゝゝゝ。」

口々に云はれて葉書はまだ自分の手には入らない。

敏子はたゞ羞かし一方で。

清水春峰とは誰れ、敏子が未來の夫、書道修業の爲め京都に遊學して居るお方。

麗らかな新春の日の光りは庭の梅の樹影を障子に寫して鶯の囀る聲もいと長閑である。

○若き妻

はちす女

打續く小春の空、暖かに、華かなる紅葉の色、さては黄ばみし木々の梢、美しき、秋の自然を染め出して、照日の影も、長閑なりけり。こゝ麻布なる、森岡家には、今日しも、主人が友の洋行を祝ふべく、送別の宴は開かれて、正客をはじめ、何れも若き人々の、隔てなき高話に興深く、折々どつと計り、笑聲響きたり。彌生の頃、迎へられたる若き妻藤子、琴堪能の聞へ高く、左右より、一曲と强られて、いなみ難く、漸く調べ終りしに、又一曲と迫られて、今度はと、打わぶるも、座の人々、聽かばこそ、藤子困じ果てしが、漸く、一方の血路見出して、退り出でぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

人にや醉へる、其の淸き頰を、薄紅に染めたる藤子、逃れ來て奥庭なる、茶室の椽に腰打かけたる儘、庭面を、いづこともなく恍惚と眺め入りたる、油氣なき洗

髮を、前髮ふくらかに束髮にしたるが、後毛はら〳〵と、幽かなる風に戰きて、頰を打てる、又なき艶なる樣なり。

座敷の方に聞ゆる笑聲に、ふと其方見たりしが、やがて氣付きし樣にうなづき、紋御召の袂より、取出したる文一通、封筒の裏表打返し、幾度となく見入りたるが、やがて、中より引出したる手紙、膝の上へ繰廣げ、低き聲にて讀み初めつ「封筒には、わざと姓名記さず候も實は、人目を恐るゝが、故にて、御身を驚かせし罪は幾重にも御わび申上候」。藤子驚きぬ。誠に彼は驚けるなりき、人や見ると、邊り見廻らしたれど、見る人は、あらざりき、彼が目、又、文の上に、薄曇りせる月の夜、蕾まだかたき梅の本に、御身と袂分ちしは、早うたかたの、夢とぞなりぬ。再び故國の土を踏まじと、ちかひし身の、功もなく、後送されし恥づかしさ、軍人としてこの上の、不面目や候ふべき、御身も、我が、負傷當時の事は、新聞にて、知せ給ふべからんに、語るも興なき事なれば、態と記し申さず候。扨は、過し頃、ほのかにもれきゝし人の噂に、御身には、森岡家へいよ〳〵婚嫁せられたるよし、誠に慶賀の至り、我は滿腔の、熱誠を捧げて、祝し申候。さり乍ら、藤子の君、御身は誠に、我を棄て給ひしか、我はさりとは。」讀さして、彼女の顏色は變りぬ、桃色絹の如かりし、美しき其頰の色は、消ゑたり。而も、其聲は、いたく顫へて「思はれず候に別れたる彼日、我も今度は、生還計り難し、御身はよき緣あらばと、云ひかけし我が言を、打消ように、さる事のたまふな、妾は君が、目出度御凱旋を、待ち奉るに、君國のためにいよ〳〵御身御大切に、天晴、功を立て給へと、君はいはれし、其のみ言葉、尚耳に殘り、我は忘れんとして、忘るゝ能はざる所に候。かくいはゞ、丈夫に似合ぬ、女々しき者と、思し給ふべくや、藤子の君よ、軍人なりとても、熱き血も、淚も、持ち候ぞ、思へば、二人が、戀成りしは、去年の夏にてありし。」藤子が聲、いよ〳〵幽かに、いよ〳〵ふるへたり、其の清しき黑目勝の目は、うるみて。「御身が、湯上りの、化粧美はしく、たゞずみ給ひし、立姿の、神々しさに打れ、云べき事も、出兼しが、漸くにして、打明しまゐらせたる、胸の思、御身は、彼の時の事、忘れ給ひしか、彼夕、我が胸には、荒き浪、立ちて、夜もすがら眠られず候ひき、今にても、當時の有樣、思ひ來れば、御身が優しき俤、眼前に、彷彿と浮びて、胸に血汐の、

躍るを覺へ候、されども〳〵、省みれば、元より一命を大君に、捧げまつりて、平和の、犧牲に、供すべき我等が身、傷癒ゆれば、再び起て、今度こそは、天晴屍を戰場にさらすべき覺悟、半身の友と、ちかいし御身が、我をすて給ひしこそ、却りて幸ひに候ふぞや」、讀む聲とだへて、彼女が目より、ほろりと一滴、熱き涙は文の上に落ちたり。あはれ、彼の髮は、いたく、顫ひ彼の面は、美しく、縫取したる、手巾の裏に、かくれぬ、藤子は、終に、泣き伏したるなり。暫くは、聲をも立てゞ、泣きしが、つと振上げし其の顔には、云ひ難き苦痛の色、帶びたり、赤くなりし瞼、手巾にて、拭ひしが、瞳を又文の上に注ぎぬ。讀聲今度は、顫へざりき、而も力籠りて凛たり。「春深き御身おば、埋れ木になすべきは、我に於て、忍びざる所にて、候ひしに、之にて安堵致し候、されば、我は決して、御身を、うらみ申さず候只、御身に、のぞみ度は我傷癒え再び、戰ひに、加はり終に戰場の、露と消へし、其時は、あはれ、一片の同情を、君國のために盡して、斃れたる、軍人として、注がれ度、さらば、我も同胞の一人りが注ぎし、美しき同情として、悦んで受申べく候。元より、我さへ戀せずば、御身をも、苦しませず、自らも煩悶を、重ぬる事なきに、と、今にては、我身悔しく思候。早書も、物憂相成候。さらば、君、幾千代かけて、平和圓滿なる、美しき家庭、作り給へ、我は蔭乍ら御身が、幸福を祈申候、終りにのぞみ、是迄我身に、暖き愛受けたる、大なるを思ひ御身を徒らに、苦しめたる、罪を、厚く、深謝致し候。筆も、思も共に、亂れ候へば、之れにて、免さるべく候、さらば、永遠に、幸くませ君よ、さらば、滿男より、藤子樣參る」。讀終つて、ほと息つきし、藤子晴ぬ面の、憂はしげなり。歩兵中尉川村滿男より送りし此文、いかに、藤子が胸に、苦痛を與へけん。滿男は運命の、不幸兒、親もなく、家もなし、されど慈愛深き、伯母が、惠によりて、漸く今日あるを、得たりき。ふとせし事にて、藤子一家に近づきしより、藤子が、學藝秀てしを知り、容姿床しきを慕ひ、あはれ、半身の友として、彼女が、暖き愛受けん事を願ひたりき。あゝ、花に飛ぶ蝶、水に鳴く蛙皆情あればこそ、落花流水なれ、藤子元より、滿男の身を深く憐れみ、其活潑の、才氣あるを愛して、心ひそかに、戀ひぬ、去年の夏、滿男が悶えし戀、訴へし時、藤子が胸、いかに、浪立ちし、此夕より、二人りが戀成りぬ。されど無情なる

天が、永遠に、二人りが、美しき戀をば、守らざりき。突如として、縁談は、森岡家より、申込まれたり、彼女が、父母は、喜びぬ。彼女は一人り悲しみぬ。嫁すべきか、滿男との、愛を絶たざるべからず、拒まんか、父母の意に逆らはざるべからず、彼女が、弱き心には、父母に、逆らふ能はず、さりとて、滿男との愛を、絶たんか、又成能はざるなり、いかに、すべきと、煩悶する事、數日の後遂に嫁すべく、心を定めぬ、滿男の、恨は甘んじて、受くべく、斯くて、彼女は、遂に嫁したるなりけり。なつかしき人の、手紙膝の上に、目を閉ぢたる彼が面、血の氣なきまで青ざめて、恰も死せる者の、如かりき。風なきに、はら／＼と、音して、紅葉の二は三葉、落ちたり、宴闌なるらん、彼方には拍手の音、高き笑聲、打交りて聞ゆ。藤子、依然として、動かざりき。

○遺羽子

神戸市　大澤くに子

人若し神の姿はと問ふあらば吾は新春の唄に他愛もなく、晴衣の裙を曳いて遺羽子に笑ひ崩づるゝ稚子髷の少女と答ふるに、躊躇しないのである、君が代の唱歌の黄い聲で海老茶袴の姉さん達が、伍々袂を連ねて唱つて門松の幾つかを越えて遙かの町へ急いだ後へ、新調の制服を誇り顔に腕白盛の學生の一隊が『うてやこらせや露西亞國を』の軍歌に威勢よく辻を横ぎりて過ぎ去つた。暫しは織るが如き轍の音も途絶えて君が代の殊に軍國の新年の枝も鳴らさぬ初春の靜けさ、常に變りて一段活氣を呈せるを覺えぬ。

『美いちやんお出でよ、そーしてネ。羽根ついて遊ばう…』

『ハア喜代ちやんの羽子は奇麗だこと…何よ、是れ音羽屋の仁木に成田屋の鐵之助だとさ、お爺ちやんが、そう言いたは。美いちやんのは何によ。』

『こんどの御題の新年の山だとさ。山か美いのネ、裏は梅がついてネこれわ兄さんが年の市で買つて呉れたの富士の山は私はいつも拜んで好だは、そして梅にも春の色添えてと姉さんがお三味のお稽古に唱つて居るのはいゝネ…』

罪もない羽子板の書に、現なく眺め入つて居たが、やがて美いと呼ばれた二重瞳の愛いくるしいのが、斯う言ひ畢つて羽根に息吹きかけ、父こう母こう！とすま

して置いて一調子張り上げて一と目と瞑つて突上げた一瞬！見越しの老梅の枝に無殘、羽根は掛つて遂に今迄の樂しさは破られて泣き出した。そして泣きじやくりの下から今賞めたその梅を口を極めて罵つた。やがて此の無邪氣の罵りが社會の風濤に揉まれ〳〵て、賴母しからぬより、大なる罵りの聲となるべく變らねば可いと思つた。

○纏柳

我孫子 中村由

（上）

此處利根川に臨む北ケ浦、夜は更行きて益々淋しく、今迄ありし御堂の光りも早消えて、手賀の湖畔に雁の聲哀れなる此夜、小雪がさらさらと降つて、風寒く身にしみ渡る所、唯一本の破傘持ちて、深き愁ひに沈み行く兄弟がある、歳は未だ若く、その一人は娘らしくて十八九、一人は其の弟らしく、勇み盛りの八九歳と見える。

暫し無言居たが、弟が姉に向つて斯う云つた、聲は振ひて「姉樣、御父樣は何時歸つて來るの」

「御父樣はネ、戰爭に行つたんだから、生きて歸るか死んで歸るか分らないのよ、それだから御父樣が出征時に「それじや坊や、身體を壯健にして居なよ、父ちやんは最早お前と是で分袖かも知れないよ、能く父ちやんの顏を見て置きな、それで父ちやんの留守後は、能く御母樣の云ふ事を聞きなよ、能く御母樣の手傳をしなよ」と云ひ殘して立つたんだろう」

「だつて御母樣は死んでしまつて居ないもの」

「それでもネ、今居るのは御母樣だよ」

「何故ネ」

「それはネ、御前の眞の御母樣が死んでしまつて、御前が可愛想だから、又他から繼母として貰つたんだよ其時御前は四歲でしたろう」

「だつて僕は世話にならないもの御母樣じやないは、着物も着せてくれない錢も呉れないんだもの、皆姉樣の手で‥‥」

「それはそうだがネ、能く御母樣〳〵と云ひなよ、それてないと錢も澤山呉れないから、又寒くなつても綿入衣服も着せられない樣では困るから、其からネ、妾は御父樣が出征時に五圓だけ貰つて置いたが、何せよ七ケ月も立つた事だから、御前が筆紙買うので無くなつ

てしまつたよ』

『それじや之から姉樣からは……』と云つたつ切り細聲て泣き立てた。

（中）

雪は益々烈しい。

娘も暫し弟の顏を見つめて居たが、遂にはら〳〵と涙を落して『坊や、彼樣歎いたつて仕樣がないよ、もう泣くじやない』

『だつて之から紙も筆も買へないんだもの』

『併し御前能く考へて見な、歎くからと云つて錢が湧いてくる理でも無いだろう、それだから、世の中と云ふものは斯う云ふものかと思つて明らめなよ、それだから之から御母樣に從ふより外に仕樣がないんだよ、そうしりや御母樣だとても御前の小費位は出だろう』

『だつて之迄隨分御母樣には事へたが、たゞ一錢でも呉れた例がないもの』

娘は暫し弟の顏を見つめて居たが、思はず落つるひとしづく……ふたしづく……

暫しの間不言不語。

地に向つて姉弟泣く其の姿、いかに哀れなることよ。

程經て娘はからくも出づる涙を止めて、聲を微に出して『坊や、坊や、それじや御前と妾は之から如何しやう、とにかく御前は妾の傍が好だろう、妾も御前が居なくては便る人がない、事なく暮すには如何したならば宜だろう』

『死んだ御母樣の生れた家へ……』

『併し眞の御母樣の家だとても、御母樣はもう死んでしまつて居ることだから、妾等が行くにしろ、嬉しくは迎へてくれないだろう』

『それじや如何しやう』

『如何しやうつて、泣き〳〵御母樣の傍で日を送るか又川へでも身を投げてしまふより外は仕樣がないは、御前は鬼の樣な御母樣の傍がよいか、又一思ひに身を投げてしまふのがよいか、二つ一つの決心、御前は如何する積り……』

『僕は何所までも姉樣と一同に、姉樣の云ふことなら何でも……』

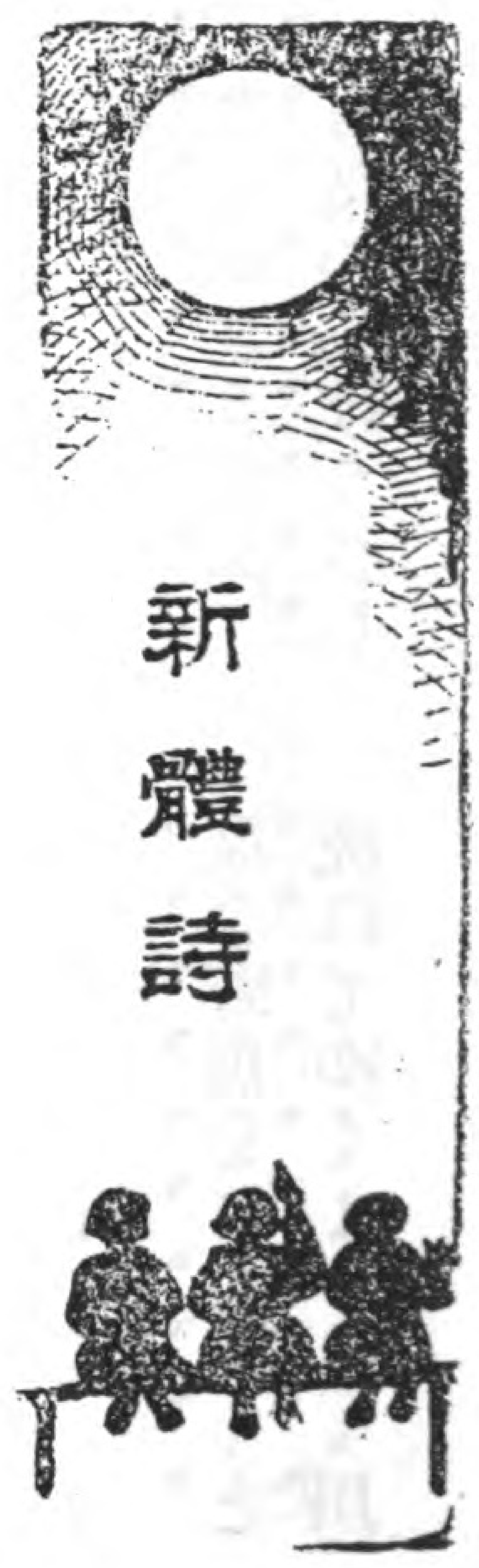
（下）

雪は止んで姉弟が佇む傍の青柳の糸が一陣の風に吹かれて、縺れてしまつたまゝ。

娘はいよ〳〵決心して『それじや坊や、毎日々々泣き明かし泣き暮すのは口惜しいから、一層のこと身を投

げてしまわう。
『それじや僕は姉様に抱つて……』
姉弟は肌着を交換て、密かに〱川へと行く。
弟は何を思ひ出したかわッと泣き出して『姉様』と悲しい聲で娘に云つた。
娘は驚いて『如何したの』
『御母様の所へ』
『それじや御前死ぬのがいやなの』
『だつて御父様に叱られるんだもの』
娘は茲て狂ふばかりになつてしまつて、涙と共に泣き伏してしまつた、弟もともに……
夢の様になつた娘は振ひ上つて『わッ妾、どッ如何しやう……
青柳の縺糸は依然としてそのまゝ。





尾上柴舟先生選

天

野調

千葉縣山邊郡千代田校　文枝女史

水草を掩ふ楡の樹の　一葉二葉はこぼれ散り
啼かぬ小鳥の一群は　萱をくゞりて舞ひ立つよ。

小牛は丘をくだりきて　谷地のくぼみに飲み飽くや
汀の草に横たはり　息づく様の懶げよ。

蒲の穗ふりて牧童は　唄ひながらに躍りきぬ
藍に染めたる麻衣の　腰にさしたる山刀一つ。

あしたしづかに雲を驅る　西吹く風の輕さもて。

樅のかげに飛ぶ鳥、澤水に飽ける牛、牧の歌うたふ牧童のさま、いづれも目に見るやうなり。但し、叙事の樣、譬喩の法邦人の作めかぬところあり。何人かの飜譯にはあらじか。

【地】

樂園賦

豐後國竹田町衛藤千代子方　大島菊子

此平和の詩の國
愛と望と信と義の
此樂園の快樂をば
扉開きて見る朝よ。

くらきに迷ふ人の子よ
天苑の薔薇の榮を見よ
悲しびさけて聖堂に
されば忘れむ憂き惱み。

ソロモン榮華の極みだに
果敢きおごりうちすて丶
野の白百合花に劣るてふ
この樂園の守となれ。

野の百合の榮にも劣れる人間榮華の極をすて丶樂園の守ともなれといふ。着想高雅、而して字句もまた精錬。

【人】

星

常陸新治郡土浦町東崎中山より方　山田雪子

まだうら若きうた人の
みそらにゆきし夕より
薄き運命におへかねて
一つの星はあらはれぬ。

神のみ國にうまれても
暗より先きにあらはれて
なほもしのぶか人の世を
夜な夜な暗を照すなり。

詩人の靈の、星となりしといふこと、今はや丶古りたれど、末節いひしらぬ味あり。

【秀逸】

○野の小川

水戸高等女學校　萩谷ちよ

秋のな丶草さき匂ふ
優しき鳥のかげうつし
廣き野原をさら〳〵と
流れてゆくよいさゝ川。

葉なき柳の岸のべに　さゝやくあはれ水の音
ミューズのかみの奏樂か　自然の調べ面白や。
さゝなみおくる水の上に　夕べ昆たの雲のいろ
いと美しく寫りては　そこに平和のかげきよし。
あはれ儚きつみの子や　利欲にはしる人の子よ
愁れ跡なきさと川の　嬉れしき影をいかに見る。

○我やはかなの憂の子

磐城國木戸村　作山美子

梅の月夜にあくがれて　うたひし去年の嬉しさを
秘めにし胸の思出の　いかにと君よ問ひますな。
さらでもしげき我袖の　渡やいとゞまさらんに
迚も詮なきひとづまの　我や果敢なのうれひの子。
此の袖しかと抱きつゝ　おちよ我魂死の國へ
照らすは高き大ぞらに　愛の小星ととはに輝け。

○戀

山口縣佐波郡華城村　山内しづ

砥にも磨きし玉の如　天つみ空に月すめり
されど心の憂ひをば　洗はむよしもなかりけり。
かくて愁に沈むとき　君がなさけの一言を
聞かば胸の雲はれて　吾の心はよみがへる
あゝこれ神のしはざかも　かくもはげしく月に日に
あれのみまさる世の中に　うれしくも咲く戀の花。
二八の中の戀ひごろも　吹きなみだしぞ秋風よ
吹かば涙のつゆなりて　わが袖しげくぬれやせん。

○行の秋

磐城國双葉郡木戸村作山方　作山美子

御簾(ぎよれん)かゝげて姫君は　夢かさてしも非ぬかと
行く秋月のおばしまに　何をまどひの手文筥や。
我と寫眞(しやしん)の封ときて　有りし乍らの小鏡に

彼見つ此見つ撫てゝやる　ほつれ毛寒しはぎの風。
雲と湧き來るおもひでの　行くへも知らに彳みて
垂れし衣のすそ長う　曳く影細くいづるゝよ。

○獨棲嘆

千葉縣匝瑳郡谷中越川勝蔵宅にて　越川なを子

はかなき夜半の露にだに　しばしは宿るいな妻の
色うるはしき光あり　うたてこの身は徒らに
その光をも受けずして　まどひや入らむ闇の國。
露霜さむきころにだに　かへり花さく小春日の
香をあたゝむる恵あり　哀れ此身はいたづらに
その恵をも受けずして　しをれやはてむ冬野草
君若しわれを忘るとも　いかて昨日のみなさけを
思はさらめや忘れめや　片ほながらに父を呼ぶ
ひとつ情のみづ見ゆゑ　われも諸音に夫をよぶ。
あだし外山の花のかげ　春長しへにあたゝかに
君にこぐさの蝶のゆめ　さませとく／＼やま嵐
搖起してよさりながら　さわがすなかれ君が胸。
誰妬むとにあらねども　夢にもかへせ一たびは
歸らせたまへ君よとく　われしこぐさの八重葎
門の戸さして徒らに　主なき宿をまもりわぶ。

○花を犧牲にして

東京々橋區築地明石町宗教學院寄宿舎内　上田蝶子

黄金の波とゆりゆれて　こゝ百町の稲みのり
夕陽西にほゝ笑めば　平和滿ちたる村の秋。
夕餉の煙閉ぢ込めて　今日暮れかゝる田の畔を
しをれてあゆむ若き子の　なやみやさても深からむ。
名なき野花に口つけて　なれよわらはがにゑとなり
砲とる脊子におくるべき　心を秘めてさづけよと。
み空にひとりさゝやけば　花守る星もほゝゑむよ
かくて高き香ひめたりし　花に乙女の手はふれてぬ。
もるゝ愛の譜—一片「正義の子」二片「神の守りて」三片「戰捷ち」
四片「凱歌早かれ」—乙女子の　念は胸にみだれけり

うたてなの風一しきり　散り殘りたる一片に
涙は宿りふるゝ手は　わなゝきつゝもせく胸に。
（葉片五步）「死にな給ひそ」聲細く　波うつ胸に血は燃えて
夜は黑幕におほはるゝ　此夜稻妻おそろしきかな。

○新帝國

神戸市元町一丁目　隼田知節

地の利人の和言はずもあれ　天の佑くるわがみ軍
向ふ處に敵はあらず　戰へば勝ち攻むれば取る。
スラブの夷討平らげ　茲に拓かん新帝國
日の御子の裔いや榮えて　日本民族とはに幸あれ。

○朝海

茨城縣土浦町東町中山方　津川正次

夜のつばさに海原の平和の浪を狂はしゝ、
まがつみ早も手を引きて夜こそやゝに明けて行く、
星影いつしかかくそひて沖べ黑ずむ島山を、
彩雲あけに彩れば香りは高き朝の潮。
笑みて舟出の父送る優しき女は海士の子か、
岩より岩に碎けては浪は希望に咽びつゝ、
涸れぬ生命の息を吸ひ斯て循りて血は赤し、
櫓の音にだに汚なき理想の歌は溢るゝを、
慰藉の光明身に浴びて偕も幸ある朝の舟子よ。

○見えずなり行くほどの影

磐城國双葉郡木戸村作山方　作山美子

彼の君故の年頃の　心づくしを數へつゝ
深くも秘めてしのぶれば　悲しくなりぬ我思。
うらぶれ出て年を經て　一人只泣く旅の子が
哀れ榮なき筆染めて　君にまゐらす戀の歌。
餘りさかしき世の中に　こは耻かしの野調よと
封其まゝに丸めては　振の袂に投げ入れつ。
熱き額を冷やさんと　夕の岸に立ち寄れば
小さき袂の紅絹裏を　こぼれて反古は落にけり。

清き水面に縷々として
搖らぎては又流れつゝ
つきせぬ恨み曳くが如
稍々に消え行く紅の色。

其の紅の褪め果てゝ
塵の汚れもなかるべし
書きたる文字の消えん時
もとの清淨にかへれ紙。

かくして海に出ても來よ
戀の魔風に帆破れたる
いでゝ沖行く船を見よ
夫れや我のる死の小船。

『悲しからずや其折を』
拾はるゝべく、擒らるべく
幸有るみ手に、死の神は
汝は岸邊へ、我は沖。

過しを忍び更に又
うるむ眼に眺むれば
來べき懊惱に胸抱きて
見えずなり行くほどの影。

〇面影

千葉縣山武郡成東町　吉原靜江女史

花木犀の香にゑひて
覺めてもすゞろ幻を
夢はいづこを逍りけむ
偲ぶあしたの手枕よ。

夕暗時を垣間見に
亂れをしらぬ胸にしも
ふと面影を戀ひそめつ
「わびしさ」をこそ悟りけれ。

扇骨木の籬冠木門
今、朝露にほの〴〵と
藁葺小さき君が家は
門の青柳けむるなり。

綠に萌ゆる若草の
蹈みて辿れば朝の風
やわらかき香を蹠に
わが衣手になびくかな。

〇初日の光

廣島市宇品町　寺一研子

鷄鳴きぬ、妾が枕邊近き鳥屋の內にて、
すはや、見すてん哉、暖かき床、
明け初めぬ、山は黑く、雲は白く、東の山の端より、
上れり、眞紅の大なる朝日、ゆる〳〵東の空に、
輝やき初めぬ、初日の光、妾が目も眩まんばかり、
いでや、若水くんで神に捧げ、
祈らなん、皇軍の向ふ所敵なかれと。

○荒れし社

杞伊東牟婁郡新宮町上熊野地　和貝しがらみ

何時の世に荒れは始めて　幾春と秋を經にけむ
草枯れて軒端は朽ちて　寒き日にそゝる其影。
その昔肌身清めて　澄む月に御階を嘗めつ
その脊子の病癒えよと　祈りにし妹もありつる。
そのかみよ戀知りそめし　少女子が雪の双手に
やは胸に溢るゝおもひ　いだきては拜みしと聞く。
くたちゆく人のこの世や　歸り花忌垣にさけど
逝く水の名なし川邊の　社朽ちて風も寂しや。

○久保内清子の君に別るゝ時

磐城　鈴木玉子

君が愁に我は泣き、　我欣びに君は笑み、
互に心うちあかし、　親しみあひし君と我、
あゝ慕はしき君は今、　あゝいと愛しき君は今、
ここを遙にあまざかる、　北のみ空にゆかんとす、
涙に曇るわが目には、　雲間の月もかげ消えぬ、
時雨るゝ袖の別れ路の、　空に戀しき雲見ずや、
相見る今の別れだに、　かばかり君の戀しきを、
別れて後やいかならむ、　されど嘆きそ嘆くまじ、
止むるもかひしあらざれば、　如何に別れはつらくとも、
いざやわかれんあゝさらば、　さらば君行け君ゆかば、
小田のみどりの中村を、　四季折々の歌にこめ、
空飛ぶ雁に傳へかし、　それを我身の樂しみと、
思ひかへして今日君に、　別るゝことの悲しさを、
一人心になぐさめん。

○日の出の歌

富山縣　小川すみ

まだ明けやらぬ東の　空にたなびく雲しろく
風に吹かれて飛ぶ鳥の　かた羽にうつる影紅し
やがて海ばら風なぎて　横雲いつか消え行けば
黃金の波をわかしつつ　うら／＼のぼる初日影
そこに消え行く夜のやみ　苫屋の烟たな引けば
光ゆたけくはらみつつ　こぎだす舟のま帆片帆
鷺のうなひのおり立ちて　樂しく遊ぶ水際には
そなれの松に宿しめて　のどけく鶴も名のるなり

○夕潮

伊勢　水野さえ子

落つる日のしばしたゆたふ　波の上くれなゐ深し
雲のいろがれまばゆく　水の面の彩にうつろふ。
暮れてゆく海原見れば　夕潮のわきてながるゝ
泡たちて躍りくるひて　しら波は片邊によせつ。
その波はさも似たりけり　牧の子が夕べ追ひゆく羊の群れに

○初日の影

上毛太田町　紫雲女史

來む夏、秋も知らるゝよ　大空青く澄み渡り
のどけきけさの初日影。　厩のさころも霞ほつれ
背戸にをろがむ賤の女が
つゝれ綿こそ貧しけれ。
胸歡樂のうつ汐に　聖恩のあつき大御代を

祝ふこゝろぞ豊かなる。

○友の墓

周防　猶　龍子

靜けき山の朝はあけて　荒れたる墓に露は白し
峯の松風塵を清め　谷のさゝやぎ氣を高うす
喧塵の世をぬけ出てつゝ　自然のたくみに惠まれつゝも
山守る君ぞあゝ墓はしき

○古里の別れ

埼玉縣　新藤けゐ

かなたに見ゆる里川の　橘の秋にさきくませ
まさきく坐せと云ひかはし
なさけも深きたらちねに　別れいでにし其の日はも
三年の昔とすぎはてゝ　夏を踊りし故郷や
めぐみの露は身にあまり　つきぬ別れのをしきかな
あすの我身は如何ならん　今宵一夜の枕こそ
たゞ古里の夢なれや

○農　夫

茨城縣　笹目こう子

夕日は山に入りはてゝ、くれなゐそむる雲の色、
空に月かげほの白く、鎭守の森は靜まりて。
鳥もねぐらへ急ぐとき、露おく道をたどりつゝ、
畠より歸る賤の男の、うたへるふしの面白や。
あゝその胸に思ひなく、あゝその心の清らけき、
そこに無限の樂みの、ひそむと見ませ都人。

○薄倖の處女

甲斐　秋山雅子

星、紫の光をはなち、松、颯々の樂をかなづ、
夜の神ひとり目さむる時、物凄きかな舞鶴城、
幾世榮枯の夢をつゝむ、落葉朽葉に掩はれし、
此處おん隈の岸に立ち、泣くは誰が子ぞ血や吐ける、
底ひは何れ暗黑の、闇より闇と知るかそも、
涙をはらふ其の面、あまりに若き姿かな、
救ひをたまへ助けよと、幾度神に祈りけん、
姿は消えて跡もなく、たゞ靜寂なり天と地、
たけり狂へる世の波に、たゞよはされしあまをとめ、
今大神の御手に抱かれ、心は安くねむるらむ、

○出陣せんとする人の許に

岩代國　菅野和子

瓊矛に成りし　大　八　洲　武をうけつぎて　三　千　年
民は命を　君に捧く　あとに殘れる　手弱女も
老や稚き　勞はらむ　征け〳〵男兒　波騷ぐ
「アムール」河を　打ち渉り　かざせる太刀の　神風に
醜のしこ草　躪かして　大　和　櫻　木　うつしてむ。」

○枯れ野

千葉縣　鵜澤水月

くれかゝりたる秋の野の、けしき如何と來て見れば、
はぎの錦はやれ果てゝ、まねく尾花の袖寒く、
蟲の聲さへしも枯れて、枯れ野の原と成りにけり、
思へばあはれ昨日まで、秋連れて浮れてし、
小女の群もありにしを、今朝は其れさへ見えぬなり、
變り安すきは浮世にて、移るは人の心ぞと、
かれて知れども亦更に、深きなげきに沈むかな、
あゝ何故に世の人は、唯だ麗しき方にのみ、
心ひかれて迷ふらん、つらき浮世の風吹けば、
花の面影いろあせて、老い行く身とは知らずして。

○待　春

富山縣　中村あや子

菫おぼゆるうなゐらが、早蕨なせる手を折りて、
いまいくつ寢ば春は來む、はるたち來なばわがよはひ、
六つならんと睦ましく、語らふ見ればわれさへに、
よるとし涙もうちわすれ、すみれ蕨にいそがれて、
春立つ日をぞまちわぶる。

○亡き妹　　豊前　笹波露子

すみれの花に春は去り野菊の花に秋ゆきて
渚を洗ふさゞ波も思出悲し涙川
窓の戸ほそに影さして菊の香冷たき夕より
まだ幸しらぬ妹は光も薄き床枕
薄き情の霞の風に山茶花黄菊散りてより
結ぶ血わけし黒髪の亂れて長き恨みかな
唇洩れし細き音に笑を殘して眠りけり
あわれ妹と呼べども答はなくて夢のごと
黄菊をおつる露の音あり

○松風　　靜岡縣　娟婦子

土手の松が枝風吹けば　眞如のしらべいや高く
夢に生れて夢に泣く　涙の子をば笑ふなる
淸き松風あゝ我れは　浮き世の罪の子なりしよ
ゆるせ松風我もまた　聖き汝が其の聲を
あはれ友としとことはに　歌はんものを松風よ

○機織歌　　陸前山縣　幾子

三年の昔、家を出てて、　未だ逢はざる夫を戀ひて、
ひたすら機を織るよ上布の、　雨降る昨日も雪降る今日も、
織るや終日梭の響きに、　つれて聞ゆる鄙歌の聲、
思ひ餘れば、手先も狂ふ、　一日逢ひたや我夫に。

○歳暮　　靜岡縣　名倉貞子

春は花見に日をくらし　夏はほたるに身をこがし
秋はもみぢにあこがれて　あはれ今年もくれぬるを。
ながめ見し花そのはなや　ほたるの影ももみぢ葉も
去年も今年もかはられど　かはるは人の身なるかな。
ながれてはやきあすか川　としの行瀬はよどみなく
よするしら浪いやましに　まさり行くこそ悲しけれ。
とめてとまらぬ年なれば　惜しむこゝろはあられども
なほをしまるゝ年のくれ　過ぎしむかしのしのばれて。

○送別　　神奈川縣　平本きよ子

朝な夕なに手をとりて、　共に學びし君と我。
あすは幾重か白雲の、　外に分るゝ事ぞうき。
さは去りながらますらをが、　國のかためと撰ばれて。
立ち行く今日のよろこびを、　いかで祝はであらるべき。
君は戰地へ我はこし、　よしや千里をへだつとも。
互に誓ひし言の葉は、　夢な忘れそつかの間も。
霜にやつれぬ常磐木の、　みさをの色にならひつゝ。
つとめはげみて行く末は、　雲井に高く名をあげよ。
日本男兒の身に帶ぶる、　さびなき太刀のま心に。
駒のはるびを引きしめて、　人に後れなやよ君よ。

○雲の詩　　千葉縣　時岡芳子

（一）

空に少しの雲もなく、　靑海原の如くにて、
東の丘に昇る日の、　影暖き朝ぼらけ、
かくも目出度天つ日の、　せめては一と日つゞけかし、
親しき友だち打連て、　花咲く野邊を彷徨はむ。

（二）

出れば變る空のさま、　黒雲四方を立ちこめて、
廣き御空に限もなく、　やがては雨を交へつゝ、
暗風いたく吹き荒む、　かくも遷れる天象に、
吾等はいたく潤へり、　花はこと〲散り失せぬ。

（三）

人の心の陰陽は、　彼の白雲に似たる哉、
惡湛へて笑ふとも、　其内心は計られず、
朝に眞を誓へども、　夕に變るそのさまは、
彼の白雲に似たる哉、　人の心の陰陽は。

○京に上りしなつかしき人を偲びて　東肥　池邊さだ子

青葉がくれにほとゝぎす、　鳴けよ涙もつくし潟、
世はありそみのいくかへり、　定めなききさの捨小舟、
何處をよろべか不知火の、　火かげ後ろにおく露の、
光りをそゆる夕螢。
夜半の嵐にたつた山、　みどりの衣に花の袖、
結ぶさんごの玉のひも、　とくろ事なき旅衣、
きぬらん人は白川の、　長き契りの友垣は、
三重四重七重八重櫻、　吹きし昔のあしたより、
しげる草葉の此日まで、　あつき思ひのさしも草、
さしも知らじな吾思、
あやめもわかぬ五月雨に、　ぬろゝもしげき袖の露、
あなしほらしな袖の露、　玉なす人の面影を、
うつせ江津湖の水莖よ、　阿蘇の高嶺の白雲と、
わき立ちのぼろ人の身を、　訊へきぼうの根ざし松、
いはほに朽ちぬ人の名を、

○珍らしき旅　熊本縣　池部さだ子

きぼうの山は遙かの空に、　夕日の影に照らされて、
飾ろ錦ぞ麗しき。
何處に宿をかり枕、　行くへ定めぬ旅人の、
おち行く方の道しるべ。
あたりの藪にひぐらしの、　鳴くなろ聲も哀れげに、
宿とふ風の一としきり。
吹く野の末に行きくれつ、　此處は何所かしら川の、
川上とほし阿蘇の山。
秋の旅路に行きくれて、　宿らん家もあらやまの、
紅葉しとれに月を見て、　千草枕に雁を聞く。

○戰地の新年　近江國　宇多文子

東雲破り勇ましく　天地に響く喇叭の音
茂る木の間に營舍見え　風にひらめく日章旗
數百萬の益良夫が　歌ふみ國の萬々歳
よろこび叫ぶ勝鬨に　露の敵兵露と消え
遼東の野に美はしく　うらうら昇る朝日影、

○女子文壇の發刊を祝して　新潟縣　安田清子

雪に名を得し御越路や　片山里の侘び住ひ
數ならぬ身も大君の　御世の惠に潤ひて
花の都に咲き出づろ　言の葉の花かざしつゝ
榮え行く御世と諸共に　進み行くこそ嬉しけれ

○春の歌　神戸　みぎは生

春の女神の歌組を　解き初めしよりさゝらゐの
谿の小流水ぬるみ　人の世に出ろ唄ゆろし。
軟草めだつその汀　綠の色は淺けれど
水にひたせろ其影の　ゆかしからずや若き色。
梅の小枝に咲く花は　うら淋しくも香や高く
歌よみ鳥の聲きよく　蘆笙の運びにたゆたはん。
詩人野邊に彷徨へば　空には謠ふ雲雀あり
野には少女の裙紅し　春の景色や詩なろらん。
筆洗ふべき流れには　花の一片情なく
胡蝶の夢を乘せて行く　行末遠き里の水。
若紫の朝霞　山を包みて匂ふ時
光に醉ひし蜜蜂の　宿と定めの花や何處。
靄立ち罩めて夕づゝの　光り少女の眼にも似て
朧ろの月は戀に惱む　その面影に似たらずや。
草木の色も新たなる　春こそ詩神の降りまして
琴奏てます時なれば　崇き調べを謠へ詩人。

○無情　京都　長尾靜秋

野邊に立出て見渡せば、　早や日は西に傾きて、

入相つぐる鐘の聲、　諸行無常と響くなり、
懐ひ起せば吾が友は、　三年の前の其昔、
共に手を取り睦まじく、　海べに野べにさまよひつ、
末の事まで語りしに、　聞くも哀れやいたはしや、
すぎにし春のやよひ頃、　人は花見て笑ふ時、
鳥は梢にうたふ時、　無情の風は吹き來り、
哀れや今は果敢なくも、　あの世の人となりにけり、
思へば去らぬ中々に、　あてなる花の色香にも、
ありし昔の忍ばれて、　追想の涙にこぼるゝよ。

○新　年

磐城國　鈴　木　紫　子

大和島根に年たちて、　今日新玉の初日かげ、
豐さか登る日の本の、　限りもあらぬ君が代を、
外面に出てゝ眺むれば、　門毎匂ふ松と竹、
軒毎なびく日の御旗、　開けゆく世の姿なり、
千代ふる松の梢には、　うれしや鶴も舞ひ遊ぶ、
波も靜の池の邊の、　いはほに龜も遊ぶなり、
老も若きもおしなべて、　遊べや遊べ樂もしく、
榮え行く世の初春を、　祝へや祝へ諸共に。

○戰國の元旦

横濱市　小　林　と　き

明けく治まりたる君が代の、　三十とせ餘り八の歳、
空いろ榮えて東天紅、　年の勝利男のいさましく、
輪飭しめし新桶に、　齡を延ふるわか水を、
いく井たる井に汲み取りて、　くぐる門松日の御旗。
皇軍捷ちぬ此冬は、　入東足る穗の千五百秋、
千座器戸に豐饒けくも、　五穀の香高う賑ひて、
父母御無事兄上は、　御勇健との戰信よ、
家內は齒固屠蘇の盃、　四海安すけき今朝の春。

○いさゝ川

越　後　五十嵐　富美子

一

茶の花つゞき家見えて、　流はゆるく水青く、
すみれ花咲く里川の、　土橋の上を牛ひきて
今し童の渡るなり。

二

一本柳のそがかげに、　すみれの花をかざしたる、
みめよき少女等ほゝゑみて、　岸の芝生にいこひつゝ、
語れるさまの愛らしや。

○手向の梅

加　賀　み　ど　り

ともに掬ひしいさゝ川　いつしか厚く氷りしも
流るゝ如く解け去りて　早や春たちぬ梅さきぬ
雙つの姿地に宿し　人の平和を囀きて
契りにけりな此春を　「月と花」とを歌にして
詩人は常に悲めど　生死何の意味かある
我れ唯つらし獨して　たゞ君をのみ思ふかな
去年の古枝を其まゝに　永き眠りの奧津城に
甲斐なき友の手向とはする

○琴の音

靜岡縣　名　倉　貫　子

かくほどに狂ひもゆくに、　かくほどに亂れもゆくに、
堅たむとやか弱き胸を、　田五作は鍬ふりかざす。
妙なるは誰かしらべそ、　鍬かざす腕にぶりて、
田五作は何に醉ひしや、　うなだれぬ琴の色音に。

○新躰詩

鳥取市　上　山　千　重　子

新星淡くきらめきて　葉末を渡るそよ風に
征露の兄の愛てませし　庭の山茶花ひら〳〵と
入相つぐる鐘の音に　深き恨やこもるらん
散にし花に涙あり　あはれ悲しき告示かも
我父母すでに老いませり　兄君いかにあゝいかに

○迎春の詞

埼玉縣 伊東禮子

緑茂れる門松も、千代萬代を祝ふなり、
園生の梅も咲き初めて、今日の喜あらはしぬ、
谷間を出てし鶯も、いとうれしげに囀りつ、
少女童と打ちつどひ、治まる御代を歌ふなり、
かくも目出度初春を、迎ふる今日こそ樂しけれ。

○春の野

千葉縣 小川武子

春風そよと吹きくれば、いづこの里も春たちて、
空うらゝかにうち霞、いとも長閑けき春はきぬ。
見渡す限り緑にて、春の女神が乘りませる、
菫のはなの薫りあひ、春の至らぬ隈もなし。
天樂うたふ小雲雀の、聲や雲井のかなたなる、
すみれたんぽゝ菜の花に、舞ふや胡蝶の羽かろし。
里の少女の若菜摘む、其うたふしの面白や、
散歩に出てし男のわらは、征露唱歌の男ましや。
名殘はつきぬ春の野べ、さらば胡蝶よ春風よ、
云へば胡蝶も春風も、名殘をしみて跡を追ふ。

○夕ぐれ

埼玉縣 晃子

牛を追ひつゝ只ひとり、里の小川の夕ぐれを、
草葉の露をふみわけて、歸る少女の後影、
けむる柳の間より、霞みて昇る月一つ。

○勇士の門出

沼津町 平田俊子

桐の一葉の散り初めて　音なくそゝく秋の雨
重き病になやみいる　目だにも見えぬ我母よ
今日を此の身のいでたゝば　如何に其の日を暮します
身寄りもあらぬ老の身の　明日は誰にかすがります
されど御おもは凛として　我が方向きて手を握り
君に忠義を盡せよと　己れの身をもかへりみず
はげましたまふ御心に　涙はらひて門出しつ
又あふときのうれしさを　鎭守の神に祈りけり

○懷の裡

名古屋市 戸田敏子

わがひとすじのおもひをば　心のそこにひめひめて
永劫にかたらじ君戀ふと　いま語りなば洩しなば
君がいかりをいかにせん　思ふ心はいつとても
かはらんことのあらざれば

○新年

長野市 飯塚ぎを子

年たちかへる此あした、昇るあさひもうらゝかに、
ちとせを祝ふまつたけの、みどりの色もいやふかし、
戸毎にたてる日のみはた、まばゆき迄にてりわたり、
いとかしこくも大君の、みいづの風になびくなり、
大路小路のわかちなく、羽子つく音や歌のこゑ、
年賀する人遊ぶ子ら、我れ劣らじときかざりて、
常にわびしき細道も、いと賑敷くなりゆきて、
老も若きもうちむれて、皆はれぎしてもろともに、
とそくみかはし樂げに、治まる御代を祝ふなり。

○露いのち

我孫子 中村由

征衣の袖を振り立てゝ、父は健氣に出征たれど、
故郷思ふその目には、宿れる露のなからんか。
われは他郷の旅にあり、殘るは獨り母の君、
千よろづ思ふその目には、宿れる露のなからんか。
われは空飛ぶ雁なれや、父に母にも別れ來し、
二親思ふこの目には、あやしきものゝ宿るなる。
あはれ今こそかくしてぞ、互に思ひをやりつれど、
年の老いゆくその末は、三人が命運如何になるらん。

○文士

上總 翠溪女史

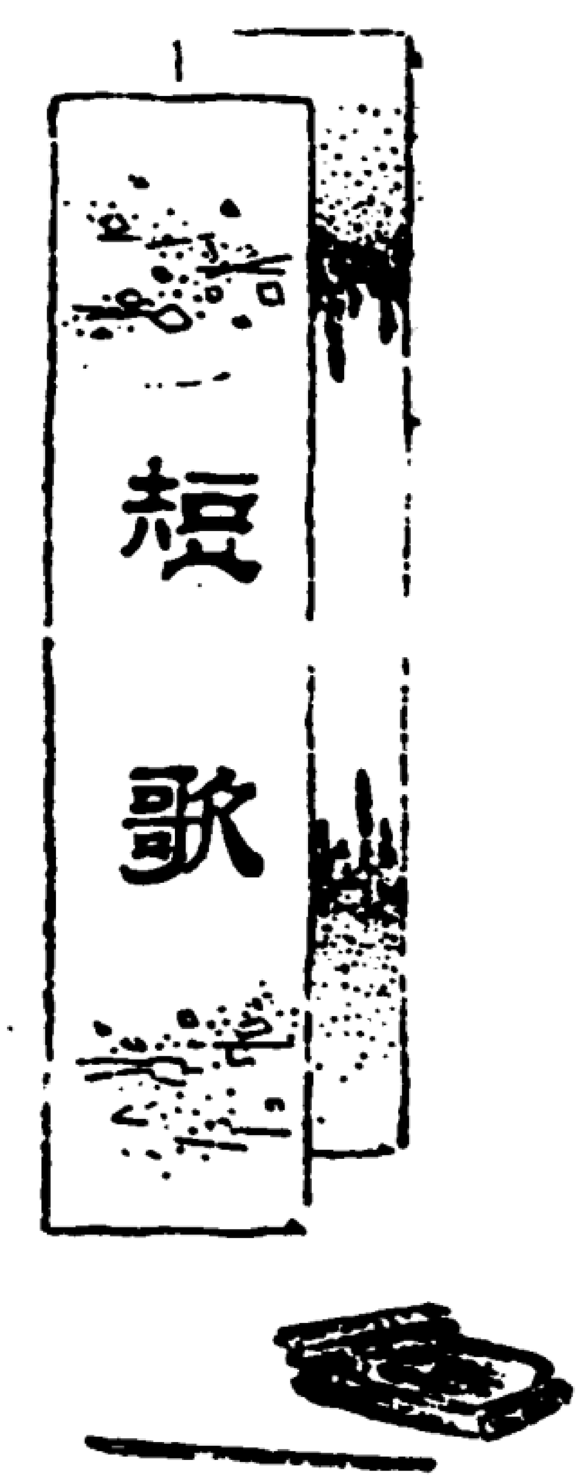
ながれもゆるき里川の、
はなれつあひつ菜の花の、
そよとふきくる春風に、
歌鮮とりてゆく人の、
あかき桃咲くをかのへに、
犬のとほぼゑ雞のこゑ、
岸のたんぼゝほゝ笑みて、
蔭にかくれぬ蝶々は。
小歌のふしもおもしろく、
家はいつこと見かへれば。
小きわら屋のほの見えて、
聞ゆるかたやそれならん。

○あたらしき墓

京都府　中辻やえの

卒塔婆の姿あたらしく
高くもりたるおくつきは
白き位牌のそが面に
善覺春通信士とぞ
幼なき男の子脊負ひつゝ
いそ〳〵あゆむ女あり
涙ながらに手をあはせ
手向くる花の一枝に
墓の主なる其の人の
あはれ泉のこゑばかり
あたりは暗くなり行きて
夕ぐれつぐる鐘の音は
しら張の影あざやかに
そもたが眠る床ならむ
そめたる文字の跡見れば
いと悲しくも讀まれたる
やさしき少女の手を取りつ
やがて墓前にひざまづき
南無阿彌陀佛と唱へつゝ
さゝぐる水の一つぎに
答はなくて答ふるは
あはれ松ふくおとばかり
雨さへ今はふりそめぬ
諸行無常とひゞきつゝ





佐々木信綱先生選

天

○ちりの世もしばし神代の心地して
四方清らけき此朝かな

越後國古志郡前島村室橋關松方　中村まつ子

（評）清くほがらかに明けゆく年のあしたには、げに人皆慶の思ひも忘れつべし。

地

○なつかしき君凱旋の夢さめて

磐城國双葉郡木戸村作山方　作山美子

物思ふ夜半を雁ひくう鳴く

(評) 遠く海をへだてたる征人の野營、夢を吹く夜風、いかにつめたからむ。

人

入江の秋　茨城縣水戸高等女學校　萩谷ちよ

枯れあしの汀の小ぶね人なくて
　せきれい一つ秋かぜに鳴く

(評) まさに一幅の好畫圖

秀逸

漁村の冬　麹町山元町壹丁目一　高橋ゆかり女

漁火の影二つ三つ見え初めて
　松原寒う時雨ふるなり

◎　京都市三條北裏白川東入上る鈴木愛方　松永幸子

戸に凭つて旅の春思ふ夕ぐれを
　國境の山は雪催ひする

冬の歌　京都市寺の内通大宮西　三の宮つゆ子

山鳩の羽たゝくなへに樫の實の
　こぼれてさむき藁ふきの庭

四句原作「おちては走しろ」

◎　越後中蒲原郡嘉瀬村　五十嵐富美子

ひしり一人經よみゐます里寺の
　風なき夕べ椿花散る

夕雲　つくし

水やせて水には華の影やせて
　夕雲さむし秋の大川

虫の音　千葉縣山武郡千代田　文枝

柴賣りて牛引きかへる星月夜
　木枯さむき霜枯ののべ

四句原作「虫の音しげき」

◎　伊豆國湯ヶ島局區市山　古見風子

歸ります秋のあるじの衣ずれか
　蘆の葉渡る湖の夕風

◎　釧路町大字米町六拾四番地　玉木よし子

のぼり行く馬子の鄙歌たそがれて
　山路しづけき梅の一本

◎　下總國印旛郡富里村根本名　小高清女

麥やせし砂地畠のくろの上に
　ひと本梅の花まばらなり

○ 廣島市宇品町　寺一研子
和らぎの羽ある神の御引かせる
　天の御征矢に惡魔たをれぬ

○ 稲刈　名古屋市西魚町二丁目淺野方　戸田敏子
人はみな垂穂かるべく出て行きて
　十戸の小村ひる靜かなり

○ 澎湖島　若葉女史
國の爲め兄は戰に出て行きて
　われ只一人小田に稲刈る
四句原作「妹一人」

○ 磐城双葉　鈴木たま子
うら／＼と登る初日ををろがみて
　今朝幸多き年を迎へぬ

秋風　高岡市末廣町三十三番地　長谷川吉江
荷馬ゆきて旅人ゆきてゆふ日さす
　松の下みちあきかぜぞ吹く

○ 高岡市末廣町三三木津方　小川すみ
南窓に繪の具解く君いと若し
　紅梅匂ふ春の夕暮

○ 磐城國双葉郡木戸村下小塙　作山よし子
罪も無く夢に微笑む乳兒抱きて
　軍の夫をしのぶ夜半かな

滿洲冬營軍人を思ひて　横濱市淺間町五百九十五番地中島方　小林とき
願くは神よまもりませしべりあに
　いゆきあたうつもの丶夫の身を

出征軍人　名古屋市西魚町淺野方　戸田敏子
放たじとすがるわが子を振りすて丶
　出行く父の心をそおもふ

○ 白妙に雪の積れる此夜頃釜の湯たて丶友をまつかな　石見すみれ

萩　うらぶれの身をなげきつ丶さまよひし芦川堤萩が花ちる　甲斐市川の里　秋山雅子

戰地の新年　新玉の年のはじめを祝ふ今日皇旗輝く遼東の春　熊本縣　小山まつ子

姫百合　山住のいほりの軒に程ちかくひともとにほふ姫百合の花　名古屋市　戸田敏子

祝女子文壇第壹號發行　新らしき文の大道ひらかれぬ祝ひ歩めや學べ同胞　熊本縣　小山まつ子

○ いたづきに妹は惱むとき丶しより露營の夢の結ばれぬかな　澎湖島馬公城内　若葉女史

出征の夫を思ふ　郵便のこゑきくたびに思ひいづる西伯利亞ゐます我せいかにと　山口縣柳井津　友重あい子

○ 日は暮れてこさめそぼふる利根の面煙ぶる蘆間に五位鷺の鳴く　上毛太田町　渡邊紫雲

○ 夢なるかあらず二年々壯く戀の甘酒香ぐはしかりき　東京　上田蝶子

○　東京　上田蝶子
誰によりて都に學ぶ身となりし母の奥津城秋寒き風

軍人の妻　福島　松原孝子
青よ妹と睦び團居し樂はあとなき夢となげかるらん

女子文壇發行を祝して　長野市　飯塚ぎん子
ふみのその花の色香は大御代のみめぐみの風にかをりそめけり
下句原作「みいつの風にうちかをりけり」

○　磐城双葉　鈴木うばら
枯草の音さや／＼と打ちなびく秋野十里は虫の音もなき

○　大阪　山田稻子
蝶と呼び花とうたひて少女子か牛れむる野に若菜つみけり

○　近江　宇多文子
賤か軒風にひらめく日の丸にさつと照り添ふ朝日美はし

題知らず　伊豫國　大導寺歌子
箏の音にしはしたゝずむ垣のもと木犀かをる薄月夜かな

冬の月　伊豫　高橋かめよ
天下白く光るは霜か雪か凄くすみたる冬の夜の月

女子文壇の發行を祝いて　栃木縣　齋藤秀子
大御代の光をうけて天地といよゝ榮えん言の葉の花

新年　肥後國　池部さだ子
醉ひし人笑む人綴き引綴き門松の下潜り行くかな

○　新潟縣　安田清子
なか／＼に待ちつゝ更かす秋の夜はことに長くも思はるゝかな

題知らず　北總我孫子　中村由
白き百合手をりてかくて鶴にのり天の女神に捧けまつりぬ

新年の初夢　仝　仝人
美しき御船にのりてほゝ笑めは岸をはなれて島をめぐりゆく

鉦　千葉縣　靜江女史
手にとれば思ふまゝにぞかゝれける己が心をふてやしるらん

○　秋田縣　きみ代子
弔ひの母の御墓に立ち寄れは鐘の音さむき木枯の風

下句原作「かたぶく月に鐘の音聞く」

○　伊勢　水野さえ子
君が征く門出の歌と强ひられて奏でそめけり六段の曲

孀旅暮秋　陸前國　山縣義子
とく歸り羽織したてゝまゐらせん君まつらんか寒き此の夜を

冬戀　若狹國　瀧本なみ子
夜もすがら降りにし雪のそれよりも積るは胸の思ひなりけり

○　磐城國　作山美子
「昔々」語りし乳母がうつし身にひとりたゞ泣く月のおばしま

○　仝　仝人
さま／＼に思ひまどひて惑はされてあはれ此春胸やすからぬ

○　越後國　内藤ゆき子
この夕くれゆく空やただならぬ雲の行へに思亂るゝ

○　越後　内藤ゆき子
詩の神の尊きやかたかしこならむ春の末野の紫の雲

○　筑前　花田うらの
行けど行けど人里遠き枯野原夕鐘やみて雪ふりしきる

○　大坂北區　高木さよ
世をわびて思ひの窓の夕ぐれを落葉さぐりて與作ほゝゑむ

○　下總國　小島よし子
朝まだき雪の山々見わたせば木より木へと烏飛ぶなり

水鳥　千葉縣　森田いし子
津の國のこやの池水氷るらしうきれの鴫の立ちさわぐなり

巖上松　上總國　藤田誠子
苔むせる巖の上の老松はゆるがぬ國の姿なりけり

○　神戸市　隼田知節
柏手に夜はあけそめて產土神のもりのほつ枝に初からす鳴く

殘菊　京都市　淺野美代
入千草の枯れにし野邊も外にして霜に色そふしらぎくの花

冬の月　仝　仝人
風寒き夕べの野邊に來て見れば雪かとまがふ月のかげかな

元旦　韓國平澤　野口辰子
白梅の花に香りて初日影治まる空に鶴は舞ふなり

田家秋風　千葉縣　越川なを子
村雀ゆくへみたれて小山田の軒のなるこに秋風そ吹く

月前別離　甲府市　久保田安子
今一つ受けよ別れの杯にやどらむ月をはなむけにせむ

野春雨　甲斐　望月とし子
少女子がおきわすれたる籠の上に幾日かそゝぐ野邊の春雨

アメリカなる友を慕ひて　山梨縣　入田たか子
つれ〳〵に今宵も一人つれなしや友は二千里アメリカの空

○　仝　松崎愛美子
迷ひこし嵯峨野の末の片ほとり白梅にほふ春の夜の月

○　仝　小田富子
かご二つ山路にかゝる夕ぐれをひまなくかゝる春の淡雪

○　仝　久保田春江
日すがらの歌にくるひてつかれてや胡蝶眠れり花の若草

○　仝　松田春子
梅と月それにかも似てとこしへに二人の戀の春安かれな

山家時雨　千葉縣　鵜澤水月
炭がまの烟りの末も打なびき時雨降るなり小野の山里

海邊雪　甲府市　上野蔦子
島山を浪間に積る雪となりて藍よりも濃き海の色哉

庭暮春　甲府市　辻藤子
人も來ず春逝く庭の池水にこぼれて淋し山吹のはな

戀　甲府市　前田文子
琴の音のうれしとばかり聞きし身のいつその人を戀ひそめにけん

晩春山寺　甲府市　中村榮子
山寺に暮れゆく春を惜みをれば落花ふみつゝ僧かへりきぬ

新年の鶴　千葉縣　鵜澤水月
芦田鶴のことほぐ聲の聞ゆなり年立かへる今朝の長閑さ

○　豐前國　征波靈子
病みませる母なぐさめて眺めやる花はしをれて秋の雨降る
二三句原作「母は今し待ちまさむ」

擣衣　福岡市　高松秀代
さえわたる霜夜の風に月更けて衣うつ音のそゞろ身にしむ
下句原作「衣してうつ音の身にしむ」

春興　神戸市　上田輝子
野に山に遊びくらしてたそがれの近くなるをも覺えざりけり

雁　磐城國　鹿島君子
ともどもに逢て話しのつきぬ夜は月に戀しく雁の聲する

歳暮　札幌　小山かく子
松が枝を手にして販る翁ありたちこゝむ春を祝はむとにや
四句原作「明けなむ春を」

春來る　下谷區　太田樂子
賤が屋も軒端の梅の咲そめて光り長閑けき春は來にけり

露營　上總　文枝女史
益良夫が銃を枕のうたゝねも故郷のゆめや結ばるゝらん

進軍　仝　仝　人
日のみはた烟の中にほの見えて進むすがたのいさましきかな

野分　越後長岡　杉本しん
ほゝづきの色つく庭に野分たちて守る子かなしみ夜をいねづあり

○　伊豆國　古見崎蛉子
拾ひ來て机にのせし梧の葉の初霜とけぬ詩や書かなむ

○　兵庫縣　山本菊子
いづくにもあしき病のありときく遠き旅路のわが兄いかに

初春の野べ　千葉縣　小川武子
里はまだ霞の衣うすくして猶ほ袖さむき初春の野べ

本誌を祝ふ　千葉縣　小川梅子
武蔵野に咲きそめにける此花の盡きぬ香を千代に止めよ

初日　埼玉縣　伊東禮子
曇りなき御代の光を新玉の年の初日に先仰くかな

折にふれて　高崎市　堤愛子

霽空になく兒負ひつゝ若き男の人の門邊に立てる憐れさ
若菜　千葉縣　吳　たけ子
若菜つむ乙女が袖に霞たちひな唄しげき春の野邊哉
櫻　仝　仝　人
妹の手植し櫻花咲きて今年の春の思出しげき
下句原作「思出しげきわが身哉」
折にふれて　千葉縣　小高　清子
ひと村の鶏かふ家のやれ垣に日はうすうして梅の花ちる
梅交松　上　總　翠　溪　女　史
梅が香を松が枝毎にとゝめつゝ千代まで匂へこゝの花園
兄を思ひて　神奈川縣　苅　谷　靜　子
み軍に召されて行きし兄君もけふの初日を祝ひたるらむ
○　浦和女學校　松　谷　み　ち　子
萩の枝をくゝりし繩の朽ちはてゝ雨にさびしき夕暮の庭
下句原作「庭の夕べを氷雨ふり來ぬ」
霞　茨城縣　藤　田　正　雄
畫だくみの筆なりかれしたゆたひに濱の松原かすみ晴れ行く
戀人　埼玉縣　新　藤　け　ゑ
濱千鳥あとはいつしかたえたれど忍ふこゝろはいかでたゆべき
○　上　毛　武　藤　靜　枝　子
亡き母の奥津城どころ事とへはさしあへぬとに松虫のなく
鹿　沼津町　平　田　俊　子
秋もやゝ更行野路の枯尾花わけつゝ鹿の啼もかなしき
軍國の新年　京都府　中　辻　や　え　の
あらたまの年たちかへるあしたにはひなも都も萬歳のこゑ
霧　周防山口　堀　　龍　子
坂の上に送りし母の影見えて霧洩るゝ聲のなつかしきかな
萩　福岡市　桐　山　圭　枝
置く露にさ枝重げにたわめどもひとしほ花の色まさる萩
○　豐後國　大　島　菊　子
君忍ぶ愁に堪へて吹く笛の調べ亂るゝ夕まぐれかな

行く秋　島根縣　小　泉　花　子
たゆたひてまたも見かへる君が家更け行く月に雁鳴きわたる
秋の夕暮　名古屋　戶　田　敏　子
たび僧の影うすれ行く薄墨の夕べはら〳〵散る木の葉かな
陣營の月　仝　仝　人
いかはかりたのしかるらんあだうちて占しとりての春の夜の月
初旬原作「心より」
初雪　逸　名
今更に小松植てと思ふかな今朝めづらしき雪のながめに
落葉　岐阜縣　大野　まさを子
夕つく日山のはとほくかげおちて背戶の小川に紅葉散るなり
枯野　仝　仝　人
みし秋の花のすかたはゆめなれや霜にかれ伏す野邊の八千草
結句原作「野邊のあさちふ」
祝女子文壇の發刊　鳥取市　上　山　千　重　子
年のはじめうぶ聲あげしまなむすめそのおひさきの偲ばるゝかな
○　仝　仝　人
つく鞠の外るゝ待ちてまもりゐし小猫眠れる小春日の椽
二句以下原作「外れるをまつかやゝしばしまもる小猫のいつか眠れる」
○　越　後　松　永　し　げ
弓張の月かげうすき曉を聲もさむげく雁のなきゆく
○　茨城縣　矢　口　豐　子
たどり行く秋の山路の夕暮に妻こふ鹿の聲ぞ身に染む
○　仝　仝　人
野の中のたふれかゝれる石佛誰か手向けむ萩の一枝
梅　長野縣　恩　田　と　し　子
春のきてほころびそめし梅が枝にやさしく唱ふ鶯のこゑ
春の夕暮　越　後　五十嵐　須加子
歸り行馬士のひな唄かすかなり桃さく野路の春の夕くれ
仝　仝　仝　人
浮へたる里の子去りてさゝ舟の流るゝ小川今暮れんとす

元日　静岡縣　名倉貢子
大君の御園の梅も開くらむとしたつ今朝の初日子の影

兄弟　仝　人
二人のみ世にのこされし同胞のなすべきことの多くあるかな

歳暮　神戸　中村菊子
故郷のまとゐにもれて淋しくも都におくる年のくれかな

折にふれて　岩代國　菅野和子
ものゝふの恨みの涙凍るらむ黄金山頭雪となりぬる
二三句原作「恨み涙や凍りけむ」

秋雨　伊豫國　土居優子
歌思ふ小窓のあたり黄昏て夕べ淋しく秋雨のふる

菊　仝　人
うつろひしまがきの菊に霜おきて星かげ寒し暁の空
三句原作「霜おりて」

折にふれて　越後長岡　近藤信子
後の世のちとせもゝとせ何かあらむ今の世君とかたり終らば

窓月　澄子
秋の夜のねざめがちにもうれしきは窓もる月の光なりけり

出征軍人を送りて　仝　人
國のため君の爲にとますらをが出て立つ樣のいさましきかな

○　和歌山縣　鈴木かづゑ
太田川蘆べにそよぐ秋風の身にしむ夕べかりのこゑきく

陣地よりの手紙　紀伊國　櫨の村
かりがねの鳴く音も消えてあばらやの月さす窓に夫の手紙とく

○　越後乙吉　丸山深芳
去にし年君が歌ひしその歌の繰りかいさるゝ月夜なりけり
三四句原作「彼の唄を繰りかへしたき」

○　越後乙吉　丸山清子
思秘めて流しゝ椿亦よせぬ我立つ汀波荒らくして

○　越後　石川紅雨女史
嘲は呪は人の世のしばし我と君とは歌に笑まばや

日本、　鳥取　濱野桂子
戦時の世あゝ戦時の世さわれども富士の高根に旭日さし昇る

新年　神戸市　小西ふさ
さしのぼるはつ日のかげののどかにてくもりなき世の春はきにけり

春の歌の中に　千葉縣　時岡よし子
花にねむる蝴蝶を給にとかきてみむあまりやさしく見ゆる姿に

○　伊豆國　古見梅雨子
川に沿ひて山本めぐる堤路木枯さむく落葉みだるゝ
下句原作「夕楢の葉馬の荷に散る」

○　紀伊　和貝しがらみ
年を壽ぐ歌思ひつゝ妹と二人初日をろがむ梅の花かげ
四句原作「朝日おろがむ」

春夢　越後長岡　加藤梅子
春の夜の夢の浮橋さく花にかけでそみつる三よしのゝ山

妹の病の爲ながくも學校休み居ることを聞きて　越後　石原まさの
とじこめて一人ふす身のいかばかりさびしかるらむ秋の日にして
下句原作「さびしきものを此秋の日に」

新年　香川縣　藤井靜子
新玉の年立ちかへる日出度さを雀も軒にことほぎうたふ
結句原作「物語るなり」

初春　武蔵國　兒寺都女子
風の音は長閑になりぬ雪きえぬ春を知せて梅の花咲く

名所春　千葉　ゆきえ子
濱の上に眠る鷗ののどかにて天の橋立春のあけぼの

草庵の新年　名古屋　戸田敏子
草ふかく人も訪ひ來ぬいほりにも先づかゞやきて初日のぼれり

斥候　千葉縣　文枝
かけり行く斥候一騎又一騎吹雪はげしき西伯利亞ののべ



俳句

（亂題）

巖谷小波先生選

天

夕陽や鯨とりまく舟二十　伊豆國田方郡上狩野村市山　古見梅雨子

地

白梅や旭冷たき銀屛風　石見國那賀郡波子村　千代延俊子

人

クリスマス束髮のピン落しけり　埼玉縣南埼玉郡出羽村　野口花子



秀逸

團欒して屠蘇くみかはす初日哉　磐城　鈴木玉子

病兵のねだいに聞くや秋の雨　紀伊　鈴木數枝
門松にたれて國旗の大なる　靜岡　名倉貫子
遣羽子や暫し吳越の姉妹　陸前　山形よし子
白菊や光をゆづる朝の月　下總　小島よし子
元日や水浮く鳥も東むき　上總　鵜澤水月
菊さきて悲しき秋を忘れけり　仝　仝人
笹鳴きや日の斜めなる川向ひ　澎湖島　若葉女史
鎖したる古刹の門や冬の月　仝　仝人
松原に馬子うた淋し冬の月　上野　武藤靜枝
突きはづす手鞠追ひ行く小猫哉　釧路　玉木よし子
物古りし石燈籠や霜の花　越後　近藤信子
いぼ稻荷旃檀の木の冬されぬ　埼玉　野口惠津子
朝霜をふんで乙女の神參り　仝　渡邊留子
白萩の小枝手折りて楊枝かな　伊豆　古見蜻蛉子
尊さは神代のまゝぞ初日出　京橋　岡田つる子
舞姬の袂かへすや春の風　伊豆　古見風子
大空の星に年たつ光りかな　石見　千代延瑛子
歲旦や百萬の甍日の御旗　仝　青柳すみれ
白梅の古木ふさはし神の庭　仝　千代延靜子
かるた其の夜美はしの君が齒を痛み　陸前　山形よし子
たぐひなく咲きぶりゆかし國の花　栃木　齋藤季子
萬歲や漁村を出でゝ吹かれ行く　神戶　みぎわ
元日は只だ靜かなり山の家　仝　仝人
雲あるも霞と申せ初日の出　磐城　鈴木うばら
煙筒多き町賑ふや松かざり　仝　鈴木紫子

梢高く初空寒き歩哨かな　千葉　吳たけ子
貞節の心を赤き紅葉かな　豐後　大島菊子
小春日やぶら／＼須磨の海　常陸　前島恵子
吹くや春風障子に鳥の影チラリ　千葉　吳いち子
とつて見て不興顔なり澁つかき　兵庫　山本菊子
古戰塲秋深ふして魂のとぶ　紀伊　鈴木數枝
春の風リボンひら／＼幼稚園　京都　中辻やゑの
鶯の初音に今朝は霞みけり　千葉　小川武子
元旦や物賣る聲の新らしき　仝　仝人
此村に長壽自慢の翁かな　秋田　きく代子

○春五句　春霞

謹んで御慶申あぐる三太夫
船うたや燈臺近き夜明哉
雜煮祝ふ兒等五六人家の富
元朝や藪鶯もだいじなり
松の内見馴れし妻の新らしき



▲投書家諸君へ一言▼

第二號（二月一日發行）原稿〆切一月五日迄、第三號（三月一日發行）原稿〆切二月三日迄に奮て投稿歡迎す

▲嚴守すべき左の投書規定を必一讀あれ

●投書は各欄とも決して政治的時事論に涉るべからざること、●用紙は規定の紙に限る●投書は一行廿四字詰一枚廿一行に認むべし但し句點も一字に數ふべし、●投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す●各種の投書は必ず別に認むべし●封筒には『女子文壇原稿』の文字を記すべし●投書の中には他の用事の文句を記すべからず●投書には各自句點を施すべし、圈點は一切施すを禁ず●投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし●投書は一切返附せず●此規定に背く原稿は一切沒收す●投書は不足、未納税は一切受取らざるべし●投書丈け取纒郵送するときは開封にして差出せば廿匁迄二錢なり

▲寫眞寄贈＝各地女學校長及教頭を始め卒業生又は教育上參考となる寫眞寄贈あれ歡迎して寫眞版に印刷して紹介すべし

▲其他の事項は毎號の記事にて知らるべし



編輯たより

一 記者

▲光榮ある明治三十八年目の新年は、其の双腕に幾多の希望を捧げて來り申候、記者は諸姉が、此新年の尋常一様の新年にあらざることを記臆せられんことを希望すると同時に、此の多幸多福なる新年に遭遇せられたる諸姉の栄を想ひ、責任の大なることを感得せられんことを祈り申候。

▲記者は此の有望なる新年の第一日に於て滿天下の姉妹諸子と、此に「女子文壇」なる機關誌上に相見え、新時代の智識を研き、新時代の思想を鬪はし、新時代の趣味を養ふべき好箇の機會を作り得たるを悦ぶ者に御坐候。抑も文藝の事は一國の汚隆に關するの一大事にして、國民の品性を陶治し、筆格を發成する上に於て、一日も缺くべからざる喫緊の件に有之候へば、輕視すべからざるは勿論の事に御坐候。滿天下の姉妹諸子よ、希くば來つて共に理想の陸に憩ひ、趣味の美菓を摘み、併せて現實社會に處るべき道を講ぜられん事を。

▲本誌第一號は創立やら年末匆々の際に當りて編輯に從事したるを以て、思ふ事百分の一をも遂ぐることを能はず、姉妹諸子の期望に背くこと定めて頗ぶる多からんと存じ候。記者之を謝すると仝時に、第二號以下の誌上に於て、記者の抱負の奈邊にあるかを、稍々看取せられんことを希望いたし候。

▲名家諸先生の玉稿にして、本號に載せられざるもの數十篇、就中左の諸家の如きは、筆硯若くば業務多忙の際なるにも拘はらず、本誌の爲めに多大の同情を寄せられ、椽大の筆を揮ふて玉稿を惠まれたるものにして、記者は本號に之を登載すること能はざりしを憾むと同時に、深く諸家の御高志を謝し、併て以て次號の紙上を飾るの榮を得たるを謝し申候。

月　香	久保天隨君
和樂なる家庭	菅綠蔭君
舞　靴	松本信夫君
姑姉の心得	SK生君
湘南の春	竹貫直人君
拿翁の除世貧に與ふる書牘	川﨑默堂君
女子文藝論	小林雨峰君
婦人の正義	松井柏軒君
儒敎的倫理の一節	岸上質軒君

▲姉妹諸子の寄稿も亦此と同じく數千通の多きに及び、登載し得る限は例號よりも頁數を增加登載したるも、已むなく割愛して次號に讓りたるもの大半、記者諸子の意氣を多とすると同時に、益奮勵して佳作を投稿あらんことを希望いたし候。

▲殊に小說の未完なるもの、投稿規定に違反せるものは、金玉の文字と雖も、已むなく登載を見合せたるもの鮮からず、記者は諸子が、嚴密に此等規定を守られんことを希望いたし候。



▲卷頭に挿入せる三宅克巳氏の【水彩畫】は月々の景象を順次請ふて揭載するものにして、同氏が本誌のために殊に腕を揮へる密畫は石版數遍刷の逸品、世間流布のものとは、自から撰を異にしたる嶄新趣向のものと信じ候、一年間の分を切取り保存して水彩畫帖を作られなば、誠に座右の好師友、好裝飾たらん。

▲卷頭の【肖像】は選評諸家にして、諸子は居ながらにして良師の風采に接せらるゝの便あるべく、額面に仕立てゝ座邊に飾るも妙と存じ候。

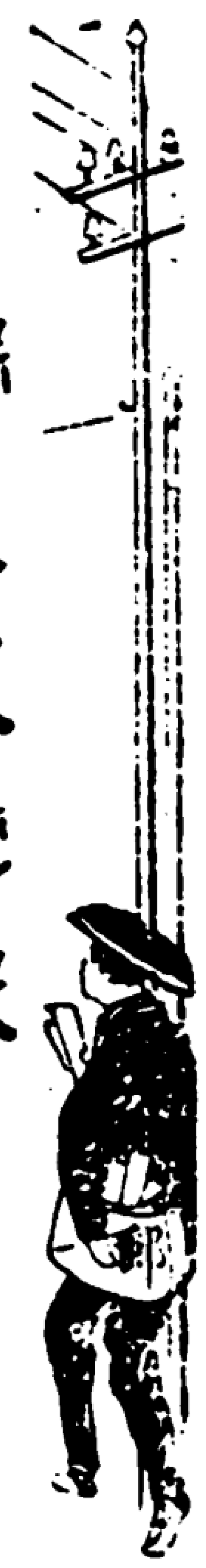
▲次號よりは【ハガキ文】てふ趣味ある一欄を設けて簡短なる美文類を募り、兼て【誌友倶樂部】なる壇を設きて、諸子が意見を鬪はし主張を逑べ、交際を求むるの便となすべければ、本誌に對する希望、質問(端書に限る)其他あらゆる氣燄を吐くに尤も都合よかるべくと信じ候、投稿規定を第一に熟讀のうへ、盛んに投ぜられんことを切望いたし候。

▲是と同様に募集の【圖畫】も偏に諸子の妙案に待つところに候へば、此れ亦規定一覽の上盛んに優美なる筆を揮はれんことを懇望にたへず候

▲短篇小說の【天、地、人】には揷畫を挿入すべき筈なりしを、匆々の際其意を果さゞりしは遺憾に候へ共、次號より適宜其方針に從ふべく候。

▲記者に於て【新刊書類】は及ぶかぎり叮嚀に讀了し、姉妹諸子のために有益と信じたるものは次號より紹介の勞を取るべく候。記者は刊行者の側に向つて、有益書類の寄贈を切望するものに御座候。

▲希望は尙山の如く、姉妹諸子に開陳すべき志は多々有之候へども、先此にて擱筆致候匆々。



婦人界彙報

故らに報ずべきほどの事件は無之候。唯左の數件は姉妹諸子の活動として、やゝ注目すべきものならんと信じ候。

▲愛國婦人會の地方遊説　東京の婦國婦人會にては軍人遺族救護資金を募集の目的にて全國に遊説する事となり第一に奥村五百子女史が去冬十日東京出發關西九洲地方へ赴き其他は部署を分ちて續々出發の筈なるが、猶同會にて新に組織せし活動寫眞隊も同樣地方を巡廻する企畫なりと

▲本郷の婦人會　東京市本郷區の軍人慰問會は約七十人の出征者の家族を保護しつゝあり、全區にて六百九十五名の出征者はあれど大方富有の人にて保護を受けつゝあるは根津附近の人なりと云ふ。因に記す同會は場處がらとて學者の夫人多く委員のみにても古市博士青山博士斯波博士片山博士山口博士等の夫人ありと

▲救世軍の婦人　東京芝口にある救世軍本營內に先頃婦人救濟會なるもの設置され德田岸子是が監督として專ら醜業婦を救護して正業に就かしむる事に盡力し居るに此程に至り別に婦人愛憐隊と云ふを設け隊長にはデュース中佐夫人副官として水口少校夫人其任に當り主に各區の貧民屈を訪問し內職の紹介をなし或は金品を施與して平民的慈善を爲し居れりとは何時もながらの熱心感ずべし

▲外國人と愛國婦人會　同會の趣旨を賛し外國人にして金品を添へ會員たらんことを申込む者又は單に金品を寄贈する者夥しく既に八十餘名に達し其額亦數萬圓に上れる由なるが同會の規程は外國人をして正會員たしらむることを許さゞれば此等篤志家に對しては特に賛助員として待遇し其厚意に背かざらんことを期すべしと云ふ

▲女子養育院　餘り人には知られざれども舊敎に屬する女子養育院は佛人オクスチンク氏が神田猿樂町女子佛英女學校內に在り現今四五歲より廿七歲迄五十餘名の薄命女子を收容し敎育をなし嫁入さする迄懇切に世話すると云ふ

▲綿入の一枚づゝの寄贈　東京市牛込南山伏町中島行孝妻佐久子は區內出征軍人留守宅へ綿入一枚づゝを新調して寄贈したる其枚數百七十九枚にて此代價は平素節約して得たる貯蓄金の一部の由此等眞の同情あつき人とやいふべからん

寄書歡迎要項社告

每號懸賞募集項目

○美文（半紙又は美濃紙廿四字卅行以内）日本女子大學校教授文學士鹽井雨江先生選
○消息文（半紙又は美濃紙廿四字二十行以内）
○雜文（半紙又は美濃紙廿四字卅行以内）
○ハガキ文（郵便はがき廿四字四行限）女子文壇社編輯局選
○短篇小說（總ふりがな付廿四字百行以内）讀切 俳津柳浪先生選
東京女子高等師範學校敎授文學士尾上柴舟先生選
○新體詩（半紙一枚十句以内）竹柏園主佐々木信綱先生選
○短歌（半紙又は美濃紙一枚三首限）巖谷小波先生選
○新舊俳句（郵便はがき一枚一句限）
○圖畫（二寸五分の三寸判風俗景色十枚以内）山中古洞先生選
▲此外女子文藝又は家庭敎育に關する事項の寄稿は妨なし

投稿締切 は凡て每發行期日の一ヶ月前の事

▲投稿規定は都合により百十三頁の下段に掲出す

例號 獎學 賞與品 規定

▲小說▲美文▲消息文▲雜文の賞品左の如し
○天賞：金壹圓五拾錢
○地賞：金壹圓
○人賞：金五拾錢
（總て相當價格の物品を贈呈すべし）
▲新體詩▲ハガキ文▲短歌▲俳句▲圖畫の賞品左の如し
○天賞：本誌三ヶ月分
○地賞：同二ヶ月分
○人賞：同一ヶ月分
（總て逐號贈呈すべし）
賞品は總て掲載披露後一ヶ月を經過の後美麗の證書を添へ贈呈すべし
天地人賞に當撰者は可成次號發行期日の廿日前に「寫眞」送付あれば美術寫眞版にして印刷の上紹介すべし

定價

女子文壇（每號美術水彩寫眞銅版口畫挿入）每月一回一日發行 春秋二回臨時增刊

一册（大判百頁以上）	前金拾錢	一册定價郵税共金拾壹錢
六册	前金五拾七錢	六册定價郵税共金六拾三錢
十二册	前金壹圓八錢	十二册定價郵税共金壹圓廿錢
十四册	前金壹圓廿六錢	十四册定價郵税共金壹圓四十錢

外國行郵税共拾四錢

注意

●本誌は前金の外一切送本不致候●御申込の前金相切れ候節は無斷送本停止仕候●御注文の號、册數及御住所氏名等は文字明瞭に御認め可被下候●御送金の節郵便爲替には御自分まで一切記入せずに願上候●郵券代用は必ず定價の壹割增（可成壹錢券）に願上候●御狀の未納税は一切受取不申候御發信の際御注意可被下候●御問合の件は凡て返信料添付願上候

廣告

掲載料

種別	普通	特別（表紙二面四面）
一頁（二十四字六十四行）	金九圓六十錢	金十二圓五十錢
半頁（二十四字三十二行）	金四圓八十錢	半頁以下は御斷申上候
一行（五號字二十四字）	金拾五錢	○

一切前金之事

◉廣告取扱（神田區千代田町二番地 今區末廣町三十八番地）博報堂 富士原秀穗

明治三十七年十二月廿九日印刷
明治三十八年一月一日發行

不許轉載

定價金拾錢

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋町二十六七番地 石川金太郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町二十六七番地 株式會社秀英舍

發兌元 東京市京橋區大鋸町十一番地 女子文壇社

直接特約大賣捌所

東京市神田區表神保町三番地 東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目 東海堂
東京市京橋區鎗屋町十三番地 北隆館
東京市京橋區鎗屋町九番地 良明堂
新潟縣長岡町字表一之町 酒井屋書店

貴婦人令孃方御交際の栞

石版極彩色美術繪はがき

四季の美人

市川秀方女史畫

年方畫伯の門下に美人畫専攻を以て屹然頭角を顯はしたる市川秀方女史の筆は人皆後世恐るべしと爲す弊堂今回切に女史に乞ふて春夏秋冬の美人畫四枚を得之れを石版極彩色繪はがきに製版し普く同好の士に頒たんとす乞ふ速かに座右の珍とせられよ

猶ほ仝女史の筆に依り日本美人十二ヶ月幷に和洋大家の粋を集めたるものを續々調製せんとす幸に發行の日を待たれよ

石版極彩色
四枚一組定價金拾五錢
郵税金貳錢

御題新年の山

勅題に因める繪はがきは弊堂顧問孤雁子の當代の知名大家に乞ふて出版せり既に成れるものは尾竹國觀畫伯の筆二枚他は續々調製中なり

定價金十五錢
郵税金二錢

年賀用繪はがき

年方、國觀、永洗、半古、古洞、弘光、金秋、桂舟、諸大家の靈筆に成れる巳年新年に因める繪はがきは他に其類なきことを期せり試みに購ふて其虚ならざるを知り賜へ

一枚金參錢
十枚金廿五錢
郵税十枚迄貳錢

戰争紀念はがき

春夏秋冬四季四組
一組の定價特廿錢並拾五錢
一組石版極彩色

右久しく品切れの爲め諸彦の厚意に背きし夏の部並製第四版を出版せると同時に亦久敷督促を蒙りたる（秋の部冬の部）をも發行す品切れにならざる中急速倍舊の御注文祈上候

以上弊堂發行のもの丶外博文館文祿堂其他各店より發行の繪はがき全部は而かも其各本店より差上候よりは必ず御割引して御取次可申上又舶來上等品ブロマイド、コロンタイプ漆畫肉筆もの一切廉價に御取次申上候は勿論御寫眞頂戴仕候はゞ石版銅版原色版一切美麗に迅速に且つ廉價に御調製可申上候間御披露御引立の程祈上候

此券切取御注文の御方へ（但し總て壹割引にて）
拜送致候（女子文壇第一號は廣告）
御照會は往復はがき御送金は本郷切通局
本郷妻戀坂上 便利堂

東京本郷妻戀町坂上九番地

便利堂 謹白

發行所 本郷妻戀坂上 便利堂
大賣捌所 日本橋檜正町 文祿堂

賣捌所

日本橋區人形町 至誠堂
本郷四丁目 美濃屋
神田神保町 上方屋
横濱第一二 有隣堂
北海道小樽 川南重祐
大阪西區 文德堂
越後長岡 金山商店
讃岐 澁谷通信堂

總裁 伯爵 東久世通禧君

國文學講義

會員募集

講習一年講義錄毎月二回廿四冊完了 ●束修廿錢月費卅五錢一年四圓規則郵劵二錢にて呈す

國勢日に月に發展す**國文の研究**豈之に伴はずして可ならんや本會玆に見るあり懇切博識なる左記諸先生を賛成員講師に仰ぎ整齊なる組織と嶄新なる施設とに由りて、**國語の性質國文學發展の由來**各時代**文學の特色**を一目の下に通觀せしめんとす各時代の文學に亘る講義は實に本書を以て嚆矢とす如何に系統的にして又如何に組織的なるかは乞ふ本誌に就て之を見よ、

文學博士 芳賀矢一君　文學博士 萩野由之君　文學士 長谷川福平君　文學士 堀重里君
文學士 尾上八郎君　學習院教授 和田英松君　文學士 渡邊良法君　文學士 垣內松三君
文學士 武島又次郎君　文學士 高木尙介君　文學博士 上田萬年君　文學士 山內二郎君
高師教授 松井簡治君　文學士 藤岡作太郎君　文學士 藤岡繼平君　文學士 菊地壽人君
文學士 志田義秀君　文學士 森治藏君　高師教授 關根正直君　文學士 杉敏介君

●講習科目大要

一、日本文學史
二、奈良朝文學評釋 祝詞宣命萬葉集等
三、平安朝文學評釋 源氏大鏡三代集枕草紙等
四、鎌倉文學評釋 增鏡太平記盛衰記等
五、足利文學評釋 謠曲狂言舞本連歌等
六、德川文學評釋 隨筆書類戲曲小說俳諧俳文川柳狂歌狂文等
七、日本文法
八、國語研究法

第一卷（十二月廿日）要目 ●日本文學史日本に於ける漢文學の變遷松井敎授●奈良朝文學祝詞宣命堀文學士●平安朝文學三代集武島文學士大鏡藤岡文學士●鎌倉文學增鏡萩野博士●足利文學謠曲狂言森文學士●德川文學隨筆高木文學士戲曲小說山內文學士俳文俳句渡邊文學士●文法芳賀博士●國語研究法垣內文學士●檢定試驗問題解答●俗謠に就て志田文學士●傳說と小說山內文學士●萬葉の話長谷川文學士●文學史料●其他應問文苑、彙報、新著批評等

●**入會**希望の向は此の際御申込を乞ふ

東京神田區西小川町二丁目
（電話本局二八六一番）

國語漢文學會

恭賀新年

堂主 野口安治
編輯局員一同

文學博士建部遯吾先生述

歐洲 學生の生活

洋裝袖珍 正價金貳拾錢郵稅四錢

此書は博士が曾て歐洲に遊び各國の學風を見聞詳述せるもの青年學生の必讀良書

慶應義塾教授菅綠陰先生著

父母と子供

洋裝美本 正價金參拾錢郵稅四錢

本書は世の子を持つ親、人の子を教ふる教育家は勿論何人も必讀有益の良書なり

大内德亮先生編

學生必讀 旅行の友

洋裝袖珍 賣價金拾六錢郵稅二錢

古今東西名士の旅行を知るは此書に限る

發兌 東京市小石川區指ヶ谷町一三三 文光堂
賣捌 東京市神田區表神保町三 東京堂
其他 東海堂、北隆館、良明堂、外全國各書店

▲青年文士大好評▼

編輯 文學士中內蝶二先生 佐々木信綱先生
文學士久保天隨先生 雪中庵雀志宗匠
小笠原盧舟先生

新案賞與法 あり、內容其他は本誌（定價拾壹錢）を見よ

每號卅八年一月より 大改良

毎月二回 一日十五日

筆戰 秀才文壇 良友

春秋二回 臨時增刊

▲定價一册拾錢〇六册前金五拾七錢〇十二册前金壹圓八錢〇郵稅一册壹錢〇郵券代用一割增

▲五卷 第壹號 一月一日發兌

新年の第一號には出版界を驚かしむる無類の大附錄を添ふ、此價値は遥に本誌定價の倍額を有す

（北蓮藏先生揮毫油畫 軍國大觀兵式圖 額面用）

▲石版極彩[illegible]（縱一尺一寸、横一尺六寸）

新刊

軍艦寫眞帖 附 軍歌

袖珍美製 正價五錢 郵稅二錢 製本出來

帝國海軍の精銳一目瞭然。百聞は一見に如かず、少年を益すると多大なり。小學校賞與品又は歲暮年始の贈答に最も妙適なり

發兌元 東京小石川區指ヶ谷町一三三 文光堂
大賣捌 東京堂、東海堂、北隆館、良明堂其他全國書籍雜誌店

明治三十七年第三種郵便物認可

▲本誌は毎號嶄新趣向の三宅克己氏の水彩密畫（石版七色刷）を月別にして挿入す

定價金拾錢
郵税壹錢

東京 株式會社秀英舍印刷